

歯学部ニュース

平成21年度第2号（通算116号）

特集 歯学部卒業おめでとう
歯学部学生だより
留学生紹介

目 次

歯学部卒業おめでとう.....	1
学部長から 前田 健康	
副病院長から 齊藤 力	
卒業生から 坂入久美子・越田 美和	
平成21年度 歯学部卒業生名簿	
退職によせて.....	6
教授退職によせて 染矢 源治教授	
前田 健康学部長から・齊藤 力副病院長から・瀬尾憲司先生から	
総務委員会だより.....	12
平成21年度補正予算要求の示達について 前田 健康学部長	
学生実習設備・機器等の整備について 前田 健康・興地 隆史・魚島 勝美・井上佳世子	
国立陽明大学歯学部(台湾)との姉妹校締結について 林 孝文	
技術教育用 DVD 作成と Web ライブラリーの開設	
歯学部学生だより.....	21
1 年 笠原 由伎・田嶋 里菜	
2 年 大沢 亜美・菅原 清夏	
3 年 荒木田俊夫・杉山 美生	
早期体験実習を終えて.....	29
古市奈津美・丁 怜真・中澤亜香里・大串 早紀	
ポリクリを終えて.....	33
森 恵・北畠 健裕	
歯学体報告.....	37
臨床研修修了にあたって.....	38
岡田 萌・作間 健彦	
大学院修了にあたって.....	40
本間喜久男・川崎真依子・池野 良	
平成21年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名	
平成21年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻論文博士取得者	
平成21年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻修士課程修了者論文名	
留学生紹介.....	47
SULTANA SARA・Marcelo Rosales R.	
Dr. Humayra Binte Anwar・Dr. Md. Al-Amin Bhuiyan	
素顔拝見.....	62
永田 昌毅・吉羽 永子・山崎 学・重谷 佳見	
新美 奏恵・倉田 行伸・池 真樹子・堀 一浩	
診療支援部歯科衛生部門だより.....	70
後藤 早苗	
学会レポート.....	72
浅井 哲也	
学会報告.....	75
同窓会だより.....	76
教職員異動.....	85
編集後記.....	87



卒業を祝して

歯学部長 前 田 健 康

歯学科第40期生の皆さん、口腔生命福祉学科第3期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。卒業までの道のりは決して平坦ではなく、苦しいこと、悲しいこと、いろいろとあったでしょうが、すべてを乗り越えて、卒業の日を迎えるに至る努力を続けてきたことに敬意を表するとともに、心よりお喜び申し上げます。また、この日を一日千秋の思いで待ち焦がれていた保護者の皆様にも心からお祝い申し上げます。

卒業生の皆さんは、この春から、歯科臨床研修医、歯科衛生士、行政職、大学院生など、さまざまな道に進みます。進む道は各人で異なるものの、歯科医学、歯科医療、口腔保健、社会福祉に携わり国民の健康の維持・増進に寄与するという諸君たちの目標は同一であると思います。

歯科医療をはじめとする医療荒廃が日夜報道されています。日本経済がデフレスパイラルに陥り、一向に出口がみえない中、平成22年度診療報酬改訂のニュースが飛び込んできました。平成22年度の診療報酬全体の改定率が0.19%増と、10年ぶりの引き上げとなる中、歯科診療報酬が2.09%という大幅改訂となりました。歯科界にとって久しぶりの明るいニュースですが、手放しで喜んでばかりはいられません。小泉改革以後、勝ち組、負け組がはっきりとし、その格差は広がっています。格差社会は激しい競争により生み出されてきました。いうまでもなく、現代は競争社会です。競争に勝つには地力をつけなければなりません。今日、卒業の日を迎え、皆さんは社会に羽ばたいていきますが、皆さん方が大学教育で学んだ知識・技能・態度はまだ必要最低限のもので、いわば諸君たちは、今また新たなスタートラインに立ったばかりです。社会は、プロフェッショナルである医療人に対して幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感をもっていることを求めています。これらは今までに受けた教育だけでは不十分で、生涯を通じた

学習、研修によって社会的な地位が得られるものです。諸君たちは共通の目標に向かって、さらなる精進が必要です。そのためには自分をさらにスキルアップするための目標を設定し、これに向かって努力してください。このことは現在の競争社会で生き抜いていくために必要不可欠なことです。

大学も競争社会の中にあります。日本の大学間でも、新潟大学の中でも学部間、研究科間での競争があり、いろいろな評価にさらされています。諸君たちが今日巣立っていく新潟大学歯学部もさまざまな評価を受けています。国立大学法人化以降、予算の獲得にも評価に基づいた競争が行われています。国立大学法人の第1期評価が行われ、平成21年度に中間評価が大学学位授与・評価機構から公表されました。この評価結果によると、新潟大学歯学部は教育、研究の両面で高い評価を受けています (http://www.niad.ac.jp/n_hyouka/kokuritsu/hyoukakekka/kanto_koshinetsu/index.html#36)。全国の国立大学法人歯学部の中でも、新潟大学歯学部は教育、研究設備の整備拡充、教員能力の開発が進んでいる歯学部です。諸君たちが社会に出て、困難な状況に直面したとき、それに対応できる体制が整えられています。困ったときには躊躇することなく、また新潟大学歯学部の門をたたいてください。母校はいつまでたっても母校です。母校はいつまでも君たちを受け入れる寛容があります。

今日卒業の日を迎えるにあたり、歯科医療・口腔保健従事者という職業を真摯に受けとめ、新潟大学歯学部を卒業したというプライドを持ち、またプロフェッショナルとしての自信と勇気を持って、社会に対して積極的に貢献することを目指してください。皆さんの今後の活躍を大いに期待しています。



御卒業おめでとうございます

医歯学総合病院副院長 齊 藤 力
(歯科担当)

歯学科第40期生ならびに口腔生命福祉学科第3期生の諸君、またご家族の皆様、この度の卒業誠におめでとうございます。歯学部での課程をすべて修了され、晴れて学士の学位を授与されました。これまでの努力とその成果を讃えますとともに、光り輝く未来に対して心から祝福を申し上げます。

新潟大学歯学部、医歯学総合病院歯科診療部門での学生生活は様々な出来事があったことと思います。歯学祭、歯学部運動会、五十嵐キャンパスや旭町キャンパスで過ごした青春の一頁は、諸君の一生の宝となるはずです。

歯学部歯学科は、従来の「歯」という小領域を中心とした学問の枠組みを見直して歯学を口腔生命科学としてとらえ、これからの歯学界をリードする人材を育成することを目的として教育を行ってきましたが、卒業した諸君は歯科医師国家試験合格すれば直ちに臨床研修歯科医師として大学に附属する病院や厚生労働大臣の指定する病院もしくは診療所で1年間研修施設に勤務し、その後に臨床あるいは研究の第一線で、あるいは公衆衛生など歯科医療行政の分野で活躍することとなるでしょう。新潟大学で学んだ知識や技術は歯科医師としての基礎となります。卒業後は、この基礎の上に何を積み重ねていくかが勝負であると思います。現在の歯科界を取り巻く環境は必ずしも明るいものではありませんが、地道に努力を重ねれば必ず素晴らしい未来が切り開けると信じています。歯科医療・歯科医学は日進月歩であり、生涯に渡って学習を継続することを欠かすことができません。保存学、補綴学、口腔外科学などの専門分野を探究することも大切ですが、私たち歯科医師の専門は歯科・歯学であるということも忘れないでいただきたいと思います。すなわち総合的に顎口腔領域の疾患を予防、治療し、口腔機能を回復させることが歯科医師に求められています。ま

た研究においても歯科医師としての視点を忘れないでいただきたいと思います。これは臨床研究だけでなく、基礎研究においてもいえます。是非、知的好奇心を失うことなく、一步一步努力を重ねていただきたいと思います。歯学部口腔生命福祉学科は、口腔ケア・摂食嚥下に関する高度な専門知識を有しつつ、保健・医療・福祉を総合的に思考・マネジメントできる専門家を養成し、要介護者、障害者の方々が真に必要な保健医療福祉サービスを総合的に受けられる環境を整備するための人材を育成することを目的としていますが、卒業した皆様は第3期生ということもあり、何かと苦労が多かったことと思います。先輩が少ないということは、さぞかし心細いこともあったかと思います。口腔生命福祉学科の歴史は先輩の方々とともに皆様が作り上げてきたものであり、そしてこれからもその役割は続きます。卒業後は歯科衛生士あるいは社会福祉士として臨床の現場で、歯科衛生士養成施設の教育現場で、あるいは大学院に進まれて活躍されることと思います。昨今の少子高齢化が急速に進む中で、諸君に求められる要求はますます高まっていくことでしょう。生涯にわたり学ぶ姿勢を持ち続け、ぜひとも後進の指導もできるプロフェSSIONALになれることを期待してやみません。

新潟大学歯学部、医歯学総合病院歯科診療部門はその使命として将来、様々な分野でリーダーとして活躍するであろう諸君を全面的に支援します。卒業した後もいつでも門をたたいて下さい。

“学びたい”という意欲に応えていきたいと思います。十分に実力をつけた諸君が世界に向けて羽ばたかれることを心から期待しています。最後になりますが新潟大学で学ぶ機会を与えていただきましたご家族の皆様に感謝していただきたいと思います。

卒業にあたって

歯学科6年 坂 入 久美子



新潟大学歯学部 학생 にとって、卒業の季節は春ではなく秋であるような気がします。ほぼ全ての患者様を後輩に引き継ぎ、第二の家のように感じていた技工室の机を明け渡し、朝と夕方の打刻の義務がなくなると、「ああ、大学生活も終わりだなあ」としみじみ感じてしまいます。

この大学生活の中で一番忙しく、だからこそ一番充実していた楽しかった1年間の臨床実習が、10月で終了しました。そんな臨床実習の中でも一番印象的で、10年経っても20年経っても、おそらく一生忘れないであろうという思い出は、何といっても義歯製作でした。

患者様を引き継いで1ヶ月くらい経った日のことでした。担当していた患者様の「入れ歯を作り直したい」の一言で、私の義歯ライフは始まりました。

当時の私はといえば、「本っ当に難しい症例だからね、しっかり勉強してね」と先生が念を押すその症例の、何がそんなに難しいのかも分からないくらいの無知っぷりでした。基本もよく分かっていない私がそんな難しい症例に挑むことは、積み木でマンションを建てるがごとく無謀なことだったと今になって思います。けれど、私にもそれなりに意地というものがあったので「無理なのでやめます」とは言いたくありませんでした。頑張ってみようと思ったのです。

まず、先生に呆られるレベルからは脱しようと、義歯の勉強を始めました。けれど「ローマは1日にしてならず」の言葉の通り、教科書をちよつと読んだからといって知識量が急上昇するなどということではなく、読んでいても「？」マークがあたりどころに散らばることも少なくありませんでした。私のあまりの知識のなさに、おそらく先生も「こ

の子大丈夫かな」というレベルを越えて「この子ダメなんじゃないかな」と思っていたに違いありません。それでも根気よく付き合ってくださった先生には感謝してもしきれません。明日が義歯科の教授審査、という日まで「あなた本当に大丈夫？心配だからちよつと咬合採得の手順言ってみて」と面倒を見てくださり、総合診療部の患者様は神様のように優しい方ばかりだといつも先生方から聞かされていましたが、患者様だけでなく先生も菩薩のようだったものです。

知識量と技工技術というものには間違いなく正の相関があり、そのことから分かるように私の技工技術の方もなかなかのダメっぷりでした。ダメが故に遅く、毎日が提出メ切との闘いでした。中でも人工歯を配列した時は、朝、登校しては人工歯を並べ、お昼御飯を食べては人工歯を並べ、帰りの打刻をしては人工歯を並べ……昼夜問わず、咬合器をカチカチカチカチ咬ませる音を辺りに響かせ、そうして1日かけて配列した蠟義歯を技工士の先生に見ていただくと「まだここが咬んでない」とダメ出しを食らう日々でした。それだけに、技工物のOKが貰えたときはこの世の春と言わんばかりに喜び、また、自分の作った義歯が患者様の口の中に初めて入った時は泣きそうになるほどの感動がありました。

振り返ってみれば自分のダメさが浮き彫りになるような1年間でしたが、諦めずに最後までやり通すことが出来たのは、優しく、ときに厳しく指導してくださった先生方、そして私が落ち込んでいるときに励ましてくれた友人達、そして何より診療の時間が2時間かかっても3時間かかっても、文句ひとつ言わずに「ありがとうございます。次もよろしくね」と笑顔で言ってくださった患者様のおかげだと思います。

6年間の大学生活も、これ以上にたくさんの方々に支えられ、初めて成り立っていたものだと思います。今まで私を支えてくださった全ての方々に、この場を借りて御礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

臨床実習を終えて

口腔生命福祉学科 4 年 越 田 美 和



3 年生の後期から 4 年生の臨床実習に備えて、臨床の現場に初めて出たら、あっという間に時が過ぎ、4 年目の12月上旬、すべての実習を無事に終えることが出来ました。今は、社会

福祉士と歯科衛生士の国家試験に向けての勉強のみとなりました。

4 年生はほぼ実習の毎日で、新大病院での歯科衛生士の実習と、社会福祉施設においても社会福祉現場実習として 4 週間実習をさせていただきました。

社会福祉現場実習では、私は知的障害者授産施設で実習をさせていただきました。知的障害者の方とはあまり深く関わったことがなかったため、最初はどうか接すればよいか分からず不安でした。しかし、施設利用者の方から声をかけてきて下さり、利用者の方に逆に助けられました。4 週間、利用者の懸命に働く姿や地域で生活する姿を見て、障害者の方が地域で自立して暮らしていくために、私たち地域住民の理解と協力が必要なのだと実感しました。障害者と聞くと、偏見や不安を持ってしまうものですが、実際に接してみると、私たちとなんら変わらない感情を持っていて、みんなそれぞれの個性を持った一人の人間なのだと感じるようになりました。

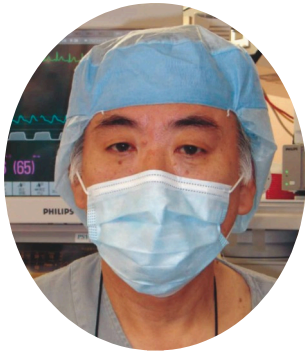
病院実習では、ほぼすべての診療科を回り、診

療補助や実際の患者様の口腔衛生指導や口腔内清掃等も経験させていただきました。実習が始まった頃は、緊張して挨拶もろくに出来なかったり、今まで勉強してきたことも実際の臨床における治療となると今なにをやっているのか分からなかったり、自分が何をしたらよいのか分からず、治療なさっている先生方や看護師の方々等にご迷惑をおかけしたと思います。しかし、実習が進むうちに、治療の内容が分かるようになり、教科書に書いてあることとリンクするようになってきて、次に何が必要かわかるようになってきました。また、患者様の口腔内の機械的清掃をさせていただいたとき等には、お礼を言ってくださる患者様や、アドバイスを下さる患者様もいて、本当に嬉しかったです。

実習が終わってみると、始まる前は長いと思っていましたが、それぞれの診療科が 1 週間もしくは 2 週間の実習で、慣れてきたころに移動を繰り返し、4 年生もあっという間に過ぎてしまいました。未熟な私たちのために、指導して下さった先生方や看護師さん、協力して下さった患者様には本当に感謝です。

今まで、歯科と福祉を学んできて、どちらも大切なことを学んできたと思います。私は歯科衛生士として働こうと考えていますが、歯科の領域でも福祉で勉強してきたことは患者様と接する上で重要だと思います。患者様が安心して歯科を受診していただけるような配慮と技術をさらに身につけていきたいと思っています。がしかしその前に、国家試験の勉強です。先輩の成績が良いため、プレッシャーを感じる毎日ですが、出来る限り頑張りたいと思います。

染矢源治教授退職によせて



痛くなく安全で、快適な 歯科医療を求めて

歯科侵襲管理学分野 染矢源治
(歯科麻酔科)

昭和51年4月に新潟大学歯学部附属病院に赴任して以来34年間の長きにわたって、「短気で、我が儘」を自他共に認める小生は、多くの人々に支えられながら、歯学の領域では特異で、甚だ小さな一家である歯科麻酔科の親父として、楽しく、極めて充実した時を刻むことができました。この機会をお借りして、これまで歯学部の皆様から歯科麻酔科共々に賜りましたご支援、ご協力に心より感謝し、益々のご発展をお祈り申し上げます。

誠にありがとうございました。

〈同窓の大先輩との一夏の出会いから〉

今から40年前、福岡県立九州歯科大学の6年生だった昭和44年8月、臨床実習が夏休みになる1ヶ月間を利用して、四国の足摺岬に近い愛媛県の辺境にある小さな漁業の町で開業していた空手部の大先輩に、大学の許可もなく無理矢理頼み込み、親友と二人で自主的に臨床研修をさせて頂いた。すでに大学附属病院で患者さんの治療を多少経験していたので、先輩の家に居候しながらノンビリ釣りでもして、学生時代最後の夏休みを目一杯楽しみつっほんの少しだけ臨床の勉強をするのが目的で、臨床研修と書けば響きはよいが、ポン友と仕組んだ全くよこしまな発想だった。

しかし、夜の明けやらぬ早朝から診療所の玄関前に置かれた予約の整理番号札を取った後一旦帰宅し、改めて8時30分からの治療を受ける患者さんは、夏休みのため子供も多く、日々80人を超えていた。子供達の喧噪の中、浸潤麻酔や伝達麻酔を駆使して多数齲歯の片顎一括治療や抜歯、嚢胞摘出などを的確かつ効率よく進め、子供達や高齢

の患者さんともコミュニケーションをとり絶大な信頼を得ている先輩の姿に驚愕した。ある日の診療の最後に、先輩の指導を受けながら下顎の埋伏智歯の抜歯をした。時折水銀血圧計で血圧を測りながら、浸潤麻酔に加え、痛みのため伝達麻酔を途中で追加し、3時間余掛かったのに何一つ不満を言わずに耐えてくれた81歳のお婆さん、「痛くて、辛い思いをさせて済みません」と謝ると、逆に「頑張ってくれたね、ありがとう」、ガーゼを噛んだままモグモグと言って帰った姿が走馬燈を見ているように未だ鮮明に脳裏に浮かぶ。

3日間のお盆休みに、金が無いためテントを担ぎ、ローカルバスで県境の峠を越え、高知県の足摺岬でキャンプした以外は遊ぶ暇もなく、また学生にもかかわらず快く治療をさせてくれた大らかな大勢の患者さん達のお陰で悪巧みの思惑は見事に外れたが、僅か1ヶ月の間に大学の臨床実習とは異なる極めて多くのことを学ぶことができ、患者さんにも、同窓の先輩にも感謝の気持ちで一杯になった。いまと違って患者さんを含めた社会全体が極めて鷹揚で、医療紛争など考えも及ばない、真に古き良き時代であった。

大学5年生の頃から補綴が好きで、同級生数人とポーセレンワークのスタディグループを作り、大学の先生と時々日曜日の1日を利用して1年以上にわたり勉強をしていたので卒業後は補綴科にしばらくは残るものと漫然と自分では思っていた。しかし、この一夏の体験で、痛くなく安全で、さらに快適な歯科医療の必要性を痛感し、歯科麻酔の勉強不足がつくづく身に染み、これを契機に

卒業後の進路を急遽変更することにした。

この同窓の大先輩との一夏の出会いが生涯の仕事となった斯学の道へ進むきっかけであった。大学時代の先輩や後輩、同僚や同級生との出会いはその後の人の生き様を左右するほど大切なことであり、同窓の好しみのありがたさを痛切に感じた。学部は、先輩、後輩、同級生らが同じ学び舎で勉強し、遊び、同じ郷で暮らして同じ釜の飯を食い、共に青春時代を過ごした個人の心の拠り所として、また様々な形で個々人の間に強い心の繋がりがあってこそ成り立ち、人が人を思いやる心豊かな人間形成のための意義ある集合体と成り得る。この本質が希薄になれば人の集団としての学部や大学存在の意味は薄く、短に烏（優秀な鷹であるにも拘わらず）合の衆でしかない。このことは、学部を形成する医局など、小集団の場合も同じであろう。

ことさら敷衍するまでもないが、新潟は今も昔も変わらず四季の移ろいが鮮やかで、冬場の雪を代表に、山、川、海を抱く豊かな自然、豊かな食べ物、様々な文化があり、人々は大らかで、最も素晴らしい郷であろう。生きることに厳しい時代だからこそ、最も感性の豊かな青春時代の6年間、研修医、大学院を含めると10年間以上をこの素晴らしい郷で学ぶ学生達は、建物がプレハブから立派な高層建築に変わろうとも、共に優れた歯科医になろうとしてがむしゃらに学び、遊び、ひたすら生きた歯学部創立期、揺籃期の学生気質といつまでも同じであって欲しいと、同じ時代を生きた者として願う。

〈それからの40年〉

大学卒業後、母校に歯科麻酔科がなかったこともあり、また多少の縁あって、歯学部で最初に設置された東京医科歯科大学歯学部歯科麻酔学講座の大学院生として、生涯の恩師となった久保田康耶教授の下で歯科麻酔学を学び始めた。歯科麻酔学講座は医学部よりも設置が1年早く、入局当時の医局は雨宮義弘助教授（後に鶴見大学歯学部歯科麻酔科教授）、平井栄一講師（石岡市開業）を中心に臨床経験の豊富な人材を多く抱えた臨床教室だったが、大学院生は僅かに1年先輩（初めての大学院生）が一人居るだけであった。前年まで続

いた大学紛争の痕跡は殆どなく、勉強は落ち着いてできる雰囲気だったが、研究器材は買ったばかりの動物実験用の人工呼吸器と8CHのポリグラフのみで、しかも大学院入学後間もなく久保田教授は1年間の予定で海外出張のため不在となった。この五里霧中の状態で見つけた一筋の光は呼吸と循環の生理学、循環の薬理学や心電図診断学の面白さであった。これらを中心に成書や文献を無我夢中で読み、おこがましいが、自分なりに良く勉強したと思う。これは後の臨床で大いに役に立ち、大きな自信ともなった。

大学院修了後、東京都立清瀬小児病院で10ヶ月間小児麻酔を研修した後、第2の恩師となった大橋靖教授が主宰する口腔外科学第2講座の数少ない助手の席を麻酔医に割いて頂き在籍していた海野雅浩講師（後に東京医科歯科大学歯学部歯科麻酔学講座教授）の後任として新潟に赴任した。歯科麻酔専門医は口腔外科学第1講座に在籍していた谷田部雄二先生（新潟市開業）と僅か2名で、他大学の歯科麻酔班に比べて極端に少なかった。単心室や極型のファロー四徴症など様々な先天性心臓奇形を合併する唇顎口蓋裂の乳児ら、ペースメーカー植え込み患者、重症の糖尿病患者、透析患者等々、それまで歯科麻酔領域では症例報告の全くなかった幾多の困難な症例の麻酔管理を次々と無事に成し得ることができた。今日に比べると、人もいなく、知識は乏しく、器材も稚拙で、優れた薬剤も無く、極めて劣悪な状況下ではあったが、当時成しえる最善を尽くして麻酔管理を行った。しかし、日本歯科麻酔学会でこれらの症例を発表する度に、こんな危険な患者にどうして麻酔をしたのかと他大学の偉い教授連中にいつも質問され、叱責されはしたが、その後に他大学からも同じような症例が次々と報告されたのを見ると斯学の発展に大いに役に立ったと思う。中には辛い思いの残った症例も幾つかあるが、これらは全て思い出深い、そして後の自検例にとっても参考になり、貴重な経験となった。

臨床症例の一例、一例を大事にして、その中の問題点を捉え、あるいは困難な問題に対して暗中模索の中、悩み、解決に向かって自ら調べて懸命に学び、解決策を見いだすことのみが臨床家が育

つ術であることを久保田教授、大橋教授、両恩師から教わった。ライオンは子供を崖から落とし、自ら這いずり上がった子だけを育てるという。温室で蝶よ、花よと手取足取り指導して大切に育てることも方法の一つかもしれないが、最高学府で学ぶ者、最高学府を卒業した者に対し、鬼の心を持って放置することも少しは必要であると思う。いずれは独り立ちし、また、歯学教育のカリキュラムによる必然的な知識の不足部分は自ら学ぶしか解決できず、成長はありえないからである。

〈患者さんから学んだこと〉

40年間の歯科麻酔の仕事の中で、最後の拠り所として歯科麻酔科に紹介されて来る非定型顔面痛や神経因性疼痛などの慢性疼痛、癌性疼痛、末期癌の終末医療、等々の疾患は確実な治療法がないことが多く、歯科麻酔医としては極めて辛い思いをした。激しい痛みや直面する死への不安や絶望、悲しみのために打ち拉がれて涙を流す患者さんを前にして、どうすることもできず、ひたすら訴えを聞くことしかできなかった。これらの患者さん達のそれぞれに最も合う治療法（narrative therapy）を模索しながら、神経ブロック、モルヒネ鎮痛療法、あるいは鍼灸、理学療法などの補完医療（alternative therapy）や緩和医療（palliative therapy）を行う傍ら、診察時の心と心の交流を通して人として信頼し合い、病悩を真に共感すれば患者さんは次第に心穏やかに、そして笑顔を取り戻してくれることを学んだ。治療により、辛い病で苦しんでいた患者さんに笑顔が戻ることで得られる幸せは、いうまでもなくささやかではあるが、いつの時代でも変わらない医療の真髄であろう。歯科治療の内容だけにこだわり、ともすれば患者の心に無関心になりがちな一般歯科治療ではなかなか得られない医療人としてのしみじみとした幸福感、喜びを患者さんからこれまで幸いにも沢山頂くことができたことを心から感謝し、歯科麻酔は素晴らしい仕事であり、また歯科麻酔医であることを誇りに思っている。歯科麻酔医として、日々の診療では口腔外科医や医師と同じように患者さんの死と常に直接対峙して

きた。手術や全身麻酔に伴う不安や病死への恐怖や不安をどうしたら和らげられるのか常に苦慮し、人の命の尊厳や心の琴線と常に向き合いながら、これまで患者さんやその家族に接してきた。言い換えれば、患者さんと共に歩み、患者さんに教えられつつ歩んだ40年といっても過言ではない。

最近、歯科医は「人にとって食べることは命に拘わること、口腔疾患と全身は拘わっている、だから命を扱う職業だ」と声高らかに話す。そうであるなら、全ての歯科医は一度でいいから自ら受け持つ患者さんの死に直接立ち会い、これによってのみ知ることができる医療人としての辛さ、人の命の尊厳を知るべきであろう。念を押すようだが、いま歯科医は、ことさら人の命を取り扱っているという真摯な感性が求められている（医歯一元論の一要素）。それでこそ、食べることの大切さを人に説得できるものとする。EBM だけや口先だけでは病悩の全ての人を心底納得させられる筈がないと思うからである。

〈プロローグ〉

赴任時のプレハブ研究室からスタートして34年の歳月を経た現在、麻酔の知識と医療技術は目を見張るほどに格段の進歩を遂げた。そして、これらは、少人数ではあったが、自ら学び、成長した精鋭の後輩に着実に受け渡すことができたと思う。固より浅学非才のため、忸怩たる思いはあるが、見事に大きく育った医局員や（建）物を眺めると心から嬉しさが込み上げてくる。

繰り返しになるが、これまで歩んで来られたのは同窓の大先輩との学生時代の一夏の出会いから始まり、そして、人の命に拘わる医療に伴う艱難辛苦を共に味わい、治療の成否に共に一喜一憂しながら、物心両面で支えていただいた恩師や先輩は勿論、同僚、後輩を含めた尊敬できる多くの素晴らしい人々との邂逅があったからこそであり、いま、ひたすら感謝の気持ちで一杯である。

退職後もこれらのことを最も大切にしつつ、僅かになった人生の新たな旅に出たい。

染矢源治教授のご定年退職によせて

歯学部長 前 田 健 康

新潟大学大学院医歯学総合研究科歯科侵襲管理学分野教授染矢源治先生、無事つつがなく、ご定年退職の日をお迎えになり、誠におめでとうございます。染矢源治先生が平成22年3月31日をもってご定年退職されるにあたり、新潟大学歯学部、大学院医歯学総合研究科および医歯学総合病院に対する長年にわたる教育、研究、臨床におけるご貢献に敬意を表するとともに深く感謝の念をささげます。

染矢先生は、1970年、九州歯科大学をご卒業後、東京医科歯科大学大学院歯学研究科（臨床学系歯科麻酔学専攻）に進まれ、1976年、同大学院修了し、歯学博士の学位を修得されております。1976年、新潟大学歯学部第二口腔外科学講座（主任：現大橋靖名誉教授）助手に採用され、歯学部附属病院講師（1977年）、歯学部助教授（1981）年を経て、1990年に新設された新潟大学歯学部附属病院歯科麻酔科の初代教授にご就任されました。2001年の大学院医歯学総合研究科の新設に伴い、歯科麻酔科は顎顔面再建学講座 歯科侵襲管理学分野となり、染矢先生は大学院博士講座担当教授として、教育、研究、臨床に情熱を注がれて参りました。また、この間、2000年からは歯学部附属病院副病院長にご就任され、同病院の管理運営にご尽力されました。

歯科麻酔学は一般歯科診療、特に口腔外科手術等、精緻な全身管理、疼痛管理を行う歯科医学・医療の重要な学問分野の一つであることは衆目の一致するところですが、大学院部局化前の歯学部では、種々の状況から病院診療科である歯科麻酔科を講座化することが困難でありました。また、教員定員削減問題から、診療科定員を増やすことができず、膨大な仕事量に対する人員の慢性的な不足が続いておりました。このような中、染矢源治先生は朝早くから手術場に来られ、ご定年の日まで、自ら率先して、全身麻酔をかけておられま

した。先生は教授会の納涼会、忘年会などことあるごとに、私どもに歯科麻酔の重要性、窮状を熱心に説かれ、2007年に私が歯学部長に就任した際の重要事項としてあげられていた「教員定員の適正化を目指した教員の再配置」の中でも、歯科侵襲管理学分野の充実が優先すべき課題の一つでありました。ご存じのように、法人化移行前から新潟大学では、継続的に行われていた教員定員削減に加え、流動化定員の拋出があり、声を大にして既得権を主張する教授がいる中で、教員定員の再配置は困難を極めました。教授会構成員のご理解もあり、今年度から歯科侵襲管理学分野に大学院担当助教1を配置することが可能となり、大学院講座として教授1、准教授1、助教2の形をとることができました。これまでの染矢先生のご苦勞に学部長として少しは応えることができたのではないかと考えております。また、教員定員要求の厳しい中、教授会のご理解を得、優先的に歯科侵襲管理学分野の後任教授の選考を進めることができましたことも、染矢先生が初代教授として、ご苦勞の中、蓄積されてきた実績、そして先生の熱意のたまものだと考えております。

高齢化社会が進む中、65歳という年齢は人生の通過点の一つにしか過ぎません。超高齢社会の到来、疾病構造の変化、国民の医療に対する意識の変化、価値観の多様化が進む中、医歯学総合病院の社会的重要性、果たすべき役割が高まってきています。大学を取巻く状況が混沌としている中、情熱ある先生をご定年とはいえ、お送りしなくてはならないことは誠に残念でたまりません。先生の今後のご健勝とますますのご活躍をお祈り申し上げますとともに、ご在職中と変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう、心からお願い申し上げます。長い間、誠にご苦勞さまでした。ご定年後の第二の人生を健やかに過ごしてください。ありがとうございました。

染矢源治先生に感謝

顎顔面再建学講座組織再建口腔外科学分野 齊 藤 力
医歯学総合病院副病院長

この度、停年を迎えられる染矢源治先生の新潟大学歯学部発展に対する多大な貢献に対し、衷心より感謝し厚く御礼申し上げます。平成14年に行われました歯学部附属病院と医学部附属病院の統合による医歯学総合病院の設置、平成18年の東病棟完成に伴う歯科/口腔外科病棟移転と手術室増設に伴う歯科/口腔外科手術室の移転、および平成21年10月の新中央診療棟完成に伴う歯科/口腔外科手術室の再移転は、口腔外科と歯科麻酔科にとりまして大きな出来事が続きましたが、いずれの時にも何事もなく安全かつ順調に手術を行うことができましたことは、偏に先生の御尽力の賜と思っております。

歯科麻酔は旧口腔外科学第二講座の中にあったことから、現在でも3科（歯科麻酔科、口腔再建外科、顎顔面外科）合同の医局旅行や、忘年会が行われ、さらには日歯大新潟生命歯学部の口腔外科、歯科麻酔科とともに両校で新潟口腔外科・歯科麻酔科集談会を続けております関係で、常日頃から先生からは一方ならぬ高誼に預っております。先生は覚えていらっしゃると思いますが、最初にお会いして話をさせていただいたのは昭和58年に新潟大学を訪れた時のことでした。そのときの第一印象は「怖い先生」でした。私は平成13年11月に新潟大学歯学部へ赴任することになりましたが、爾来、今日に至るまで染矢源治先生御

自身による全身管理下で多くの手術の執刀をさせていただきました。第一印象とは大きく違い、決して怖い先生ではありませんでした。何時でも安心して手術に専念することができましたし、大変光栄なことと思っております。先生は全身麻酔が難しいと思われる症例でも真剣に対応策に検討をしていただき、常に患者さんの立場に立って第一線で麻酔をかけられているのを目のあたりにしてきましたが、その姿勢から学ぶべきものは多くありました。先生は医局員には大変厳しい反面、患者さんに対してはとても優しく、なかでも口唇口蓋裂などの顎顔面口腔領域の先天異常患者さんやその家族には就中優しく接していたのが印象的でありました。手術後もたびたび病室を訪れては患者さんやその家族といろいろな会話をされているところをみるにつけ、医療の本来のあるべき姿を言葉ではなく実践で示されてこられたものと思います。診療上のことでは、時に議論もしましたが、先生から多くのことを学ばせていただきました。

先生におかれましては、これからは大好きな魚釣りを思う存分に楽しまれることと思いますが、今後とも、後に続くものに対して御指導、御鞭撻を御願いたしますとともに、先生の益々の御健勝と御活躍を心より祈念申し上げまして御退任の祝辞と感謝の辞とさせていただきます。

染矢教授ご退官に寄せて

歯科侵襲管理学分野・准教授 瀬 尾 憲 司

平成元年6月、新潟大学歯学部附属病院に歯科麻酔科が設置され、染矢源治第2口腔外科助教授は平成2年1月16日付で同診療科の教授に就任されました。染矢教授は昭和51年に東京医科歯科大学歯学部歯科麻酔学教室から海野前東京医科歯科大学歯学部歯科麻酔科学教室教授の後任の専従麻酔医として新潟大学歯学部へ赴任されました。それ以降、歯学部における全身麻酔・精神鎮静法などの全身管理から、歯科麻酔学の学生教育に三十年近くの長きにわたり日夜奮闘されてきました。歯学部附属病院での全身麻酔下手術が始まった昭和43年に69例であった手術件数も次第に増加し、昨年の平成21年では中央手術室の症例数だけで全身麻酔374例、精神鎮静法165例となり、さらに外来における全身管理も増加傾向にあるという多忙の毎日です。平成4年には10ヶ月間文部省在外研究員としてアメリカ合衆国ピッツバーグ大学、カリフォルニア州立大学ロスアンゼルス校で歯科麻酔学を研修され帰国。アメリカで慣れ親しんだ静脈麻酔薬であるプロポフォールを積極的に取り入れて使用し、日本の口腔外科手術での安全性と有効性を発表しました。平成8年には第24回日本歯科麻酔学会総会を新潟市内で主催されました。以来、歯学部附属病院では副病院長を、日本歯科麻酔学会では退官までの長い期間、理事という大役を果たされて、日本歯科麻酔学会の法人化、歯科麻酔専門医制度の確立、さらには倫理規定の創設など歯科麻酔科学の発展に大きく貢献されました。

歯科麻酔科の診療業務は中央手術室での全身麻酔と精神鎮静法を利用した局所麻酔管理をはじめとして、歯科麻酔科診療室におけるペインクリニック、歯科心身症外来、障害者歯科治療などをは

じめとした精神鎮静法など多岐に及びます。朝早くから手術室に缶詰め状態になり、遅くなると翌日の朝方までかかることも決して珍しくはありません。したがって、講義室以外では学生の皆さんや歯科の先生方に昼間お目にかかることが少ないのも仕方がないことであり、昼食でさえも手術室の控室で済ませることが多いのです。手術は何時何が起こるか分からないことと、時間が大変不規則であるために持ち場を離れることができないのです。こうした不規則な生活を教授は歯科麻酔科の開設の10年前からこの3月のご退官まで続けてこられました。

臨床からみた染矢教授の印象は「非常に慎重」です。安易な予想での手術の計画を決して許しませんでした。どんなに口腔外科が望んでも決して首を縦に振らない様子を脇で何度も目にしてきました。しかしこれも患者の安全性を第1に考えたことの表れでしょう。そのお蔭もあって当科では今まで麻酔事故がありません。これは当科が誇るべきことですが、一方では学会発表の演題を捻出するときに症例報告の話題がなくて困ったこともありました。歯科麻酔とは「痛くなく、安全で、快適に」をいつも口癖のように繰り返して、歯科治療における患者の安全性を重視してこられた姿勢には敬服いたします。私たちが最も引き継ぐべき訓戒でしょう。

ご退官直前には体調を崩すことが多くなり、宴会でもお酒を飲まれないことも多々ありました。しかしこれからは体調に留意していただき、趣味の“釣り”を十分に楽しまれ、心と体の休養を取られることを祈念いたします。本当に長い間ご苦労様でした。

平成21年度補正予算要求の示達について

歯学部長 前 田 健 康

この度、平成21年度補正予算に要求していた「研究用光脳機能イメージングシステム」が文部科学省により採択され、示達されました。以下に、その概要について説明します。

高齢社会を迎えた日本にとって、生活の質（QOL）の改善が急務であり、摂食・嚥下機能は生命と生活の質（QOL）の維持に不可欠な基本行為である。摂食・嚥下機能をはじめとする口腔機能を正常に維持することにより、QOLの向上・生きがいを見つけ豊かな生活を送ることができる。摂食・嚥下という動作は顎やノドの単純な運動ではなく、巧妙かつ厳密な脳の制御のもとに、口腔・咽頭・喉頭のさまざまな器官が連続的かつ同時進行的におこる多器官協調運動である。しかしながら、この分野の基礎・臨床研究の社会適用性は高いものの、摂食・嚥下機構に関する研究は医学・歯学の境界領域であるため、この分野の研究は極めて遅れています。

新潟大学医歯学総合研究科・口腔生命科学専攻では、摂食・嚥下機能に関する機能学的・形態学的研究を進めるとともに、得られた研究成果の摂食・嚥下障害患者への治療に応用している。さらに、地場産業と共同して食品開発を行い、摂食・嚥下障害患者食、災害食の開発を行ってきた。摂食・嚥下機能を中心とした口腔機能の維持向上に関連した学際的活動に対する社会的な関心が急速に高まっている中、脳機能に着目した摂食・嚥下機構を学際的・統合的に研究を進めるための「研

究用光脳機能イメージングシステム」を導入し、社会的要請に的確に対応し、口腔機能の維持向上を基点とした研究分野の飛躍的推進を図るものである。

本システムは、摂食・嚥下機構を学際的・統合的に解明するための設備である。脳機能イメージング装置（近赤外光脳機能イメージング装置、脳波計）、摂食嚥下機能解析装置（嚥下ワークステーション、生体電気信号記録装置）、ニューロン・グリア形態解析装置（デジタル透過型電子顕微鏡、正立型・倒立型共焦点レーザー顕微鏡）、ニューロン・グリア細胞機能解析装置（セルソーター）から構成され、脳を基点とした咀嚼・嚥下機能をイメージングできるといった機能が特徴であり、このことにより咀嚼・嚥下機能の学際的・統合的解析を可能となります。これらのデータは学内LANで提供・共有することが可能となっています。

脳血管障害などの疾患による摂食嚥下障害患者の多くは誤嚥性肺炎で死亡することが多く、その数は年間1万人を超え、高齢化社会の大きな問題となっています。摂食嚥下機能を正常に維持することにより、QOLの向上・生きがいを見つけ豊かな生活を送ることから、摂食嚥下機構の神経機構の解明は学術的な意義に加え社会的貢献度は高いと考えられます。これらのシステムは平成22年3月までに設置され、4月から運用が開始されることとなっています。

学生実習設備・機器等の整備について

歯学部長 前 田 健 康



この度、平成21年度政府予算、平成21年度新潟大学学長裁量経費、歯学部教育経費等により、学生実習に関わる設備・機器が整備されました。主な内容は、E'棟4階保存・矯正実習室にファントム・シミュレーションシステムが設置され、E'棟5階補綴・小児実習室のタービン、エンジン、マネキン、実習椅子を更新しました。また、

B棟2階組織・病理実習室では学生実習顕微鏡ならびにデモ用顕微鏡を更新しました。さらに、大学院GP事業に関連して、コンテンツ作成マシンが配備されました。E'棟4階、5階の実習室整備に関しては既存設備の廃棄、模様替え、新規設備の設置等、大がかりな整備となりましたが、関係分野教員、事務職員の方々の多大なご協力によって無事整備を完了することができました。ここに厚く御礼を申し上げます。

ファントム・シミュレーションシステム（E'棟4階保存・矯正実習室）

う蝕学分野教授 興 地 隆 史



4階実習室にはこれまで臨床シミュレーションシステム（クリンシム、モリタ製作所製）が21台設置され、学部学生（歯学科および口腔生命福祉学科）、研修医、あるいは大学院生を対象とした各種実習教育に活用されていました。ところが歯学科学生（定員45名）全員が同時に実習を行なうことができず、カリキュラム編成上の障害となっていました。そこで今般、同一仕様のシミュレーションシステムを29台増設するとともに、既存設備についてもマネキン（ファントムヘッド）を更新し、計50台の「ファントム・シミュレーションシステム」として整備しました。

本システムはシミュレーションユニットおよび技工機で構成されており、歯の切削をはじめとす

るチェアーサイドでの治療操作の習得を主眼としたものですが、技工操作を伴う実習にも対応可能です。シミュレーションユニットには診療用ユニットと同様の機能・機器が装備されるとともに、生体とほぼ同様な可動性を備えたファントムヘッドが設置されており、診療室の環境を可及的に模した形で実習が可能となっています。従って、臨床場面を十分シミュレートした形で基礎実習を実施できるのみならず、臨床実習や卒後研修期間中での自己トレーニング、さらには大学院コースワークとして行うアドバンストな内容の実習にも十分対応可能となっています。さらに、各ユニットにはモニターが設置されており、映像を配信することができます。隣接する示説室には、平成20年度学長裁量経費の援助により、「歯科臨床シミュレーション教育用マルチメディアデモンストレーションシステム」がすでに設置され、ライブカメ

ラ、PC、DVD、VTR等を活用した各種デモンストレーション映像の作成、提供が可能となっていますが、これらのさまざまなデジタル教材を実習中に配信することで、臨床技能の習得をより効果的に支援できます。

なお、4階実習室の一角にはこれまでコンピュータ支援実習教育シミュレーションシステム(SATV、モリタ製作所製)が設置され、診療姿勢等の実習教育に活用されていましたが、これらは5階に移設され従前と同様に利用可能となっています。

以上のように、今回の「ファントム・シミュレーションシステム」の整備により、チェアーサイドで必要な臨床技能の円滑かつ効果的な習得が強力に支援されるとともに、はじめに述べたカリキュラム編成上の問題も解決されます。昨今、臨床実習にご協力頂ける患者様が減少傾向にあることは



否めず、チェアーサイドで臨床スキルを直接習得する機会が必ずしも十分とならないことが懸念されるのですが、それを補うのみならず、より高度な技能習得をも可能とするシミュレーション施設として、今後の技能教育に大きく貢献することが期待されます。

基盤設備の更新 (E' 棟 5 階補綴・小児実習室)

生体歯科補綴学分野教授 魚 島 勝 美



E' 棟 5 階の実習室は補綴・小児実習室とされていたものの、4階の実習室設備の老朽化により実質的に使用不能であったため、この数年間はすべての模型基礎実習がここで行われており、その運用には苦勞していました。この度の予算により、かなりの部分が整備されましたので、その概要をご報告致します。

(1) 歯学科入学定員減少に伴う実習用機の削減

従来は85台の実習用機がありましたが、現在の歯学科入学定員45名に整合するように一部老朽化した機を廃棄して60台としました。これにより実習室後方のスペースが空きましたので、ここに石膏コーナーを設けてより機能的な動線を確認しました。

(2) 石膏コーナーの整備

従来は石膏コーナーが実習スペースとやや離れていましたので、実習中の動線が長く、効率性に問題がありましたが、今回の整備によってより使いやすくなりました。

(3) タービン、エンジン、マネキンヘッド、実習用椅子、ライトの更新

老朽化して故障の多かった回転切削器具をすべて更新し、マネキンヘッドもすべて4階と同じものに更新しました。マネキンへの模型の装着はより容易になり、口唇付きですので、患者様を意識して形成練習を行うことができます。また、実習用の椅子とライトも更新し、実習しやすい環境となりました。

(4) シミュレーション実習室の整備

従来実習用の器具保管庫として使用していた部分に4階のシミュレーションユニットを移設し、独立したスキルラボとしました。4階の新しいシ



写真奥が実習スペースとなり、その手前に石膏コーナーを配置しました。



タービン、エンジン、マネキンヘッド、椅子、ライトが新しくなりました。

ミュレーションユニットと共に、より臨床を意識した実習が行えるようになっています。これに伴

い、実習用の器具保管庫は旧実習スペースの一部に整備し、より使用しやすくなっています。

学生実習用顕微鏡等（B棟2階組織・病理実習室）

口腔解剖学分野教授 前田 健康

平成21年度新潟大学学長裁量経費と歯学部教育予算の措置により、30年以上、組織学・病理学等学生実習に供してきた学生実習用顕微鏡50台を更新しました。今回更新した顕微鏡は、(独)カールツァイス社製 Primo Star です。この Primo

Star は(財)日本産業デザイン振興会が主催する「2006年度グッドデザイン賞」(G マーク)を受賞している最新型の学生実習用顕微鏡です。これまで有していなかった×100の油浸レンズが標準装備され、また環境に優しいLED 照明が装備さ



れています。また、同時にデモ用顕微鏡（Axio Scope）も更新し、高精細デジタルカメラが装着され、取り込まれた顕微鏡画像はリアルタイムでスクリーン、モニターに描写することが可能となっています。これらの機器更新により、①精度の高いレンズを備えた実習用顕微鏡を設置することにより、学生が目的とする構造をより詳細に理解できる、②最新の人間工学に優れた実習用顕微

鏡を設置することにより、長時間に及ぶ顕微鏡観察による学生の負担が軽減できる、③既存のハイビジョンモニターと高分解能を有するデジタルカメラを配備した顕微鏡システムを導入することにより、典型的な組織像を学生に供覧することが可能となり、学生の正常また病的構造の理解が容易となることが期待されます。

コンテンツ作成マシン

大学院 GP 特任准教授 井 上 佳世子



H20年度より大学院教育改革支援プログラム（大学院 GP）に採択された「プロジェクト所属による大学院教育の実質化」では、大学院学生が従来の教育研究分野ではなく、専攻推進の3大プロジェクト研究チームに所属することにより、大学院修了者の質の担保を確保することを目指すの一つとしています。プロジェクト所属の複数の指導教員による学際的教育を推進するために不可欠な機器として、e-Learningのためのコンテンツ作成マシン 3eRec II（木村情報技術株式会社）が導入されました。従来、講義の様子をオンデマンド学習用のコンテンツ化するには、ビデオカメラ撮影、煩雑な編集作業が必要であったと思います。また、ビデオ撮影では当然ながら、スライド画面が PC に比べると不鮮明でした。この 3eRec II では講師の PC を液晶プロジェクタに接続するように、同様のケーブルでマシンへ接続し、ソフトを起動、スタート、ストップのボタンを押すだけでコンテンツ作成が可能です。鮮明な PC デスクトップの動きと、マシンに接続されたマイクを使用して音声も同時に取り込むことができます。操作の簡便さは、こちら <http://www.k-idea.jp/3e/rec2/> の動画でご覧いただくことができます。今回導入された 3eRec II

は HP よりさらに改良された最新モデルで、Web カメラやビデオカメラの映像を、スライドと並列で取り込むことも可能です。作成された映像は wmv（Windows Media Video）形式のコンテンツとして保存されます。平成22年度に開講予定の大学院基礎・臨床連続講義では、3eRec II を用いた完全コンテンツ化を目指し、e-Learning のコンテンツ充実化を図ります。なお、3eRec II はキャスター付ラックにコンパクトに収納されており、移動も簡単ですので、多くの場面で効率的なコンテンツ作成が期待できます。使用を希望される方は大学院教育開発センター（歯学部大会議室隣）までお声かけ下さい。



国立陽明大学歯学部(台湾)との 姉妹校締結について

顎顔面放射線学分野 林 孝 文



新潟大学歯学部は2009年12月8日に、台湾の国立陽明大学歯学部との間で姉妹校締結を行ないました。国立陽明大学は、台北市に本部を置く台湾の国立大学で、農村部の医療の質の向上を目指した医科大学として1975年に設置され、

1994年には台湾教育部より医学指向の包括的な大学として認定されました。歯学部については、1976年に歯学系の学生募集を開始し、歯学院としては2000年に認可され、これまでに800人以上の歯科医師を輩出してきました。歯学院は臨床歯学研究所と口腔生物研究所の2つより構成され、基礎科学教育と臨床トレーニングの両輪をなしています。

新潟大学歯学部では、これまで平成20年度・平成21年度の夏季に同大学歯学部学生を短期留学生

として受け入れてきた実績があります。このたび、国立陽明大学歯学部より申し入れがあったために、お互いの学術レベルの向上や人材交流のために、姉妹校締結を行なうこととなりました。

陽明大学で行なわれた協定調印式には、陽明大学からは陳宜民国際部長、李士元歯学院長、許明倫臨床歯学研究所長、洪善鈴口腔生物研究所長らが、新潟大学からは山田好秋国際担当副学長、前田健康歯学部長、林孝文副学部長、永野俊明医歯学系事務室副課長が出席し、前田歯学部長による講演の後に、協定調印書のサインが行なわれました。またこれに先立って、陽明大学の許萬枝教務部長との会談も行なわれました。この協定により、日本人学生の海外留学と優秀な留学生の受け入れが一層活発となり、さらに学部を越えた大学間での交流協定に発展することが期待されます。



陽明大学歯学部にて（左より永野俊明医歯学系事務室副課長、山田好秋国際担当副学長、前田健康歯学部長、許明倫臨床歯学研究所長、林孝文副学部長）



陽明大学・許萬枝教務部長と山田副学長の会談



陽明大学・陳宜民国際部長と山田副学長



陽明大学・洪善鈴口腔生物研究所長と山田副学長



陽明大学・許明倫臨床歯学研究所長と前田歯学部長



陽明大学・陳宜民国際部長と前田歯学部長



陽明大学・李士元歯学院長と前田歯学部長

技術教育用 DVD 作成と Web ライブラリーの開設

新潟大学歯学部学務委員長 小 野 和 宏



新潟大学歯学部では、21世紀の社会動向を見通し、1998年度より教育改革を精力的に推進しています。生命科学の急速な発展により、日々、新しい情報が生まれ、その量は人間の処理能力をはるかに超えている今日の状況の中では、従来の知識詰め込み型教育は通用しなくなってきました。また、大学のユニバーサル化にともない、さまざまな学生が入学してくる現実を踏まえると、もはや6年間の大学教育では専門性の高い歯科医師を育てることは不可能であり、むしろ大学教育を歯科医師としての生涯学習の最初の6年間と位置づけ、課題探求・問題解決能力の育成を重視し、その後に続く大学院での学習を通して専門性を主体的に向上させうる人材を養成すべきであるとの基本的認識に立っています。すなわち、大学教育では知識・技術・態度教育を密接に関連させ、学生の知的好奇心を喚起する教育課程を構築し、深い教養と歯科医師に求められる基礎・基本を着実に身につけさせる一方、専門性の一層の向上は大学院教育に委ね、課程制大学院教育の実質化を図り、大学・大学院教育の連続性のもと、質の高い歯科医師の育成を目指しています。なお、新潟大学歯学部の教育実践は、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」ならびに「大学院教育改革支援プログラム(大学院GP)」に採択されました。

このような教育改革の流れの中で、技術教育の改善のために新たな取組を開始しました。ご存知

のように、歯学教育の特徴の一つとして、技術教育の占める割合が高いことがあげられます。技術は文章を読み、図を見ただけで獲得されるものではなく、技術の基盤となる知識を理解したうえで、実際に見て、自分でやって、はじめて身につくものです。これまでは、授業の最初にデモンストレーションを行い、その後、模型実習や相互実習を行っていましたが、多数の学生を対象としたデモンストレーションでは、全員に細かい作業を示すことは難しく、また学生にとっては、一度、見逃してしまうと、あとで学習する機会はほとんどないのが実状でした。さらに、患者診療に臨むにあたって復習するにしても、要点をメモしたノートを頼りに、デモンストレーションを思い出してみるのが精一杯であったことでしょう。そこで、これまでの課題を克服するとともに、技術修得における学生主体の学習を支援するために、各分野の教員と協力してコンテンツの検討を進め、患者様への説明・同意のもとに、実習・実技内容の映像とその要点を解説したDVDを作成しました(写真1、2)。2007～2008年度は大学教育、2008～2009年度は大学院教育を中心に、以下の教材を開発しています。これらDVDは授業のデモンストレーションに活用されるとともに、歯学部ホームページ上に開設したWebライブラリー(写真3、4)から、IDとパスワードを入力することによりリアルプレーヤー形式でストリーミングにより視聴できるようにしています(学生・教員限定)。学生から高い評価を得ており、引き続き2010年度も教材の充実を図る予定です。

●大学教育（全23巻）

「歯内療法学実習 Vol.1～2」（う蝕学分野）
「レジン修復実習 Vol.1～2」（う蝕学分野）
「インレー実習」（う蝕学分野）
「臨床予備実習」（う蝕学分野）
「カービング実習 Vol.1～3」（摂食機能再建学分野）
「歯科矯正学基礎実習」（歯科矯正学分野）
「歯科矯正学トレース実習」（歯科矯正学分野）
「支台歯形成実習 Vol.1～2」（生体歯科補綴学分野）
「全部鋳造冠用印象採得実習」（生体歯科補綴学分野）
「部分床義歯実習 Vol.1～3」（摂食機能再建学分野）
「全部床義歯実習 Vol.1～2」（摂食機能再建学分野）
「摂食機能療法実習 Vol.1～2」（摂食・嚥下リハビリテーション学分野）
「ドライマウス治療実習 Vol.1～2」（摂食・嚥下リハビリテーション学分野）



写真1 DVD 教材

●大学院教育（全15巻）

「ラット骨膜採取」（歯科基礎移植・再生学分野）
「培養骨移植」（歯科基礎移植・再生学分野）
「顎裂部腸骨移植術」（顎顔面口腔外科学分野）
「歯の移植」（組織再建口腔外科学分野）
「粘膜移植」（組織再建口腔外科学分野）
「Le Fort I 型骨切り術」（組織再建口腔外科学分野）
「下顎枝矢状分割術」（組織再建口腔外科学分野）
「矯正歯科臨床ライブラリー」（歯科矯正学分野）
「口腔インプラント埋入手術」（顎関節治療部・インプラント治療部）
「摂食・嚥下機能評価 Vol.1～2」（摂食・嚥下リハビリテーション学分野）
「下顎運動測定法」（摂食機能再建学分野）
「デンタルインプラント埋入手術」（顎関節治療部・インプラント治療部）
「埋伏智歯抜去術」（歯科総合診療部）
「マイクロエンドドンティクス」（う蝕学分野）



写真2 DVD ライブラリー



写真3 Web ライブラリー（大学教育）



写真4 Web ライブラリー（大学院教育）



チャレンジ

歯学科1年 笠原由伎

私たち1年生は、五十嵐キャンパスで教養を勉強しています。2年生からの残りの五年間は旭町キャンパスで専門について学ぶため、他学部の人達と一緒に幅広く勉強できるのは一年生の一年間のみです。いろいろな種の学問を学んで視野を広げ、物事を柔軟に考えて総合的に判断する力を養えるよう、日々を大切に、積極的に勉学に励んでいます。

前期には、早期臨床実習がありました。早期臨床実習とは、新潟大学病院内で、歯科の手術や治療の見学、患者様の病院案内などを通し、歯科医学へのモチベーションを高めるものです。教養も魅力的ですが、この実習は私にとってさらに価値ある、有意義なものでした。大学に入学するまでの受験勉強は机に向かって何時間も居座り、ただひたすらに紙の上で手を動かすものでしたが、この実習は、自分の目で見て、現場の空気を感じて、経験するため、いろいろな視点から歯学について、また歯科医について学べました。まず一つは、患者様とコミュニケーションをとり、信頼関係を築いた上でないと治療が成り立たないことです。先生方が治療している現場を見ていると、ただ治療するだけでなく、患者様に積極的に話しかけ、話によく耳を傾けて意思疎通を図っていることに気が付きました。技術のほかに、患者様を安心させ、信頼される人間性が必要なのだな、と思いました。また二つ目は、病院にいらっしゃる患者様がどれだけ辛い思いをしていて、痛みや苦しみを抱えているかということです。新来の患者様に病院案内する際にお話しをしてわかったのですが、治療を受けたくないけれどもやらなければならないのでしぶしぶ来ている、いろいろな病院に行っても治

らないから、最終的に大学病院に来た、という方がいらっしやいます。せっかく勇気を持って治療するために病院に足を運んで下さるので、患者様には誠実に、丁寧に接しないといけないと感じました。私はこの実習を通して歯学部生としての自覚ができ、また、将来の理想像を描くことができました。

さらに、私は大学で支援している、ダブルホームに入っています。ダブルホームとは、異なる学部の生徒と教職員で構成されるグループが、地域住民との交流で人間的成長を目指すものです。私はBホームに所属しており、新潟県長岡市小国町の森光に行き、地域の住民の方々と交流してきました。森光集落は、農業の衰退が集落の衰退につながると危機感を抱き、住民自ら主体となって農事組合法人 森光担い手生産組合を設立した地区です。森光集落産コシヒカリを「もりひかり」として商品登録して販売、独自ブランド吟醸「もりひかり」を製造、イベントでPR活動、都市民を迎えての体験交流などを行っています。私たちは、森光PRのために医学祭でおにぎりやみそ汁、ちまきや笹団子を作って販売しました。また、グリーンツーリズムの一環としてちまきや笹団子づくりに挑戦しました。

私にとってのこの一年は、経験すること、挑戦することの大切さをしみじみと実感した年でした。何事においても百聞は一見に如かずです。一つ経験すれば、100学ぶことができます。大学生のうちにしかできない、あるいは大学生のうちにこそできることにこれからも積極的に「チャレンジ」して色んなことを吸収し、学び、充実した大学生生活を送っていきたいです。



大学生活のはじまり

口腔生命福祉学科1年 田 嶋 里 菜

新潟大学に入学してから早9ヶ月が過ぎようとし、1年生であるのも残りわずかとなりました。これまでを振り返ると、毎日が新鮮でとても充実した生活を送れているように思います。

まず前期を振り返ってみると、自分で受けた講義を選んだり、パソコンを使ってのレポート課題やパワーポイントの作成、発表をこなしたりなど、私にとって新しいことばかりでした。その中でも、最も印象に残っているのは、毎週金曜日に行われた早期臨床実習です。この実習では、患者様付き添い実習、患者様役実習、治療見学実習の3つの実習をグループに分かれて行いました。患者様付き添い実習では新来の患者様をご案内させていただき、患者様役実習では6年生の先輩方のご指導のもと、自分の口腔内のチェックや実際に歯科衛生士のお仕事を体験させていただきました。そして、最後の治療見学実習では様々な診療科の見学をさせていただきました。歯学に関する知識も全くなく、病院内もしっかりと把握できていない私にとって、これらの実習は緊張の連続でしたが、それでも毎回、金曜日がまわってくることがとても楽しみでした。これらの実習では様々なことを見て、聞いて、体験することができ、大変充実した時間を過ごすことができました。私はこの実習を通して、治療を受ける患者様の気持ちや今の自分に何ができるのかを考えることの大切さや先生方や先輩方の素晴らしさを改めて実感しました。

次に、今はまだ後期の途中ですが、後期でのこともお話ししたいと思います。私は、選択科目として「新潟発福祉学Ⅱ―障害者支援論―」という

集中講義を受講しました。この講義は、10月の初めに開催された「全国障害者スポーツ大会トキメキ新潟大会」に併せて開講された講義であり、私は、山形県選手団卓球競技のサポートボランティアとしてこの大会に参加させていただきました。私の主な役割は、選手団の方をご案内することや身の周りのお手伝いをするものでした。選手団の皆さんはどの方もフレンドリーに接していただき、毎日を本当に楽しく過ごすことができました。そしてまた、試合の時には私たちのような健常者よりも多くのハンデを抱えているにも関わらず、そのことを感じさせない素晴らしいプレーばかりで、本当に感動しました。そのような選手の方々の一生懸命に取り組んでおられる姿を見て、私も今後様々なことに挑戦していかなければと思いました。選手の方々と交流をした4日間はあっという間に過ぎ、私にとってかけがえのない素敵な思い出、体験となりました。また、自分自身を見つめ直す大変良い機会にもなりました。

前期、後期で1つずつ印象に残っていることを紹介させていただきましたが、その他にも仲間と過ごす日常生活において楽しかったことや心に残ったことが大変多くありました。2年生になればよいよキャンパスも変わり、専門科目を学ぶようになります。そのために、今しっかりと教養をつけなければなりません。2年生になるまでの日々はもう残りわずかですが、充実した毎日を送れるように努めていきたいと思います。そしてこれからもたくさんの仲間と楽しい大学生活を送ってきたいです。

2年生だより

歯学科2年 大 沢 亜 美

こんにちは。今回は主に2年生の夏から後期にかけて、私たちの学校生活について振り返っていきましょうと思います。

講義内容や時間割など、1年次とは大きく異なる歯学部2年生としての日々にもようやく慣れてきた夏頃……。いよいよやってきました、それは一週間に1〜2回程度常に試験がある7月、9月の長い長い試験期間です。この期間は先輩方からも口をそろえて大変だということを聞いておりました。その通り、試験数、学習しなければならない量がとても多く常に試験前といった状況が続くため、苦戦を強いられました。内容は専門科目が多く、これから勉強していく分野の基礎となる大切な知識で興味深い内容ばかりでした。こうしてさまざまな未知の分野を学ぶことができ面白かったのですが、私にとって今までの大学生活で最も苦しい時期だったと言えるでしょう。しかし同時に、共に試験を乗り越えようと頑張ったことでクラスの一体感が強くなったことは間違いありません☆

後期になると、試験もひと段落して時間割も変わり、生活にゆとりが出て、それぞれアルバイトに励んだり旅行に行ったりします。

そんな中10月半ばには歯学祭が催されました。個人個人、係りについて仕事をします。歯学祭は



授業中（向かって一番右、大澤）

主に歯学部の2、3年生で運営されています。私は、今年は同じ係りの3年生の補佐的な仕事しかできなかったのですが、来年は中心となって働かねばならないので、よりよい歯学祭となるように頑張りたいです。クラスの中には軽音部での演奏を披露したり、屋台を出している者など、それぞれが充実した時間を過ごしていたようです。

11月になると、フットサル大会やバスケットボール大会、バレーボール大会が開催されました。これは学年対抗でクラスが一丸となってスポーツを楽しみます。クラスメートの普段見ることのできない一面を垣間見たり、珍しい交流が生まれたり……と、協力・応援し合ってより深い絆が結ばれます。また、他の学年の人とも触れ合える大変良い機会でもあります。2年生のこの時期になる



バスケットボール大会



忘年会

と、ようやくそれぞれの学年色というものが見えてきます。学年によって特徴が大きく異なり、とても面白いです。

その頃には、クラスの有志20人弱でボーリングをしにも行きました。上手、下手に関わらずみんなで仲良くとても楽しい時間を過ごしました。ボーリングのピンになってしまったN村君(!)を筆頭に個性豊かな面々ばかりでワイワイ盛り上がりました♪

12月の授業最終日にはクラスの忘年会が開かれ

ました。今回は今までで最もハイテンションな会になりました。テンションが上がりすぎておかしくなった人、若干。(いや……多数)最高に楽しい1年のしめくりとなりました！

こうやって振り返ってみると大学生活でできた思い出はとても多く書ききれません。とにかく伝えたいことは、私たちはこんな感じで信頼できる仲間と共に大変充実した日々を送っています。これからも“今だからこそできる経験”を大切にしていきたいです。



2年生の紹介

口腔生命福祉学科2年 菅 原 清 夏

口腔生命福祉学科の2年生の日常を紹介します。

2年生になると、五十嵐キャンパスから旭町キャンパスに移り、勉強の内容も一般教養から専門的なものにかわりました。私たちの授業内容は主に歯科に関するPBLと基礎実習です。PBLとは、少人数のグループに分かれ、与えられた事例に対してその時点で自分たちが持っている知識をもとに討論し、問題を見つけ、解決するという学習方法です。自分たちで討論を進行して学習課題を見つけ出す、という今まで経験したことのない学習方法に最初は戸惑いもありましたが、討論を通して一人では見つけれなかったことを他の人の意見から気付くことができ、また、調べたことや自分の考えを人に説明し情報を共有するので、講義をただ単に聞くよりも記憶に残りやすいです。後期からは、基礎実習や術者役と患者様役に分かれて行う相互実習も始まりました。前期までは講義やPBLで歯に関する勉強をしてきましたが、臨床で使用する器具を使ってお互いの口の中を見ることで、歯科衛生士になるという実感もわいてきました。お互いに練習することによって、術者役では歯科衛生士に必要な技術を習得し、また患者様役としては歯科を受療する患者様の気持ちへの理解を深めています。

私たちはほぼ全員部活動に所属しています。勉強以外でも学ぶことはたくさんあり、私も部活動

を通して良い先輩や友達に出会えました。部活動をしているおかげで充実した学校生活を送れていると思います。

また、私たちは9月に行われた全国障害者スポーツ大会「トキめき新潟大会」のボランティアに参加しました。障害者スポーツというものは病院でのリハビリテーションの一環として始まったと授業で習ったことはありましたが、実際に選手の方々がスポーツをしている姿を見て、ハンディキャップを感じることはまったくなく、楽しそうに試合をする様子にスポーツに対する生きがいを感じました。普段から障害を持つ方と接する機会があまりなかったので、最初は選手の方々が何をしてほしいのか意思を受け取ることが難しかったのですが、一緒にお弁当を食べたり自分や相手のことについて話したりしているうちに、緊張も取れ、少しずつですが選手の方々の意思表示や主張が解ってきたように感じました。私たちができたことといえば声援を送ることくらいでしたが、閉会式の後の別れの際には「ありがとう」や「楽しかったよ」という言葉をもらい、とてもうれしかったです。国体のボランティアに参加できることはめったにないことだし、障害者スポーツを生で見ることも初めてだったので、本当に良い体験をさせてもらいました。今回の経験が、来年から始まる福祉の勉強に役立つと思います。



3年生だより

歯学科3年 荒木田 俊 夫

ながつき【長月】

陰暦9月の異称。語源は明らかではないが、中古以来、夜がようやく長くなる月の意の夜長月の略称といわれてきた。(yahoo 百科事典)

なんて書いてあるが、我々新潟大学歯学部生にとってこれは誤りである。世の大学生が「オレら9月も夏休みだぜい、酒だ、酒持ってこい」なんて与太を飛ばしているさなか、我々は毎日のようにテストにおわれる。小学生なんかより遥かに憂鬱な8/31を過ごしているのは言うまでもないだろう。いつになっても終わらない、あまりに長すぎる1ヶ月。そんな意味での長月。それが正解だ。そんな地獄の9月から始まる後期。早いものでもう12月である。今回は簡単に2009年秋～冬、我々3年生の生活を振り返ってみようと思う。

補綴学、う蝕学、保存修復学、歯の形態学、口腔組織発生学。後期に行われた講義の一部をざっと並べてみた。やっと歯学部らしい勉強が始まった、というところである。この虫歯にはこういう材料を使って治すんだとか、この形の歯は第一大臼歯といって、専門的な言葉でカッコつけちゃうと6番って言うんだとか、ザックリ言うとこんな

勉強をしているのだ。今までに比べると内容が濃密になり勉強にも苦勞しているが、やっと歯医者スタートラインにたったという気持ちの高揚や自覚の芽生えもあり、なかなか充実した日々を過ごしている。もちろんそれは講義だけではなく、実習でもそうである。2年次より大幅に増えた実習科目のなかで、おそらくここでお伝えすべきであろう実習は歯形彫刻実習（カービング）であろう。歯形彫刻実習とは読んで字の如く、ロウソクのロウのような、ワックスとよばれる棒を、実際の歯の2倍の大きさの模型を見ながら削ったり盛り足したりして同じ形を再現する作業のことを言う。これを3本提出すると、無事テストを受ける権利を得ることができるというシステムだ。3本と聞くとそう難しいものでもないように聞こえるが、これが実にエグい。提出する先生に「ここがもっとグワっと曲がってないとダメ」「なんか汚いからヤダ、ダメ」などという、何ともいい難いダメ出しをくらい、私は結局1本を提出するのに1ヶ月ほどの時間を要した。だいたいみんなもそんな感じで苦戦を強いられている。しかしこれも将来役に立つはずだ、と自分に言い聞かせながら、



これくらい真面目に授業を受けてみたい、と思ったある日の昼下がり



実習前の1枚。実習室が新しくなり、テンション高め、みたいです。

みんなでキズを舐めあい、夜の7時くらいまで講義室でワックス棒と格闘する。ふと気づいたらまたクラスの結束が深まっていた。

私生活にしてもそうだ。今まで1年時から一緒にプライベートを過ごした友人はもちろん、去年はあまり交流のなかったクラスメイト、そして今年の春から入ってきた編入生と触れあうことが格段に増えた。40人という少数の強みが色濃く表れているのだろう。正直思い描いていた、俗に言うキャンパスライフという華やかなものとは程遠い大学生活を送っている私たちだが、これはこれで

一つの大学生活の形なのだと思う。そしてこの新潟のアホみたいに寒い冬をみんなで鍋を囲み、酒を呑みかわし、ときどき雪と戯れながら過ごしていきたい。

もうすぐ2009年も終わり、来年2月からはテスト月間が控えている。科目数も多く、専門的知識が要求されるものが増えてきているのでなかなか大変だが、我々の本分である学業を怠らずに、この忙しくも充実した3年生の生活をキレイに締めくくりたいと思う。

大学生活について

口腔生命福祉学科3年 杉 山 美 生

今年の4月に新潟大学口腔生命福祉学科の3年生に編入してから、早くも1年が経とうとしています。入学した頃は、卒業までの2年間、勉強だけではなくプライベートにおいても様々なことを学びながらゆっくり過ごそうと考えていたのですが、その思いとは裏腹に、この2年間はあっという間に過ぎ去ってしまいそうです。

最初にもお話しした通り、私は編入生です。今年の3月までは、歯科衛生士の専門学校で3年間勉強していました。私が編入を決めた1番のきっかけは、専門学校の臨床実習で障害者歯科に配属されたことでした。障害者歯科で実習を重ねていくうちに診療方法の違いや付き添いの人々の様子を見て、障害者の人々を取り巻く環境がどのようなものなのか知りたいと思うようになり、福祉が学べるこの学科に編入して今に至っています。

さて、ここで大学生活について少しお話ししたいと思います。

大学では、編入生は歯科衛生士のカリキュラムを履修済みのため、今は一般教養と福祉の勉強を中心に講義を受けています。月曜日は一般教養受講のため、五十嵐キャンパスで講義を受けます。五十嵐キャンパスはたくさんの学生で賑わっており、広い校舎で大学生気分を味わっています。火曜日から金曜日は旭町キャンパスで福祉分野の講義を受けます。福祉分野の学習方法は、PBLや講義、実習などです。PBLとは、事例をもとにそこに潜む疑問や問題を抽出し、少人数で討論を行う

というものです。文献やインターネットをもとに自主的に問題解決の方法を探るので、大変ではありますが、自ら学習した知識を確実に自分のものにできていると感じています。実習では、先日新潟で行われた、トキめき新潟大会（全国障害者スポーツ大会）に選手団サポートボランティアとして参加してきました。1週間、身体障害や知的障害を持つ選手の方々やそれを支えるコーチの方々と共に過ごし、大会に臨むことで、今までの障害者へのイメージががらりと変わり、楽しく過ごすことができました。とても良い経験と思い出ができたと思っています。

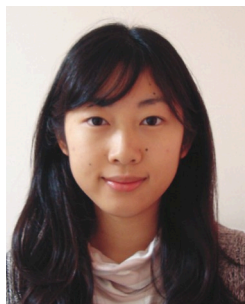
大学以外では、意外と多い空き時間を使って、友達と集まってご飯を食べたりアルバイトをしたりしています。今年の夏休みには、新潟県の出身者が少ない編入生で、「新潟を知ろう!」と佐渡ヶ島へ旅行に行ってきました。レンタカーを借りて、慣れない道を慣れない運転で進むのはかなりスリルがありましたが、佐渡の青い海と綺麗な空に癒されました。

このように、私は今年から新しい環境で様々なことを学び、経験しています。来年からは1年間の大学病院での臨床実習が始まり、直接患者様と関わることで、更に学ぶことや考えることも多いと思います。ですが、支えてくださる方たちに感謝しながら今まで学んできた知識を生かして実習に臨むとともに、将来必要とされる歯科衛生士を目指して頑張っていきたいと思っています。

早期体験実習を終えて

コロニーにいがた白岩の里

歯学科2年 古市 奈津美



今回私たちは、早期体験実習として寺泊にある知的障害者総合支援施設「コロニーにいがた 白岩の里」に行きました。ここは、児童部、成人部、高齢期更生部、重複更生部、社会復帰部の5つに分かれて、障害を持つ方々が入所しています。私たちの班は成人部の女性寮と社会復帰部を見学させていただきました。

成人部は、重い知的障害などのため、言葉によるコミュニケーションが困難な人が多く入所しています。最初、私は部屋に入る前に恐怖心を抱いていました。なぜなら、部屋のドアをドンドンと叩いたり、大きな声を出している人が見えたからです。しかし、部屋に入ってみると、皆さんはとても大人しく、こちらに手を振ったり、私たちの列についてきたりしました。知的障害者は言葉によるコミュニケーションが苦手という話を伺っていましたが、言葉以外の方法で彼らはコミュニケーションをとろうと接してきました。私たちが障害者に対する偏見を捨てて接しあえば、お互い理解することができるのではないかと思います。この事を、将来私たちが知的障害者を治療する場合に当てはめて考えました。たとえば、治療中に痛がっても彼らは「痛い」と言って自分の感情を表現することができません。コロニーの職員の方に話を伺うと、歯科医師が蹴られたりすることがあるそうです。ここで私たちは彼らの気持ちを察して理解してあげることが重要だと感じました。しかし、“理解する”ということはそんなに簡単なことではありません。コロニーの職員の方は障害者の気持ちをちゃんと察していてすごいと思

いました。私も将来、もし障害者を治療する時があったら、彼らのことを少しでも理解して治療したいです。

私たちは次に社会復帰部を見学しました。この部は社会的自立を目標としていて、地域での生活に移行しやすいように、小集団での生活を基本単位としています。部屋もそれぞれの集団で家具が異なり、自分の家と他人の家を区別するように工夫してありました。日中は作業訓練を行っているとのことなので、どのような作業をしているのか見学しました。そこでは、ボルトの取り付けなどを行っていました。作業をしている方は真剣に手を動かして、その姿に私は心を打たれました。なかなか作業が進まない人には職員の方が優しく肩に手を置いて励ましていて、障害者に対する思いやりを感じました。この作業訓練で、仕事に必要な作業態度や持続能力を育てるなどの就労事前訓練を行い、地元の企業や事業所で職場実習をするそうです。また、中には職員の寮の部屋を借りて、アパート暮らしのような環境で生活訓練をしている方もいるそうです。

最後になりましたが、このような体験実習の機会をあたえてくださって心から感謝しています。私は、障害者とふれあうのはこの実習が初めてでした。今までは健常者と障害者は全くの別ものだと位置付けていましたが、両者にあまり違いはないように思いました。障害者には、少しだけ苦手な分野があるというだけで、それは私達健常者にも言えることではないでしょうか。この実習は、普段はあまり考える機会のない障害者やその生活について学べて、本当に有意義なものであったと思います。今回学んだことを将来に活かせるように学んでいきたいです。

早期体験実習を終えて

歯学科2年 丁 怜 真

2年生前期に行われた早期臨床実習において、障害者の方の治療を見学する機会があった。その方は成人の男性であった。拘束具をしていたが、力が強いために動きがなかなか止めることができず、ご両親が体をおさえつつ、なだめたり励ましたりを繰り返していた。また、看護師さんも様子を注視しながら周りを取り囲んでいた。そのような治療を初めて目の当たりにして私はたじろいでしまった。見学の後、インストラクターの先生は私たち学生に「顔が引きつっていた」と指摘された。たしかにそうだったかもしれないと反省した。様々な患者様があらわれて、その方々に応じた治療を行うことができないとできなければならないと強く思った。

普段見ることのない光景を見ると、やはり引きつってしまうのである。そんな中、今回は早期体験実習として知的障害者施設「ココニーにいがた白岩の里」を見学する機会を得た。

まず、企画相談室の方からココニー全体の説明をうけ、児童棟を見学した。児童棟では部屋やお風呂、トイレ、食堂などを見学した。また、ダンスや運動を行う体育館や学校として使用している部屋を見学。最後に社会復帰部長さんからの社会復帰棟の説明と見学をし、作業訓練の様子を見学して体験実習を終えた。

障害者施設ならではのものを多く見学することができた。ガラス（プラスチック）が壊れにくいように弾力性のあるものになっていたり、トイレが広くなっていたり、お風呂も浅く手すりがついていて工夫のなされた設計になっていた。私が一番感心したのは食堂であった。一人一人の入所者にあわせて食事を取るときの指示が席に貼ってあることや、緊急事態に備えて何かのどに詰まってしまった時の対処法が壁に貼ってあるのに感心した。

大きな声を出す方や壁にどんと頭をぶつける方などがいて、またまた怯んでしまった。しかし、それは彼ら彼女らの嬉しさの表現だったよう

に顔を見ると感じられた。少し遠くから、少し恥ずかしそうに私たちを笑顔で見ている女の子もいた。障害者の方々と触れ合う機会、時間があると思っていたのだがあまりなかったのが少し残念ではあった。

見学させていただいた施設も昔に比べてだいぶ入所者の方が減ってきたそうだ。地域で障害者と健常者が区別なく社会生活を送るのが本来の望ましい姿であるという考え、つまりノーマライゼーションの理念が浸透してきているようだ。地域で障害者の方がよりよく生活できるように今後、私たちのような医療に携わる人間の役割は非常に大きいと思う。今回の体験をよい指針にしたいと感じる。

早期体験実習を終えて

口腔生命福祉学科2年 中 澤 亜香里

今回、私は新潟県知的障害者総合援護施設「ココニーにいがた白岩の里」に見学実習に行ってきました。ココニー白岩の里は児童部、成人部、重複更生部、高齢期更生部、社会復帰部の五つの部に分かれて構成されていて、たくさんの入居者の方が生活されています。

私は児童部と高齢期更生部を見学させていただきました。しかし、今回は新型インフルエンザ感染予防のため、直接入居者の方と触れ合いができなかったことが残念でした。

児童部は重い知的障害などによって言葉によるコミュニケーションが困難な方や、行動上の障害の強い方が多く入所して生活されています。

まず、児童部入居者の方が生活されている場を見学しました。部屋はとても広く中庭もあって明るく、入居者の方達が自由に楽しそうに過ごされていたことが印象に残っています。ちょうど入浴が終わった後で、皆さんはとても気持ちよさそうな表情をされていました。言葉はなくても表情がとても豊かで、入居者の方の気持ちを感じられた気がしました。また、危険物を誤飲しないように掲示物は部屋の上や外側に掲示されていたり、椅子を投げないように固定してあったり、入居者の

方の安全に配慮が行き届いていると感じました。他に遊具やウォーキングをする広い広場があったり、職員さんが「入居者の方には楽しく、安全に気持ちよく過ごしてもらいたいのです。」とおっしゃっていたことが分かったように思えました。入居者の方が治療訓練する作業室は、少し小さい学校の教室のようで、だいたい四、五人で行うということでした。

次に高齢期更生部を見学しました。高齢期更生部は障害者の高齢化にそなえ、未来を見据えて作られた部です。老化で障害が重複すること等から、個々の健康の現状維持、増進、向上を目指した活動を行っています。また一日の流れが組まれているため、自閉症の方や、突然の環境の変化を苦手とした方に対応している環境なのだと思います。

高齢期更生部はひとりひとりの個性を大切にしてい、支援がされている部なのだという印象を受けました。グループ活動や余暇活動では、いくつかの項目の中からその日にする活動を入居者が各自選択するシステムでした。たとえば畑や園芸、カラオケや卓球などの項目から自分のやりたい活動を希望して選択決定できるのです。説明を受けている時も卓球をしている音や、入居者の方の和気あいあいとした笑い声がたくさん聞こえていました。こういった活動をすることで入居者の方が主体的な生活をして、個々の自立意欲を高めた充実した生活を送る事ができるのだと思いました。他にも水族館見学や菊祭り見学といった社会生活体験や、老人ホームボランティアや民謡流しの参加などと、社会活動や社会参加、地域の方との交流活動が盛んで活発なのだと感じました。

今回、児童部と高齢期更生部の二つの施設を見学して様々なことを感じ、学ぶことができました。直接交流することはできませんでしたが、入居者の方たちの笑顔や表情を見たり、笑い声を聞いて幸せに暮らしているのだと思いました。また、とても細かい刺繍や折り紙で作られた絵などの入居者の方が作った作品にはとても驚かされ、心が温かくなりました。障害者の方は言葉の意思疎通が困難な部分がありますが、言葉の代わりに表情や作品で自分の気持ちを伝えることができるのだと

思いました。また、そういったサインを私はしっかりと感じて理解をしていくことが大切だと感じました。

掲示物の中に「一步一步」という言葉がありました。この言葉から個々の持つ力に合わせた生活空間があつて、個々のニーズに対応しているのだと感じました。また対応していく力が私にも必要だと感じ、一步一步進んでいけたらと思います。

実際に障害者の方たちの生活している場を見学できたことで、自分の視野が広がったことを感じました。見学して感じたことや経験を忘れずに日々の学習や、これからの学校生活や私生活に活かしていこうと思います。

早期体験実習を終えて

口腔生命福祉学科2年 大 串 早 紀

今回、私たちは新潟県知的障害者総合援護施設「ココニーにいがた 白岩の里」に体験実習に行きました。ココニーでは、障害の程度や年齢によって、児童・成人部、高齢期更生部、重複更生部、社会復帰部があります。私たちのグループが今回見学したのは、児童・成人部と高齢期更生部です。児童・成人部では、他の施設では入所していないような重度の知的障害を持った方が、高齢期更生部ではおおむね40歳以上の方が入所しています。

最初に職員の方から施設の概要や沿革についての説明を受けてから、施設見学に移りました。ココニーが開所した当時から使われているコンクリートの通路を抜けると、木の温もりが感じられる明るい建物である成人棟に着きました。成人部の方が、普段どのような環境の中で生活しているのかということがわかりました。天井のステンドグラス、リラックスルームにあった映写機のように、入所者の方の精神状態を配慮したものが多くありました。また、下駄箱に靴のイラストが描かれたシールを貼り、散歩や靴を履いたり脱いだりすることが嫌いな人のために、まず視覚的なイメージを持たせて行動しやすくするという工夫が見られました。しかし、職員の方から、知的障害者の方にとっては様々な工夫しすぎても返ってス

トレスになる場合も多いという話をお聞きしました。実際に、車いす用の広いトイレでは、中のものでいたずらをしてしまう方や、特に自閉症の方では掲示板にきれいに飾った紙などをすべて剥がしてしまう方がいるそうです。

入所者の方については、成人部では幅広い年齢層の方が一緒に生活していて、自分の感情や好奇心にとっても忠実に行動するという特徴があることを知りました。たとえば、40度の高熱が出た場合でも食欲がなくならなかったり、注射を打とうとする医師に反発しようとしたりするそうです。

今回は、インフルエンザが流行していたことで、入所の方と直接コミュニケーションをとる機会がなく、とても残念でした。しかし、今回の実習を通して、知的障害者の方の現状、施設の工夫、職員の方の姿勢などについては深く学ぶことができたと思います。私は特に、職員の方々の温かい

姿勢が素晴らしいと感じました。私たちがコロナーを見学したのはほんの数時間でしたが、入所者の方に常に明るく平等に接し、理解しようと努める態度、心から入所者の方とのコミュニケーションを楽しんでいる様子、そこから生まれる強い信頼関係などを感じ取ることができました。

また、一人一人のニーズにあった対応の難しさについても、改めて感じました。今回は知的障害者の方という視点からでしたが、このことは障害者に限ることだけではなく、将来関わるであろう歯科医療や福祉の現場においても、必ず通じるものがあると確信しています。今回の実習で学んだことを生かして、まずコロナーの職員の方々のような温かい姿勢で患者様を心から理解し、少しでもサポートすることができるよう、これから努力していきたいと思います。



ポリクリを終えて

臨床予備実習（ポリクリ）を終えて

歯学科5年 森 恵

臨床予備実習は、学部5年生が半年間にかけて病院内の歯科診療室をまわり、どのようなことを行っているのかを実際に見学します。また、担当教員指導のもと、実際に自分で患者様役を体験し、治療についての理解を一層深め、教科書には載っていない患者様側の気持ちを少しでもわかるために学生相互実習を行います。今回はポリクリで私が体験し、思ったことの一部を、診療室を回った順に紹介させていただきます。

歯の診療室では、診療の基本となる診療姿勢に関する実習がありました。今まで人形模型実習で何気なく使っていたミラーやハンドピースにも適切な持ち方や当て方があることを学びました。さらに診療姿勢やミラーの位置・持ち方を意識しながらのレジン充填や根管充填の模型実習を行いました。今までは実習中に肩や腰が痛くなることがありました。しかしこの実習で姿勢を意識するようになってから、腰痛がなくなりました。また、この診療室での実習で、私は生まれて初めて人（相手は実習学生）に麻酔を打ちました。先生がすぐそば見ていてくれて、とても緊張し、怖かったです。交代し、麻酔をされる側になったときも術者の不安な気持ちをわかっている分、その不安が伝わってきて、怖かったです。術者が不安だと、患者様には不安がっていることがわかるんだなと実感しました。

歯周病診療室では学生相互で歯周組織検査や咬合診査を行い、歯の汚れを染めだし、歯についている汚れを清掃する実習を行いました。歯学部の学生同士ということもあり、みんな健康できれいな口腔状態で、歯周病の患者様の治療というわけにはいきませんでした。しかしこの診療室での実習では実際にどのようなことを行い、治療を進め



ていくのかを把握することができました。実際、総診では診療のたび、ほぼ毎回歯周メンテナンスで行います。そのたび、ポリクリで学んだこと、相互実習で学んだことがとても生かされていると実感します。

画像診断診療室では学生同士でお互いの歯のデンタル写真撮影を行い、現像しました。歯科医院でレントゲンを撮られたことはあっても、自分が人の歯を撮影することは初めてで、とても楽しかったです。歯医者さんは簡単に撮影しているように見えたけれど、実際に撮影する側はいろんなことを考えてフィルムの位置や照射機の位置を配置しなければならないのだなと分かりました。実習で撮影した自分の歯のレントゲン写真から、実際に虫歯やちょっとした異常を見つけた学生いて、びっくりしました。

予防歯科診療室では歯の溝をレジンで埋めるシーラント処置を学生相互で行いました。虫歯の予防に効果的な処置なので、実習生みんな、初期の虫歯で脱灰している部位や食べ物がつまりやすい部分にシーラント処置を行いました。私たちもこの処置ができてうれしかったので、きっと患者様も同じような気持ちなのだろうと思いました。

総合診療室では患者様とどのように接するか、医療面接の仕方の実習を行いました。医療現場は言葉づかい、表現の仕方、表情などいろいろなことに気を使う必要があり、とても難しかったです。OSCEの練習にもなり、現在行っている臨床実

習でも、とても生かされている内容だったと思います。

入れ歯診療室では、歯科材料の使い方を実際にお互いに体験しました。私たちが何気なく使う材料も、実際に口の中で使われると独特のにおいや味、食感がし、私はとても不快だと感じた材料もありました。自分で実際に体験することで、使われる側の患者様の気持ちを理解することができ、使うときはできるだけ短時間で、一回で済むようにしようと思いました。

口腔外科・麻酔科診療室では、とても大切な不潔・清潔、消毒・滅菌をよりしっかり学ぶことができました。外来での手洗いと手術室での手洗いの違いも初めて学びました。切開した部位の縫合の仕方、使う糸と針の違いも初めて学びました。

4年生までの基礎実習では口腔外科の実習はないので、ポリクリで初めて知ることがとても多かったです。また一番緊張したのも最初に回った歯の診療室とこの口腔外科診療室です。口腔外科では伝達麻酔という、神経の出入りしている穴のすぐ近くに針を刺し、麻酔薬を注入する麻酔を相互に打ち合いました。すこしでもずれると神経を損傷してしまい、相手の友達に神経麻痺や鈍麻を引き起こしてしまう危険があるからです。教科書の模式図と人間の構造は似ているけれど違うことがたくさんあります。どんなに予習をしても、初めて打った時は緊張して手が震えました。学生のうちに、指導医が見てくれている環境で打てる麻酔の回数は限られているのでとても勉強になりました。麻酔科の実習では点滴の針を静脈に刺す相互実習を行いました。授業では聞いていたけれど、歯科医師も実際に点滴を打つことがあるのだなと実感しました。男の子の血管は浮き出ている、太くてとても打ちやすく、女の子の血管は細くて見えにくくてとても難しかったです。針がうまく血管に刺さり、血液が流れ出てきたときはとてもうれしかったです。

現在、私は総合診療室で実際に患者様を目の前に診療をしています。座学に加え、実習でもいろいろなことを学んできましたが、まだまだ手が動かないことも、教科書通りのこと以外だと対応しきれないことがたくさんあります。指導医の先生

に厳しく言われることもあり、自分の不甲斐なさに悔しい思いをすることも多々あります。しかし、こんな私にも患者様はありがとうと言ってくれます。緑衣を着て総診へ行けば私たちは学生でもあり、歯科医師でもあります。指導医がいるからといって甘えることなく、怒られたからといってへこたれることなく、先生に怒られるのは学生の特権なので、患者様に満足していただける治療ができるよう、臨床実習の日々を大切にしていきたいと思います。

臨床予備実習（ポリクリ）を終えて

歯学科5年 北 畠 健 裕



はじめまして。歯学科5年の北畠健裕と申します。この度、「臨床予備実習を終えて」というお題で、歯学部ニュースに原稿を載せて頂くことになりました。この文章を読んでくださる後輩の方々への参考になれば幸いです。

そもそも臨床予備実習（この呼び方で呼んでいる人は皆無に等しく、基本的にはポリクリと呼ばれています。なぜそう呼ばれているのかは分かりませんが、以降ポリクリと表記させていただきます。）とは一体どういうものなのか、この文章を読んでくださっている方々の中で理解している方はそれほど多くないのではないかと思います。僕も実際にこの実習を行うまで、ポリクリという言葉自体は何度か耳にしたことはあったのですが、「臨床予備実習＝ポリクリ」ということすら知りませんでした。ですので、はじめにポリクリについて説明させていただきます。

ポリクリとは、学部5年生が5月～10月上旬にかけて各科を回り、それぞれの科でどのような診療を行っているかを見学したり、学生同士で相互実習を行ったり、全国共用実技試験（OSCE）の練習をしたりします。簡単に言えば、後期から始まる総合診療室（以下、総診と表記）での臨床実習に向けての予行演習のようなものです。

おそらく、ポリフリとは前段落に書いたことが大筋であります。けれど、せっかくこのような貴重な機会を頂いているわけですので、僕なりの解釈でお話ししてみたいと思います。

4年次までは模型を使って実習をします。そこで歯科における治療を一通り行い、治療手順や技術を学んでいきます。そして、それを生かして臨床、つまり患者様を相手に治療をしていくのです。もちろん、模型実習中も模型を患者様として扱えと口ずっぱく言われます。しかしいくら模型相手を患者様と考えて実習したとしても、しょせん模型は模型、痛いとも言わなければ、血も流れませんし、唾液も出ません。口の中がよく見えなければ、口裂け女もびつくりと言わんばかりに開けること（開かせることと言った方がいいかもしれませんが）ができます。

しかし、人相手では絶対にそうはいきません。頭では理解していたとしても、いきなり患者様相手に実習で学んできたことをぶつけましょとなったら、気持ちだけが舞い上がってしまい、先には自分にも患者様にも地獄しか待っていないでしょう。少しでもそうならないようにするために、まずは学生同士で実習を行って「人対人」の難しさを体験しようというのがこの実習のテーマなのではないかと思います。

では、ここからそれぞれの診療室でどのようなことを学んだか、印象に残っている診療科を中心に少しずつではありますが紹介したいと思います。

☆口腔外科診療室・麻酔科診療室

僕たちの班は、この口腔外科診療室からまわりました。ここでは外科的手洗いや縫合の練習、シーネの製作、臨床検査の実習など多くの内容を学びました。そのなかでも伝達麻酔の相互実習がポリフリ二日目であり、うまくできるのかという不安と、相手に万が一障害を残してしまったら大変だという恐怖に襲われました。実際に注射する時、普段から手が震えるのですが、その時はもう尋常ではないくらいの震えでした。無事何事もなく終わりましたので、その日は安心感と充実感でおいしい酒をいただきました。

また、採血実習の際に僕の患者様役をやつてく

れた友達が、採り終わった直後に椅子から倒れてしまいました。大事には至りませんでしたが、非常に驚いて体が固まりました。治療中でもこのような事態は起こってもおかしくないということ、患者様を相手に治療する前に経験できたのはよかったです。もちろんこのようなことはないに越したことはないのですが（ちなみに、その友達はその後見学実習中にも一度倒れてしまいました。貧血持ちらしいです。）。

麻酔科では点滴、血圧測定、笑気麻酔実習などを行い、バイタルサインの把握の重要性について学びました。笑気麻酔実習では名前負けしないくらいにいい気持ちにさせていただきました。きつとその時の廊下は僕の笑い声が響きわたっていただろうと思います。

☆入れ歯診療室・冠ブリッジ診療室

入れ歯診療室や冠・ブリッジ診療室では症例検討と実習が主で、臨床実習で用いる材料の説明を受け、その材料を実際に使って相互実習を行いました。この2科で実習した内容は、臨床実習でも実際に行うことが多く、ポリフリで使った道具や製品の名前をしっかりと覚えておくとういいます。

☆予防歯科診療室

ここではPCRやPMTICなど、総診で担当するほとんどの患者様に行うことを実習することができます。スケーラーやミラー、バキュームなどをどうやってうまく使うといいかを考え、時に先生に聞いて進めるとよいかと思います。

☆歯の診療室

天然歯を用いた根管治療の実習やインレー窩洞形成などが印象深かった実習でした。根管治療は自分の目で見えない分、実習中はうまく行えていると思っていても、終了後にレントゲン写真を撮ってみると、目標としている到達度に達していないことがありました。根管の拡大の仕方や目盛りの読みなどが大切になってくることを感じました。

☆小児歯科診療室

ここでは年齢に応じた小児への口腔衛生指導を学びました。また、OSCE対策として小児とその保護者への医療面接の練習を行いました。

☆画像診断診療室

画像診断診療室では、デンタル撮影やパノラマトレースを行いました。デンタル撮影では、実際にお互いの口の中にフィルムを入れて相互実習を行いました。フィルムを口の中に入れたままでいるということは実に苦痛です。特に奥に入れると嘔吐反射が起こる場合があります（僕は嘔吐反射が激しいので、大臼歯部を撮られる際、反射によって唾液と涙がだらだら出ました。）。だからこそ、フィルムやコーンの角度をしっかりと判断できる必要があります。出来上がった画像に不備があった場合、再撮影となり余計な被爆と苦痛を与えてしまいます。先生に頼りすぎると、今後患者様に行う時に自信を持てなくなってしまうので、自分で納得できる位置にくるまで模索した方がいいでしょう。

☆歯周病診療室

医療面接や歯周組織検査の相互実習、SRP 相互実習などを行いました。患者様に正しいブラッシング法やプラークコントロールの必要性を説明

することは、非常に大切なことで歯科医師が行う治療が有効に行われるために不可欠であることを認識しました。

以上、ポリクリの内容を簡単にまとめさせていただきました。役に立つところだけを参考にしてみてください。

そろそろ臨床実習が始まって約2ヶ月が経とうとしています（ちなみに今日は2009年11月29日の日曜日、天気は曇りです。）。毎日自分の無力さに愕然としつつも、持ち前のガッツと打たれ強さで何とか実習を行っているという状況です。患者様を通じて学ばせていただいていることが、今後かけがえのない財産になるよう日々大切に過ごしていかなければいけないと思っています。「落ち込んでいる暇があるなら、次の行動をとれ。」と昔先輩に言われたことがありましたが、今こそこれを地で行かなくてはなりません。しかし、あまり無理をし過ぎると体を壊しますので、自分のペースを守りつつ頑張っていきたいです。こんな僕ですが、今後ともご指導の程よろしくお願い致します。



歯 学 体 報 告

ネット越しに打ち解けた日

またやりましょう、と会場からの帰り際に言われた時は一瞬何を言われたかわかりませんでした。振り向くと、その日シングルス試合をした人が立っていたので、納得。もちろん、と返答。お互いに自然に笑みがこぼれました。

その時、デンタルっていいなと思いました。

その人は全くの赤の他人で、しかも試合をして争うのですから、試合まではどちらかというと良くないイメージを持っていました。でも試合は今までで一番といっても言い過ぎでない充実した試合でした。スリリングな読み合いができたし、いいショットも多く打てました。とても爽やかな気分でした。相手の人もおそらく同じ気分だったのでしょう。試合終了後はお互いにアドバイスし合い、さらにはそれぞれ個人的なことも話せました。この試合で僕は、バドミントンを通じて人と交流することの喜びを再確認し、そして今回のデンタ

ルはこの試合がでただけでも有意義なものとなりました。

さて、来年のデンタルには僕たちの学年が統率して臨みます。楽しいことが多いデンタルですが、これまで以上に苦しいことやつらいことがあると思います。が、それらを隠し味と前向きにとらえ、次のデンタルを今回以上に楽しめたらいいなと思います。

最後に宣伝ですが、私たち歯学部バドミントン部はホームページを持っています。今回のデンタルはもちろん、その他のイベントの写真もたくさんあります。さらに活動内容も詳しく載っていますし、私たちの大会成績も見られます。

アドレスは <http://niigatadentbado.web.fc2.com/> です。

僕の文章を読んで少しでも興味を持たれたのなら、ぜひ一度アクセスしてみてください。

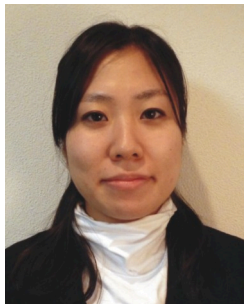
(歯学科3年歯学部バドミントン部 菊地 陽亮)



臨床研修修了にあたって

臨床研修を修了して

研修医 岡 田 萌



新潟大学での研修は毎日
が新しいことばかりで、歯
科医師としてこれからの研
修に期待をもって臨むぞ！
という明るいものだけでは
なく、それはもう学生の時
とは立場が違ふのだという

何とも独特なずっしりとした暗い不安な気持ちで
始まりました。

外部からやってきた私は新しい大学の中で、ま
ず仲間と出会いました。学生生活で一定の環境と
人たちの中で六年間過ごしてきて、久しぶりに味
わう感覚です。「あれ？ 友人と親しくするにはど
んなふうに接していくのだっけ？」といった調子
で人と関わることを一からまた勉強することと
なっていました。そして先生方、患者様と、次々
と人との出会いがあり、そこから学ぶことは沢山
ありました。そのような中、診療にも徐々に携わ
るようになり一口腔を守るのにこんなに考えるこ
とがあって一人一人こんなに異なるものなの
か、と実感させられました。また先生方から学べ
ることはすべてで、それは診療内容だけでなく気
持ちの上での姿勢や、話し方、いざとなる時のとっ
さの対応など、先生の横で、自分で感じ取って学
んでいく以外にないということもあることを知り
ました。歯科医というのは患者様の口腔内を任せ
られる職業で何かあれば全身にも容易に影響は及
びます。食べること＝生きることで、本当に責任
がある仕事であるといえます。そうとはいえ、実
際の診療では自分の考えの及ばなさに嫌になっ
たりすることがしばしばです。私にとってこの一年
間の研修でのテーマは「とにかくやってみること、
前に進むこと」でした。この一年は紛れもなく私

という歯科医の始まりでそこに飛び込むことは、す
ごく怖いことでした。しかしやってみなくてはわか
らない、とにかく失敗してもまず経験。という気持
ちで自分なりに励ましてきました。私はまだまだ青
く診療にも時間がかかってしまうこともあります
が、春よりは前に進んでこれたのではないかな
と思います。こうして少しずつでも学んだことを
積み重ねて毎日がつながって一人前になっていく
ものなら前向きに今の自分にできることを日々の
診療に生かしていきたいです。指導医の先生方には
数多い研修医の診療を抱える中、時に温かく時に
厳しく的確な指導をしていただきました。治療
にあたる上で方法の選択は多様であるためどの方
法を選択するかとても頭を悩ませますが、患者様
の背景など考え合わせたくてベストな選択をし
なくてはなりません。そのようなときにも先生方
からは幾度となく私の固い考え方からこんな方法
もあるのだということを示していただきました。

そんな先生方は、歯科医としての師であり、心
の師であり私の目標です。

春が過ぎ、夏が過ぎ、秋、冬と流れるように時間
は過ぎて行きましたが私はこの一年間、今までの人
生の中で一番大きく成長したものになったと思い
ます。まだまだ困難にぶつかって辛い日々が続くこ
ともありますが、それでも今笑顔で楽しく過ごせて
いる私がいます。私がこうして歯科医として順調
に歩みだせたのはいろいろな人たちの支えがあっ
たからだということを強く感じるようになりました。
指導医の先生をはじめ医員、レジデントの先生
方、技工士の先生方、私と二人三脚で診療をしてき
てくれたペアの小出先生、周りの研修医の先生、摂
食嚥下リハビリテーション室、顎関節治療部、口腔
外科の先生方、長引く診療でも笑顔で応えてくだ
さった患者様、私をどんな時も応援してくれた家
族、友人、すべての人たちに感謝を伝えたいです。

本当にありがとうございました。(これからもよ
ろしくお願いします！)

臨床研修を終えて

小児歯科学分野歯科研修医 作 間 健 彦



昨年度国家試験を無事通過し、晴れて歯科医師となることができました。僕は新潟大学歯科医師臨床研修プログラムBコース採用となり、前半半年は東京の永山センター歯科、後半は

小児歯科で臨床研修を行いました。

東京の永山センター歯科はドクター数が11人でインプラント、自費診療などにも力を入れている大規模な歯科医院であり、自分が半年耐えられるのか不安でした。初めのうちは院長のアシストにつき少しずつ診療を割り当ていただきました。院長は患者数も多くついて行くだけで精一杯でした。慣れない環境に一人ということもあり特に初期の頃は大変でした。そんな中新しいドクターが2人勤務することになりました。その先生方とは境遇が同じなためすぐに打ち解け、よく飲みや麻雀に連れて行ってもらいました。初期は大変でしたが慣れるにつれてとても楽しく研修を行うことができました。

永山センター歯科に半年勤務して自分のなかで開業医に対するイメージは大きく変わりました。まず、そこにいた先生方は皆とても勉強熱心でした。常に最新の知識を取り入れようと努力しており、自分の知識など足元にも及んでいないと感じました。また、忙しくとも診療や治療の説明などには手を抜くことはありませんでした。周囲のドクターの影響で歯科の勉強に対するモチベーショ

ンが上がっていくのを感じました。

後半は小児歯科で松山先生による指導の下で研修を行いました。後半の研修では鎮静法を用いねばならない症例や咬合誘導を行う症例が多く、大学にいないければ勉強できない症例を多く見ることができました。臨床実習では小児を担当することがなかったため、小児への対応の難しさを痛感しました。診療中子供が泣いてしまうとなかなか上手く対応することができず、今後自分が歯科医療に携わる中でどのように小児に対応していくべきか考えさせられました。

小児歯科では医局旅行、忘年会、学ゼミの追いコンなどの行事に参加させていただきました。どれもいい思い出なのですが、特に医局旅行ではもう一人の研修医の又吉さん、社会人大学院生の村山さん達と新人芸を行ったのが自分の中で印象に残りました。村山さんが指揮をとってくださり結果も3人とも満足のいくものだったと思います。

小児歯科では勉強・行事共にとても恵まれた環境の中研修させていただいたと思っています。特に指導医の松山先生には大変お世話になりました。自分の至らない部分を優しく諭してくださったり、疑問に対して丁寧に答えてくださったり、パンをくださったりと、何度もお世話になってしまいました。松山先生本当にありがとうございました。

この一年の研修は自分が将来歯科医師としてどう生きていくかをよく考えるための期間であったと思います。今後も歯科医師としての能力を向上させるために努力していくつもりです。最後となりますが、半年ずつお世話になった永山センター歯科、小児歯科の先生方にはとても感謝しています。ありがとうございました。

大学院修了にあたって

バンコクの思い出

生体材料学分野 本 間 喜久男



2007年11月の終わり頃、タイのバンコクで、日本歯科理工学会の「国際歯科材料会議」が開催された。私は、数種類の電解液中で陽極酸化した矯正用 Ni-Ti ワイヤの実験結果を発表すべく、バンコクへ向かった。初めての海外旅行だった。飛行機も、過去に1回しか乗ったことがなかったのである。学会発表は、初めてではなかったが、遠方であっても高速バスやフェリーを利用していたのだ。

成田空港で、日本円をタイ・バーツに替えた。タイの紙幣は、不思議な匂いがした。いよいよ、海外へ発つのであった。慣れない飛行機に乗って、バンコクに着いたのは夜であった。空港で、いきなり迷子になった。右も左も分からない。取りあえず、日本人らしき人が歩いて行く方向へ向かった。荷物が回転してたが、勝手に取って良いのかも分からず、しばし悩んだ。入国チェックの行列に並んで、言葉も分からなかったが、無事、通過した。タイ人ガイドの車に乗って、市内のホテルへ向かった。ホテルは立派だったが、古かった。荷物を運んでくれた兄さんに、初めてのチップを手渡した。翌日、観光だったので、すぐ寝た。

5時30分頃、日本時間なら7時30分頃、起きた。ネットでも書かれてたが、ホテルは水回りに欠陥があり、シャワーの調子が今一だった。数字を記憶させる金庫が、操作ミスで開かなくなり、警備のおじさんに無茶苦茶な英語を話して、何とか開けてもらった。

7時30分頃、タイ人ガイド(男)が迎えに来た。団車で観光。車中、ガイドはきれいな日本語で「男

が好きだ」とカオカシなことばかり言うのだったが、それはサービスなのだった。気候は、日本の夏のようなが、蒸し暑くはなかった。「暁の寺院」を見るため、川を渡るのだった。汚い、木造の船着き場から、ハシケとでもいうべき船に乗った。川は浅いのか薄緑に濁っていた。遠く、高層ビルが、かすんで見え、異国にいることを実感した。対岸に着いた頃、国歌が流れ始めた。終わるまで、動いてはいけないのだった。遠くから見た寺院の塔は灰色だったが、近くで見ると陶製のタイルや食器がびっしりと貼り付けてあった。塔は、かなり危険な作りで、高所恐怖症の私は、途中までしか登れなかった。その後、王宮を観て、食事をした。宝石店では、彼女に買っていきなさいと日本語で言われ、そのような人はいないと返したら、老母に約2,800円のペンダントを買うはめになった。さらに免税店へ行き、ドライフルーツなどを買った。そこで解散となり、免税店のトゥクトゥク(3輪タクシー)で、駅まで送ってもらったのだ。

モノレールのような新しい電車で、バンコク中心街へ行った。セブンイレブンやファーマがあり、タイ製豆乳を買った。とにかく安く、量があり、甘かった。タイ語が全く分からないので、紀伊屋や伊丹を攻めた。日本の雑誌やマンガも売られてたが、かなり割高なのだった。タイ版のDVD『機動戦士ガンダム』(劇場版全3巻)を買った。ものすごく安い。多分、正規版だと思うが、一昔前はコピー商品があふれてたのがバンコクだった。何も調べないで入国したので、海外ゲームとかは見つけられなかった。言葉は通じないが、東京で買い物してるような感じだった。タイ料理のファストフードは、かなり辛口だった。外国人向けホテルよりも味付けがラブなのだ。道路の排気ガスには閉口した。

翌日、ポスター発表をした。英語で質問されると厳しい状況だったが、質問はなかった。言葉が

通じないというのは、不思議な感覚だ。数日間だが、極めて貴重な体験だった。最後に、学会発表をサポートしてくれた先生方に感謝したい。

大学院修了にあたって

生体歯科補綴学分野 川 崎 真依子

この内容での原稿依頼を頂いた時、「そもそも修了できるのだろうか？」と心配だったことは置いておくとして、気付けば、母校の日本大学を卒業してから新潟大学にお世話になって6年が経ちました。2年の研修医を終えてからの大学院4年間は、あっという間であったと言えるほど簡単に過ぎ去ってはくれませんでした。毎日が自分の人生観を確実に変えていったと思います。小学生レベルの歩みでお恥ずかしいですが、私の4年間を少しお話しすると、最初の1年目は、時間の使い方を苦労していたように思います。臨床の大学院生という立場でもあったために、臨床と研究の時間の割り振りが常に頭痛の種でした。ただ、私の研究テーマは臨床研究だったので、自分の患者様に被験者として協力していただく場合もあり、患者様とのコミュニケーション能力を高めることに集中できました。2年目と3年目は、ひたすら臨床研究のプロトコル作製の勉強をしていました。どんな実験でもそうだと思いますが、計画の段階でゴールを見据えたキメの細かい計画を立てないと、かなり痛い目に会います。そして、その2、3年目で詰め甘い実験計画をそのまま進めたために、4年目で苦労したのは、言うまでもありません。こういった話は、先生や先輩から耳にタコができるくらい言われていましたが、たいていは、自ら体験して初めて学習するものです。

それでは、暗い迷路の中のような4年間であちこち頭をぶつけながら私が何を研究していたかという、義歯の着脱を補助する器具を考案し、その評価を行う中で、超高齢化の進む現代の医療現場における歯科治療の問題点とその解決法を模索していました。現在の補綴治療で提供できる可撤性義歯は健常者を対象に考えられており、手指にある障害や、視力の弱い患者様にとって、維持装

置がついた義歯は、とても慣れるものではないのです。現代社会においては、安全に使用できる義歯の考案は急務であると考えています。本研究では、まだ1つの試みでしかありませんが、今後とも要介護者のための補綴治療を考えていきたいと思っています。学位研究以外にも、補綴治療前後の患者様のQOLの測定と、咀嚼能率や咬合力を測定しました。この研究により、インプラントおよび可撤性義歯共に、治療後の患者様のQOLと咀嚼能率や咬合力を有意に向上させることが分かっただけでなく、さらに興味深いことに、患者様は可撤性義歯もインプラント義歯とあまり変わらない評価をしていることがわかりました。この結果により、現在の、インプラント治療ありきの治療方針に警鐘を鳴らすことができたと考えています。今後は、私達が、患者様のQOLに基づいた治療を行っているのが評価するための機構の立ち上げが求められていくと思います。この他にも、株式会社ブルボンとの共同研究で、嚥下が困難な高齢者のための補助食品の開発にも携わる機会を得て、実験計画の立案、生理学的手法の習得、企業との連携を学ぶ機会を得ました。さらに、4年目になり、基礎的研究にも携わり、違う視点を学んでいます。基礎研究の概念や手法を学ぶことで、臨床の現場で沸き起こる疑問を、臨床研究と基礎研究の両面から解明することができるようになることが今後の目標です。このように、私の4年間は、多くの研究の種を撒いただけだと思います。これからこの種に水をやり、大きな花を咲かせなくてはなりません。こんな私を見捨てずに支えてくださった多くの先生方、奇特にも、私をもらってくれた主人にはどんな感謝の言葉も足りない気がしますが、これも運命ということで今後も前向きにお付き合い頂けたらと思います。

卒業にあたり

顎顔面口腔外科学分野 池 野 良

2005年に新潟大学大学院顎顔面口腔外科に入学し、4年が経過しました。入学時は4年間という時間は長いと感じていたのですが、現在の心境で

は短かったと感じています。短く感じる原因は、我に返る暇を与えない医局の忙しさ、いやいや充実感だと考えています。

大学院1年目は外来、病棟、麻酔という口腔外科の研修を4ヶ月ずつローテーションし、その後は高木教授と共に感染症の研究を3年間させて頂きました。この4年間の思い出を簡単に振り返ってみます。

大学院1年、意気揚々と大学院入学したが同期は誰もいない事が判明。諸先輩方に、「1人で大変だねえ、まあがんばって」と聞き様によっては熱い激励を受けました。しばらくすると、数多の医局行事が訪れ「まあがんばって」の意味がわかってきたのは冬（当科の年末統計のころ）でした。色々ある医局行事を何とか執り行う事が出来たのは、先輩方の力があってこそだと実感しています。「がんばれ」と言いながら、助けてくれる先輩方の男気（女性の先輩もいますが）には感謝しています。大学院1年時の最も印象深いイベントは実は交通事故です。大学病院からの帰宅途中で、事故に会い再び大学病院に戻ってきたのを今でも鮮明に覚えています。「そんなに帰りたくなかったのか？」と後日ありがたい言葉を先輩に頂きました。確かに帰りたくない日もありますが……。

2年目以降は、臨床に加え研究も始まりました。私はHIVの研究をさせて頂きました。HIVについての知識は一般知識程度しか無く、臨床・研究ともに不安だったのを覚えています。不安の解消

方法は、勉強でした。様々な文献を読み知見を増やしたつもりです（まだまだ、知識は少なく恥ずかしい限りです）。研究では、2年の後半より当科と関連のある慶應大学免疫学教室加藤真吾先生からも御指導頂きました。毎月慶應大学に通い、加藤先生から厳しくも丁寧に実験・研究の手解きをして頂きました。ウイルス学だけではなく、検査体制や倫理の問題など、今まで勉強してこなかった分野の知見が得られました。加藤先生とはよくノミネーションをさせて頂きました。その時間いた科学の面白さや可能性について話は興味深く、最先端の科学というものをチラッと見せて頂きました。

大学院3年目で行った日本エイズ学会の発表は印象深いものでした。やっとでた研究結果での報告は、思い入れが強くなるものです。それ以上に、記憶に残った理由は、発表時にオーブンが学会に来られず1人だったことです。質問の返答には、手に汗握るものがありました。結果として、この経験が自信となりました。

臨床、実験、学会発表や論文制作等と日々を過ごすうちに、気付けば4年が経過していました。この4年は私の人生の中で濃厚な4年であって、色々な経験をさせてもらいました。知識や技術が増えました。体重とお腹まわりも増えました。今後は、「知識を増やして、体重減らせを」を座右の銘にしてがんばっていかうと思います。



平成21年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（学術）	鈴木 亜夕帆 （予防歯科学）	義歯による疼痛が高齢者の食品摂取に与える影響
博士（歯学）	ALVARADO GALVEZ CARLOS ALBERTO （顎顔面口腔外科学）	Nuclear translocation of β -catenin synchronized with loss of E-cadherin in oral epithelial dysplasia with the characteristic two-phase appearance （口腔粘膜の二層性異型上皮における β カテニンの核転位と E-カドヘリンの消失の同期）
博士（歯学）	SOBHAN UBAIDUS （顎顔面口腔外科学）	FGF23 is mainly synthesized by osteocytes in regularly distributed osteocytic lacunar canalicular system established after physiological bone remodeling （FGF23は生理的骨改造で規則的に構築された骨細管系の骨細胞によって合成される）
博士（歯学）	AL-ERYANI KAMAL AHMED HASAN （口腔病理学）	Hemophagocytosis-related keratinization in squamous cell carcinoma and carcinoma in-situ of the oral mucosa: a possible histopathogenesis of keratin pearls （口腔粘膜癌細胞による赤血球貪食誘導性角化：癌真珠の形成機転）
博士（歯学）	BATHEEGAMA GAMMACHARIGE THARANGA LAKMALI NANDASENA （口腔解剖学）	Immunolocalization of aquaporin-1 in the mechanoreceptive Ruffini endings in the periodontal ligament （歯根膜の機械受容性ルフィニ神経終末におけるアクアポリン 1 の免疫組織化学的局在）
博士（学術）	増田 明 美 （口腔生理学）	通信制高等学校保健室における健康支援に関する研究—常勤の養護教諭が配置されている通信制高等学校保健室の課題と健康支援の実態より—
博士（歯学）	敦井 智賀子 （摂食・嚥下リハビリテーション学）	下顎運動時の胸鎖乳突筋ならびに後頸筋群の筋電図学的評価
博士（歯学）	篠倉 千 恵 （歯科矯正学）	骨格性下顎前突症患者における嚥下時筋活動様式の特徴
博士（歯学）	中川 英 蔵 （歯周診断・再建学）	Odontogenic Potential of Post-natal Oral Mucosal Epithelium （マウス口蓋粘膜上皮細胞を用いた歯胚再生）
博士（歯学）	竹内 優美子 （小児歯科学）	前歯部萌出状態が小児の一口量に及ぼす影響
博士（歯学）	本間 喜久男 （生体材料学）	陽極酸化を行った Ni-Ti 矯正用ワイヤのフッ化物を含む酸性溶液中での耐食性の評価
博士（歯学）	杉浦 貴美子 （予防歯科学）	小規模障害者施設における心身障害者のう蝕及び歯周病の罹患状況に関する調査
博士（歯学）	薄波 清 美 （予防歯科学）	特定高齢者における口腔機能向上プログラムによる口腔機能向上効果
博士（歯学）	梅津 英 裕 （予防歯科学）	Association between Glucan Synthesis by <i>Streptococcus mutans</i> and Caries Incidence in Schoolchildren using Fluoride Mouthrinse （フッ化物洗口実施小学校児童における <i>Streptococcus mutans</i> によるグルカン合成とう蝕発生との関連）
博士（歯学）	浅井 哲 也 （う蝕学）	Effect of overglazed and polished surface finishes on the compressive fracture strength of machinable ceramic materials （マシーナブルセラミックの圧縮破折強度について—表面研磨及びブレース焼成の影響）

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	小 林 英 樹 （小児歯科学）	学校給食による咀嚼パラメーターの比較検討—麺類、米飯類、パン類の相違点について—
博士（歯学）	川 崎 真依子 （生体歯科補綴学）	Evaluation of newly developed devices for denture placement and removal in the dependent elderly （要介護者のために新しく考案した義歯着脱補助具の評価）
博士（歯学）	池 野 良 （顎顔面口腔外科学）	HIV-1感染者における唾液中ウイルスの定量的研究
博士（歯学）	HOSSAIN MOHAMMAD ZAKIR （口腔生理学）	Discharge of muscle spindles of jaw-closing muscles during chewing different hardness of foods in awake rabbits （硬さの異なる食物咀嚼時における閉口筋紡錘の活動様式）
博士（歯学）	鈴 木 温 子 （口腔生理学）	介護老人福祉施設の実態と介護職員の評価
博士（歯学）	内 藤 守 （摂食・嚥下リハビリテーション学）	統合失調症患者における多飲行動と口腔乾燥感および唾液分泌量との関連
博士（歯学）	近 藤 匡 晴 （摂食・嚥下リハビリテーション学）	Impact on Eating Functions of the Elderly in Need of Care with Home Care Management and Guidance （居宅療養管理指導が要介護高齢者の摂食機能に及ぼす効果）
博士（歯学）	三 浦 俊 英 （口腔生化学）	ラット血中骨型酒石酸抵抗性酸性フォスファターゼ（TRACP-5 b）測定試薬の開発とその基礎性能
博士（歯学）	高 井 貞 浩 （組織再建口腔外科学）	顎変形症患者における咽頭気道形態の3次元CT評価
博士（歯学）	岩 崎 正 則 （予防歯科学）	Longitudinal study on the relationship between serum albumin and periodontal disease （血清アルブミンと歯周病の関係についての経年的評価）
博士（歯学）	金 子 正 幸 （予防歯科学）	Relationship between root caries and cardiac arrhythmia （後期高齢者における根面う蝕と心臓不整脈の関連）



平成21年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻論文博士取得者

博士の専攻 分野の名称	氏名	博士論文名
博士（歯学）	Wanninayake Mudiyanselage Tilakaratne	Epithelial salivary tumors in Sri Lanka: A retrospective study of 713 cases （スリランカにおける上皮性唾液腺腫瘍713例の臨床病理学的解析）



平成21年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻修士課程修了者論文名

修士の専攻 分野の名称	氏名	修士論文名
修士 (口腔保健福祉学)	市 川 加 奈	Relationship between the amount of saliva and medications in elderly individuals (高齢者における唾液量と薬剤との相関について)
修士 (口腔保健福祉学)	大 岩 典 代	口腔癌放射線治療患者に対し口腔ケアを行った経験一患者 QOL からみた口腔ケアの有用性に関する検討
修士 (口腔保健福祉学)	丸 山 美 嶺	施設入所承認申立等裁判例からみた子ども虐待の援助課程に関する研究
修士 (口腔保健福祉学)	石 澤 尚 子	新潟県内の障害(児)者福祉施設における食介助および摂食機能維持向上のための取り組みの現状
修士 (口腔保健福祉学)	平 林 友 香	要介護高齢者に対する口腔ケアに関する研究～認知症対応型共同生活介護事業所介護職を対象とした質的調査から～
修士 (口腔保健福祉学)	米 澤 大 輔	Cardiovascular disease and antibodies to <i>Porphyromonas gingivalis</i> : a result from a Japanese cohort (心血管疾患と <i>Porphyromonas gingivalis</i> に対する血清抗体価との関連について：日本の後向きコホート研究における報告)



HIROSHIMA (a tale of nuclear devastation)

Division of Bio-chemistry, Faculty of
Oral and maxillo facial surgery.

SULTANA SARA



• Well, I tried to stop time completely, but now its almost the ending time to write something for students of Dental

school in Journal SHIGAKUBU-NEWS. So, i decided to write about me., It has many things to do with having a boring (i mean wonderful) life. (Ha!! Just kidding of course)

• To begin, I turned twenty eight, am a wife, mother of one boy and 2nd year student of Niigata university (feeling proud) toward earning a phd degree. Anywayz, today I like to share one cock and bull story., (habing doubt ??) Its about the story about Hiroshima. Though I am sure every japeenes knows the story



very well than me but as a foreign student I want to share my experience with you !!

- Hiroshima, the one of the biggest city in Japan. Offcourse one of the beautiful city also. The people who want to visit Hiroshima now might be surprised to see its beauty now. But the city was not like this after 6 th august 1945. it was the time 8.15 when the clock stopped.
- It was the worst thing that did by the American during any world war so far.
- There are a lot of innocent people killed who never know why they were killed, they never even in the dream cannot imagine that why they are suffering still now, they effect of the bombing are still continued in new generation.
- Our journey starts from 5th august to join the peach event 2009 in Hiroshima.
- We arrived Hiroshima on 5th and look around the city and the area of the

peach event on that day. But eagerly waited for the next day when the peach event will start.

- I am very much curious about the event because we learn this story from our childhood in our text book.
- I wanted to know the details of the story wanted to know the situation, wanted to know the feelings of the people of Hiroshima wanted to know the feelings of the people who are not affected, wanted to know the feelings of the new generation.
- At last the day came we all went to join the peach event.
- I am surprised to see the people join the event. There are many people from different country also join the event. 55 country's minister join this event also.
- The event starts by flaming white bird which the symbol of peace.
- At first the governor of Hiroshima gives a speech then the prime minister of Japan.
- After this event we looked around different area
- The atomic bomb dome which is the world heritage. The cenotaph for

the atomic bomb victim.

- Children peace monument which is very shocking.
- The flame of peach.
- There is a museum inside the peach memorial park which is called peach memorial museum.
- There are so many damaged occurred on that time.
- Shiroyama primary school leveled by the blast. urakami cathedral destroyed in an instant. 300 year old camphor tree uprooted by the blast. so many people are suffered on radiation burn.
- The one of the exciting one was the paper lanterns carrying peace messages wrote in my own language (bangla).
- It cannot be believed if someone does not see by his own eyes.
- How cruel human can be?
- The whole city was burnt to ashes.
- People who died on the spot was lucky because the people who alive they suffered most that is the most pathetic they survived for life they don't have any space to stay there is no water, everyone shouting water. It cannot be tolerated.



“Salar de Uyuni” : A place so close to the sky that you can walk in the clouds.

Bio-Prosthodontics Marcelo Rosales R.

Hello every one. My name is Marcelo Rosales, I am from Bolivia and currently studying in the Division of Bio-Prosthodontics at Niigata University. I've been in Japan for a couple of years by now, and little by little I learned about the language, traditions, believes and many other things from this beautiful country. For me, every day is an adventure, there is always something new to “discover”, something new to learn, some one new to meet. Like St. Augustine said, “The world is a book and those who do not travel read only one page” and I believe that as well.



(Photo: traveling through Uyuni “Fuori Concorso”)

I would like to take this opportunity to encourage all of you to visit other countries, to go abroad, to experience life in a different way. What do you have to lose? “Twenty years from now you will be more disappointed by the things you didn’t do than by the ones you did do. So throw off the bowlines, sail away

from the safe harbor. Catch the trade winds in your sails. Explore. Dream. Discover.” (Mark Twain). Besides, there are no foreign lands. It is the traveler only who is foreign.

I am convinced that in this ever-changing world, to remain fit and competent in this time of globalization traveling has become of utmost importance. The use of traveling has been and still is a way to regulate imagination by reality, that instead of thinking how things may be, to see them as they are. Henry Miller wrote that a travel destination is never a place, but a new way of seeing things. To travel is to discover that everyone is wrong about other countries.

For me, coming to Japan is one of the most gratifying experiences of my life, not only for the knowledge I receive, but for the people I met. A journey is best measured in friends, rather than in distance.

Since I am encouraging you to travel, may I also suggest you a place? How about my country? Yes, Bolivia, this time I will particularly write about a place that gathered some attention last year since there was a documentary about it in the Japanese television. The place is called “El Salar de Uyuni” or in English “The Uyuni salt flats”.



(Photo : Salar de Uyuni)

Salar de Uyuni is the world's largest salt flat with 10,582 square kilometers. It is located in the Potosí and Oruro departments in southwest Bolivia, near the crest of the Andes, and is elevated 3,656 meters above the mean sea level. The Salar was formed as a result of transformations between several prehistoric lakes. It is covered by a few meters of salt crust, which has an extraordinary flatness with the average altitude variations within one meter over the entire area. The crust serves as a source of salt and covers a pool of brine, which is exceptionally rich in lithium. It contains 50 to 70% of the world's lithium reserves, but that lithium is not being extracted yet. The large area, clear skies and exceptional surface flatness make the Salar an ideal object for calibrating the altimeters of the Earth observation satellites. The Salar serves as the major transport route across the Bolivian Altiplano and is a major breeding ground for several species of pink flamingos.

The name Salar de Uyuni originates from the Aymara language. Aymara legend tells that the mountains Tunupa, Kusku and Kusina, which surround the Salar, were giant people. Tunupa married Kusku, but Kusku ran

away from her with Kusina. Grieving Tunupa started to cry while breast-feeding her son. Her tears mixed with milk and formed the Salar.

Salar de Uyuni steadily attracts tourists from all around the world.



(Photo : Salar de Uyuni Tourist from different countries place their flag in the salt)

As it is located far from the cities, a number of hotels have been raised in the area over the years. For several reasons, including lack of conventional construction materials, many of them are almost entirely (including walls, roof, beds, chairs, tables, etc.) built using salt blocks cut from the surface of the Salar.



(Photo : Hotel made entirely of salt.)

In the low-rain period, from April to November, the skies above it are very clear, and the air is dry (relative humidity is about 30%, rainfall is roughly 1 millimeter). Absence of large-scale industries in the area and the high ground elevation also contribute to the cleanness of the air. The Salar also has a stable surface which is

smoothened by seasonal flooding. When covered with water, the Salar becomes one of the largest mirrors on Earth giving a spectacular display where the sky merges with its reflection on the water giving the sensation of been “walking in the clouds!” For me the view is just breath taking.

So...What do you think? Although Bolivia is far away would you go? I certainly hope you do. As Lao Tzu said, “A journey of a thousand miles must begin with a single step.”



(Photo: Reflection of the sky on the water, in the middle there is a bus and looks like it is flying in the sky.)

The Hidden Treasure

Department of
Orthodontics

Dr. Humayra Binte Anwar

Hello everyone. I am Humayra, doing my PhD in the department of Orthodontics and Dentofacial Orthopedics, Niigata University. I am from Bangladesh. All of you already know the name “Bangladesh” as there are lots of Bangladeshi students studying in Niigata University. But I am sure most of you don’t know about Bangladesh as an eye-catching holiday spot for the sightseer. It is almost impossible to enlighten you about everything of my country. Here I am going to inform about the natural beauty and tourist attractions of Bangladesh.



Bangladesh is a country in South Asia, bordered by India on all sides except for a small border with Burma (Myanmar) to the far southeast and by the Bay of Bengal to the south. As you fly over Bangladesh a mosaic of green farmlands and streaks of meandering rivers offer themselves

in an unforgettable kaleidoscope of colors. Here in this magazine my sincere intention to highlight the attractions of Bangladesh.

Dhaka :

The capital of Bangladesh is Dhaka with its exciting history and rich culture, known the world over as the city of mosques and muslin. Some of the outstanding tourist attractions of Dhaka are : Seven domed Mosque (17th century), Baitul Mukarram National Mosque, and Star Mosque (18th century). Hindu Temples: Dhakshwari Temple (11th Century), Lalbagh Fort : was built in 1687 A.D., by Prince Mohammad Azam, son of Mughal emperor Aurangazeb. Ahsan



The National Mosque, Dhaka



Hindu Temple, Dhaka



Lalbagh Fort, Dhaka



Parliament House



Ahsan manjil, Dhaka



National Memorial



Dhaka University

Manzil Museum: an example of the nation's rich cultural heritage, Dhaka University, Central Shahid Minar: Symbol of Bangladesh nationalism: this monument was built to commemorate the martyrs of the historic Language Movement of 1952, National Assembly: Jatiya Sangshad Bhaban (Parliament House) designed by the famous architect Louis, Kahn, has distinctive architectural features, National Memorial: sacred memory of the millions of unknown martyrs of the 1971 war of liberation, Other attractions in and around Dhaka include the institute of Arts and

Crafts with its representative collection of folk art and paintings, handi-craft shops, cruising by country boat in the nearby river. Last but not the least travel by a horse driven cart or rickshaw along busy Dhaka streets is a rewarding experience.

Chittagong (GATEWAY TO THE BAY OF BENGAL):

Chittagong, the second largest city of Bangladesh and a busy international seaport, is an ideal vacation spot. Its green hills and forests, its broad sandy beaches and its fine cool climate always attract the holiday-makers; Described by the Chinese traveler poet, Huen Tsang (7th century A. D) as "a sleeping beauty emerging from mists and water". The most favorite tourist spot in Chittagong is the Cox's Bazar, the tourist capital of Bangladesh. Having the world's longest (120 kilometers) beach sloping gently down to the blue waters of



Kaptai lake, Chittagong



Saint Martin, The coral Island



Cox's bazar Sun set



Foys Lake

the Bay of Bengal, Miles of golden sands, towering cliffs, surfing waves, rare conch shells, colorful pagodas, Buddhist temples and tribes, delightful sea-food, Cox's Bazar is one of the most attractive tourist sport in the country. Other attractions in Cox's Bazar for visitors are conch shell market, tribal handicraft, salt and prawn cultivation, the Aggameda Khyang, Himchari, Inani Beach, Ramu: a typical Buddhist village, Teknaf: Southernmost tip of Bangladesh, having wide sandy beach in the backdrop of high hills with green forests is an enchanting scene never to be forgotten. Other spots in Chittagong are Foy's Lake (Pahartali Lake): an ideal spot of outing and picnic, Patenga and Fouzdarhat Sea Beaches. The hill Tracts Districts with its perennial forest, thrilling drives through hills and dales, emerald blue water of Kaptai Lake, colourful tribal

life and culture, attractive handicrafts and artisans invites you to a world of panoramic beautiful nature. Greater Hill Tracts is divided into three districts, namely Rangamati, Khagrachari and Bandarban each one equally unique in its attractions.

Rangamati is a favorites holiday resort because of its beautiful landscape, scenic beauty, lake, colorful tribes (Chakma, Marma etc.), its flora and fauna, tribal museum, hanging bridge, homespun textile products, ivory jewellery and the tribal men and women who fashion them. For tour-



Bandarban Buddhist Temple

ists the attractions of Rangamati are numerous, tribal life, fishing, speed boat cruising, water skiing, hiking, bathing or merely enjoying nature as it is. Famous Kaptai Lake, the largest “man-made” lake, spreading over 680 sq. km. of crystal-clean water flanked by hills and evergreen forests lies in the Rangamati Hill District.

SYLHET-LAND OF TWO LEAVES AND A BUD

Next to the Hill Tracts, Sylhet is the widely hilly district in the country. Nestled in the picturesque Surma valley amidst scenic tea plantations and lush green tropical forest, it is a prime attraction for all tourists. Its terraced tea gardens, eye catching orange groves and pineapple plantations and hills covered with tropical forests form a beautiful landscape. The Sylhet valley has a good number of haors which are big natural wetlands. These haors provide sanctuary to the million of migratory birds who fly from Siberia across the Himalayas to avoid the severe cold.



Tea garden, Sylhet

Srimangal in Sylhet, known as the tea capital of Bangladesh, is the main tea centre of the area. For miles and miles around, the visitor can see the tea gardens spread like green carpet over the plain land or on the sloping



Monipuri Tribal Dance

hills. Sylhet the tea granary of Bangladesh not only has over 150 tea gardens but also proudly possesses the largest tea gardens in the world both in area and production. Colorful Monipuri, Khasia and Garo tribes live in Sylhet. Jaflong is also a scenic spot nearby amidst tea gardens and rare beauty of rolling stones from hills.

SUNDARBANS-HOME OF THE ROYAL BENGAL TIGER & MANGROVE FOREST

Sundarban is the biggest mangrove forest, the home of the Royal Bengal Tiger. Its dense rain forests are criss crossed by a network of rivers and creeks.



Royal Bengal Tiger, Bangladesh

One finds here tides flowing in two directions in the same creek and often tigers swimming across a river or huge crocodiles basking in the sun.

Other wildlife in this region are cheetahs, spotted dears, monkeys, pythons, wild bears and hyenas. The Sundarbans is a cluster of islands with an approximate area of 6000 sq.



Deer, Shundarban



Paharpur

km. forming the largest block of littoral forests.

KUAKATA

A rare scenic beauty spot on the southernmost tip of Bangladesh. It has a wide sandy beach from where one can get the unique opportunity of seeing both the sunrise and sun setting.

MAINAMATI-SEAT OF LOST DYNASTIES

An extensive centre of Buddhist culture. On the slopes of these hills lie scattered a treasure of information about the early Buddhist civilization (7th-12th Century A. D.). A site museum houses the archaeological finds which include terra cotta plaques, bronze statues and casket, coins, jewellery, utensils, pottery and votive stupas embossed with Budd-

hist inscriptions.

PAHARPUR-THE LARGEST BUDDHIST SEAT OF LEARNING

This 7th century archaeological find is the most important and the largest known monastery south of the Himalayas has been excavated.

Despite of these places there are lots of other beautiful places in Bangladesh to visit. To my eyes not only the natural beauty but also the people, history, rich and lively culture, different colorful festivals all together make Bangladesh a precious treasure of Asia as well as the world which is still hidden to many of our eyes. So, I am inviting all of you to go and visit Bangladesh to enjoy Holidays and vacations and discover the gorgeous treasure as well.

Bangladesh is blessed

Department of Bio-Prosthodontics,
Niigata University

Dr. Md. Al-Amin Bhuiyan

Bangladesh, a small green speckle overshadowed by India, if looked for in the globe. Yet when looked deep into its root and core, one can find an origin full of history rich with culture and tradition. Although unaware, majority of Bangladeshi's are still holding on to their simple and authentic traditions. What other way is there to explain the wonderful come-back of traditional clothing and music in new productions? This just proves that we, the Bangladeshi's have not forgotten our culture or at least are trying to retain it in our everyday life.



The culture of Bangladesh is composite and over centuries has assimilated influences of Hinduism, Jainism, Buddhism, Islam, and Christianity. It is manifested in various forms, including music, dance and drama; art and craft; folklore and folktales; languages and literature, philosophy and religion, festivals and celebrations, as also in a distinct cuisine and culinary tradition. Bang-

ladesh is a glorious land for its culture and traditional beauty.

Traditions of Bangladesh: Religious festival:

Eid-e-Miladunnabi

Eid-e-Miladunnabi is the birth and death day of Prophet Muhammad (s). He was born and died the same day on 12th Rabiul Awal (Lunar Month). The day is national holiday, national flag is flown atop public and private houses and special food is served in orphanages, hospitals and jails. At night important public buildings are illuminated and milad mahfils are held.

Eid-ul-Fitr

The biggest Muslim festival observed throughout the world. This is held on the day following the Ramadan or the month of fasting. In Dhaka big congregations are held at the National Eidgah and many mosques.



Eid-ul-Adha

Second biggest festival of the Muslims. It is held marking the Hajj in

Mecca on the 10th Zilhaj, the lunar month. Eid congregations are held throughout the country. Animals are sacrificed in reminiscence of Hazrat Ibrahim's (AM) preparedness for the supreme sacrifice of his beloved son to Allah. It is a public holiday.



Muharram

Muharram procession is a ceremonial mournful procession of Muslim community. A large procession is brought out from the Hussaini Dalan Imambara on 10th Muharram in memory of the tragic martyrdom of Imam Hussain (RA) on this day at Karbala in Iraq. Same observations are made elsewhere in the country.



DurgaPuja

Durga Puja, the biggest festival of the Hindu community continues for ten days, the last three days being culmination with the idol immersed in rivers. In Dhaka the big celebrations

are held at Dhakeswari Temple, where a fair is also held and at the Ram Krishna Mission.



Christmas

Christmas, popularly called "Bara Din (Big Day)", is celebrated with pomp in Dhaka and elsewhere in the country. Several day-long large gatherings are held at St. Mary's Cathedral at Ramna, Portuguese Church at Tejgaon, Church of Bangladesh (Protestant) on Johnson Road and Bangladesh Baptist Sangha at Sadarghat Dhaka. Functions include illumination of churches, decorating Christmas tree and other Christian festivities.

Pohela Falgun



Bangladesh is a country where colourful fairs and festivals. In our Bangladesh the spring season stays for two months [Falgun and Chaitra]. A colorful festival held to welcome

Bashanto. Attired in reddish-yellow saris with red border and hairs decorated with flowers, young women and girls as well as young men and boys in traditional pajama and punjabi, carrying flowers, took part in the colorful march. A good number of kids also got their attractive faces painted with different motifs including birds, national flag, butterflies etc. Pohela Falgun is celebrated on February 13. It is called the 'Rituraj Bashonto'.

'Pohela Baishakh' festival



Bangladesh is called the land of six seasons (Sadartu). Bangla calendar year is traditionally divided into six seasons: Grisma (Summer), Barsa (Rainy), Sarat (Autumn), Hemanta (late Autumn), Shhit (Winter) and Basanta (Spring). Pahela Baishakh first day of the Bangla year Grisma (Summer).



Pahela Baishakh is celebrated in a festive manner in both. It falls on April 14 or April 15 of the Gregorian calendar depending on the use of the new amended or the old Bengali cal-

endar respectively. In Bangladesh, it is celebrated on April 14 according to the official amended calendar designed by the Bangla Academy. In Bangladesh, Pohela Boishakh is a national holiday and in West Bengal and Assam it is a public holiday. Celebrations of Pahela Baishakh started from Akbar's reign.



The main event of the day was to open a Halkhata or new book of accounts. This was wholly a financial affair. In villages, towns and cities, traders and businessmen closed their old account books and opened new ones. They used to invite their customers to share sweets and renew their business relationship with them. This tradition is still practiced, especially by jewelers.

Adivasi taant festival



Adivasi taant festival organised by Prabartana ends with the hopes of reviving the dying heritage. Women from the indigenous community demonstrated the magic of weaving

to the audience. The idea was to introduce city people to the vibrant native fabrics produced entirely by hand, starting from yarning the thread to coloring, designing and fabricating. I found in the internet about this and there one of the adivasis told this “The raw materials are very costly these days. Machine made clothes are cheaper. More and more people are using it, which is why the traditional fabrics are losing their place”. Adivasi taant has found favour with the people due to its bold use of colors, unique texture and intricate patterns.

Independence Day

March 26 is the day of Independence of Bangladesh. It is the biggest state festival. This day is most befittingly observed and the capital wears a festive look. It is a public holiday. The citizens of Dhaka wake up early in the morning with the booming of guns heralding the day. Citizens including government leaders and socio-political organizations and freedom fighters place floral wreaths at the National Martyrs Monument at Savar. Bangla Academy, Bangladesh Shilpakala Academy and other socio-cultural organizations hold cultural functions. At night the main public buildings are tastefully illuminated to



give the capital city a dazzling look. Similar functions are arranged in other parts of the country.

21st Feb, the National Mourning Day and World Mother Language Day

21 February is observed throughout the country to pay respect and homage to the sacred souls of the martyrs’ of Language Movement of 1952. Blood was shed on this day at the Central Shahid Minar (near Dhaka Medical College Hospital) area to establish Bangla as a state language of the then Pakistan. All subsequent movements including struggle for independence owe their origin to the historic language movement. The Shahid Minar (martyrs monument) is the symbol of sacrifice for Bangla, the mother tongue. The day is closed holiday. Mourning procedure begin in Dhaka at midnight with the song Amar vaier raktay rangano ekushay February (21st February, the day stained with my brothers’ blood). Nationals pay homage to the martyrs by placing flora wreaths at the Shahid Minar. Very recently the day has been declared World Mother Language Day by UNESCO.



Rabindra & Nazrul Jayanti

Birth anniversary of the noble laureate Rabindranath Tagore on 25th Baishakh (May) and that of the National Poet Kazi Nazrul Islam on 11th Jaystha (May) are observed throughout the country. Their death anniversaries are also marked in the same way. Big gatherings and song sessions organized by socio-cultural organizations are salient features of the observance of the days.

There are various other festivals that are habitually observed by Bangladeshis all the year round. The heart of Bengali culture is the Bengali

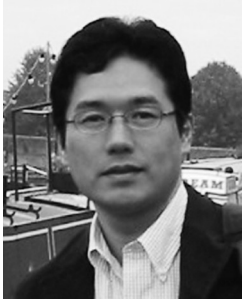


Tagore is the writer of our national anthem while National Poet Kazi Nazrul Islam is famous as Rebel Poet.

(Bangla) Language, which is one of the richest languages in the world. Bangladesh has a rich cultural heritage and I hope everyone will be encouraged to visit Bangladesh by my effort.



素 顔 拝 見



顎顔面口腔外科学分野・
講師

永 田 昌 毅

今回、原稿の依頼があり、振り返ってみれば歯学部入学以来かれこれ25年以上を新潟大学で過ごしてきました。自己紹介の原稿依頼ということですが、とにかく思いつくまま書き進んでいきたいと思っています。

学生時代はボート部に所属して積算すると6年のうち通算3年間は合宿状態にあって、朝5時起床の練習を信濃川（昭和大橋から白根の水域）でする毎日を過ごしていました。卒業するころには平穏時の脈拍数が45回/分の完璧なスポーツ心臓をもつアスリートに仕上がっていたわけですが、それだけではなく、思えばそのころに知り合った先輩や友人たちから卒業後も多くの機会や協力を得てここまで来ていることに気づかされます。現在もプライベートと職場の両方でボート部仲間との交遊や共同の仕事が頻繁につづいています。一方で、卒業してからも結果的にコーチングや部の後援も継続的につづけ、8年前からは全学のボート部監督として学生と付き合っています。

歯学部では卒業以来、顔面口腔外科（旧第二口腔外科・大橋靖名誉教授から、現・高木律男教授）に所属し口腔外科臨床、主に唇顎口蓋裂患者様や口腔癌患者様に対する治療を専門とします。研究活動についてはおそらく多く携わっている部類かと自任していますが、“口腔癌の精密診断”と“歯槽骨・顎骨再生”に関する研究に何人かの大学院生たち、あるいは内外の共同者とともに現在も取り組んでいます。そのあたりが私自身の持ち味（＝素顔？）でしょうから、やや本欄の主旨から離れることを自覚しつつ、内輪話をするよりむしろ以

下ではそのことを少しだけ紹介させていただきます。

【口腔癌の精密診断について】癌といえば命を脅かす疾患として、一様に怖いイメージをもたれる方がほとんどであるかと思います。しかし実際は約8割の口腔癌は制御（治癒）が可能で、同じ癌といってもその“悪性度”には非常に幅広い多様性が存在します。要はその多様性を正確に診断する方法を見つけ出すための精密診断が必要です。言い換えれば、治癒が可能な8割の口腔癌に対しては確実な治癒と最少の後遺症を実現し、残り2割の“本当に怖い癌”については先手を打った異なる治療体系を設計して将来的に救命率の向上をもたらすことが目的です。これまでに国内外で評価を受ける診断法も見つかっていますので、今年は実際に臨床化に向けた取り組みを始めたいと考えています。

【歯槽骨・顎骨再生】歯科の治療はそのほとんどが“再建”あるいは“再生”に相当するものです。その治療対象は“歯”だけでなく、実はその土台となる歯槽骨と顎骨が重要な対象になってきます。最近ますます多用されるようになってきているインプラント治療でもその多くが歯槽骨の再生を必要としていますし、前述の口腔癌治療においても治療後の顔の変形や咀嚼機能などの回復には顎骨を含む広い範囲の骨の再生が必要になります。どのように再生するか、“成長因子”を薬として投与する方法と“培養自家細胞”を使った方法を試行錯誤してきましたが、後者の自家細胞を移植する方法は臨床試験で効果が証明されつつありますので、これについても今年あたりに大学病院が提供する治療技術として診療化を進めていく予定です。

以上、堅い話ばかりになってしまいましたが、それらのフィールドを開拓することによって、願わくは将来の歯科医師や学生が携わる研究や実際の治療法につながればと考えています。

歯の診療室（う蝕学分野）

吉 羽 永 子

歯学科3年生の保存修復学実習チーフ5年目、
歯科医師になって約20年、(母親歴11年)……私の
素顔はこんなところでしょうか。今年からは、福
祉学科3年生の基礎実習と、3、4年生の臨床実
習も担当していますから、学生さんとは随分長い
付き合いになります。皆さん「永子先生」と(親
しみを込めて、たぶん)呼んでくださいます。私
は、この呼ばれ方が好きです。

[教育について]

3年生の保存修復学実習は臨床実習の最初にあ
たるもので、毎年気合いが入ります。何年やって
も飽きません。こちらが一生懸命であればあるほ
ど、学生さんから返ってくるものも大きく、やり
がいがあります。実習では、「しかる」ことはあつ
ても「怒る」ことはありません。怒鳴ることほど
教育的効果のないものはありません。11年間の母
親行を通し体得したことです。子育てで学んだこ
とを社会的にフィードバックできる回路を有する
ことは、素晴らしいことだと思います。ところで
この1月から、4階の実習室はここだけ“別世界”
になりました。実習はかなりスムーズかつ効率的
に進むようになり、設備の充実がこうも教育に影
響するものかと、現場にいると実感できます。気
がかりな事は、この状態をどれだけ維持できるか
ということです。使用者一人一人の自覚に関わつ
ています。基本は、個人で使用する場合でも、終
了目標時刻の10分前には実習を打ち切り、その10
分間を実習機・器具・機材のメンテナンスに当て
て下さいということです。ぎりぎりまでやって急
いで帰るようでは、大変困ります。各自のゴミも
持ち帰って下さい。

[研究について]

研究は一貫して、「細胞外基質」の仕事をしてき
ました。20年ほど研究をしてきて思うことは、「研
究」は「釣り」と同じであるということです。あ
れやこれやと作戦を練り、「やってみなければ分
からない」とばかりに、エサを投げ入れ、待つて
みる。なかなかつれない……。そうこうしてい
るうちに、「ぐい!」と引きがきて、この瞬間がたま

ない。そうでないことも多い。けれども、また、
釣り糸を垂れる。この繰り返し。こりることはあ
りません(アホなんでしょうね)。研究は「続ける
努力」よりも「つなげる努力」が必要なんだとも
思います。特に、臨床の講座にいとそうです。
時間が無い。頭の中での「つなげる努力」に費や
す時間が圧倒的に多い(笑)。

大いに時間に恵まれたこともありました。2年
間ほど、フランスのストラスブールにある Ruch
先生のラボに留学する機会を得た時です。Ruch
先生は Medical Doctor であるのですが、基
底膜の研究をされるのにマウスの歯胚を使ってい
たことから、歯の組織を扱っている方にも著名な
先生です。Ruch 先生との実験開始は、朝6時。
早寝早起きの私にはぴったりの時間帯で、時折日
本でもそうしています。朝早く仕事を始めると、
夕方5時にはくたびれます。ラボの周囲にはフラ
ンスでも(近頃では日本でもよくテレビで紹介さ
れています)有名な世界遺産の街があります。こ
の世界遺産の街のど真ん中を歩いて帰っていたの
ですから、それだけでなんとも贅沢な研究生活
だったわけです。

[プライベート、他]

学生時代は陸上部に所属し、何より走ることが
好きでした。フルマラソンを完走し、その後トラ
イアスロンに挑戦しようと、スイム、バイクとや
り、一年中真っ黒でした。これで、免疫体力も使
い果たしてしまったようです。今は、週末のファ
ミリー登山とウォーキングで体調管理に努めてい
ます。

朝、外来に行くと元気になります。あの外来ス
タッフのおかげです。皆さん明るくてすごくよい
雰囲気です。外来ではウォームハート・クールヘッ
ドを心掛けますが、まだまだを感じることも……
です。当医局も負けず居心地良好です。これまで、
医局の皆さんを初め、外来のスタッフの皆さん他、
多くの方々に支えていただきました。心から感謝
です。何度ピンチを救っていただいたことか……。
本当にありがとうございました。これからは、そ
のお返しを心掛けながらと思っております。どう
ぞ宜しくお願いいたします。



医歯学系・助教
(口腔病理学分野)

山崎 学

平成21年7月に口腔病理学分野の助教に就任いたしました山崎と申します。出身は新潟県長岡市で、本学31期生です。高校生の頃に矯正治療を受けたこともあり、当初は矯正歯科医にあこがれて歯学部に入りました。ところが、3年次の病理学の講義をきっかけに基礎研究に興味を持ち始め、口腔病理学分野の門をたたきました。それから早12年が経ち、現在に至っています。歯学部卒業後は札幌医科大学口腔外科学講座に臨床研修医として1年間お世話になり、将来は研究の道に進みたいという不純な(?)動機にもかかわらず、当時の教授の小浜源郁先生をはじめ、同期や先輩の先生方によく面倒を見ていただきました。その後、新潟に戻り口腔病理学分野の大学院に進みました。大学院時代には、朔教授のもと、病理形態学の基礎をみっちり叩き込んでいただき、研究面では免疫系細胞による細胞外基質合成について検討を行いました。ネガティブデータばかりが続いて挫折を味わった時期もありましたが、無事修了できたのは教室の先生方にご支援いただいたおかげです。大学院修了後はがん研究振興財団のリサーチ・レジデントに応募して、千葉県柏市にある国立がんセンター東病院臨床開発センター臨床腫瘍病理部の落合淳志先生のもとに3年間お世話になりました。国立がんセンター東病院はがん治療の専門施設であるだけでなく、臨床・基礎問わず研究活動が非常に活発に行われており、臨床と基礎の距離がとても近いのが印象的でした。研究のテーマはガラリと変わって、がん治療と味覚障害になりました。マウスに放射線をあてたり、さまざまな濃度で甘味や苦味をつけた水を飲む量を測ったりと、かなり地味な実験の連続です。有郭乳頭を対象に調べていましたが、1匹のマウスに1個しかなく、それも極小なので、連続切片を作製する際にうっかり切りすぎて、時間をかけて準

備したサンプルを駄目にしてしまうこともありました。私以外に味覚の研究者はいませんでしたので、実験方法や機材などの面で苦労もありましたが、研究が形になった時はそのぶん喜びも大きかったです。はじめは、がんセンターで味覚の研究? と思いましたが、調べてみると味覚障害はまだまだ分かっていないことが多く、歯科医としてもっと積極的に研究に関わっていく必要がある分野と感じています。また、味覚研究のほかに、頭頸部腫瘍の病理診断や病理解剖も勉強させていただき、基礎・臨床ともに幅広い経験を重ねることができました。こうして、また新潟大学に戻ってこられたわけですが、私をここまで導いてくれた、魅力ある先生方との多くの出会いがあったからこそと思います。教員・研究者・口腔病理医のどれをとっても未熟者ではありますが、これからもひとつひとつの出会いを大切に、臨床に根差した、オリジナリティのある研究を進めていきたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

✧



医歯学系・助教
(う蝕学分野)

重谷 佳見

この度、平成21年7月1日より、う蝕学分野の助教に就任いたしました重谷です。

私は平成11年3月に29期生として本学を卒業し、旧保存学第一講座に所属して2年間の研修医期間を終えた後大学院へ進学しました。大学院を卒業後はドイツへ留学しましたが、それについては以前歯学部ニュースに寄稿しておりますので、こちらでは割愛させていただきます。帰国後は、新潟大学へ戻り、日々臨床、研究、教育に邁進している(?) 今日です。

私は、これまで「歯科用レーザー」を研究テーマとして、バイオマテリアルサイエンスおよびバイオロジーの検索を行ってきました。レーザー照

射後の歯髄反応はどうか？ 歯質の状態はどうか？ 辺縁部の封鎖性はどうか？ など、日々の臨床でいろいろな疑問が浮かび、その都度、その問題を解決できるように、研究を行っています。レーザーに興味のある方は、いつでもお声かけ下さい。

私は大阪府堺市で生まれ育ちました。堺は人口・面積が大阪府第2の都市であり、古墳群に囲まれ、茶の湯から鍛冶製鉄までと多彩な文化に恵まれた暮らし良い地域です。

そんな堺市で、第2次ベビーブーム真っ直中に生まれました。

皆様もご存じの通り大阪という地域性、歩くのが速く、信号は青になる前に横断し始めるという、せっかちな土地です。性格も、大阪ではそうでもなくとも、全国的にはせっかちな部類に分類されるのは当然かと思います。医局の先輩方からは、「せっかちくん」と呼ばれたりもしていました。そんな私も、この穏やかな新潟の地に定住し早16年。いまや随分ゆったりした性格になりました。

また、私は、幼少期から高校まで剣道を続けておりました。剣道から学んだ事、それは忍耐の一字です。早朝に始まる練習は過酷を極めました。底冷えする寒い朝の道場に、裸足は辛すぎました。幼い我々が寒さに足が痛いと言っても、冬が寒いのは当たり前だと一蹴され、真夏の蒸し暑い道場では限界まで給水を許されませんでした。当時はそういう風習だったと思うのですが、現在のスポーツ指導においては考えられない事です。また、稽古時間の早いこと。今でも朝から素振りを……というのは冗談ですが、三つ子の魂百までとは良く言ったもので、昔の習慣のままに今でも早朝に起きてしまうのです。早朝覚醒です。

そんな大阪時代を過ごした私ですが、新潟に来てからはもっぱら学業以外に勤しみ、特にゴルフには時間を割いてきました。最近ゴルフが大変メジャーになり若い女性にも人気ですが、ゴルフは何歳になっても出来る良いスポーツだと思います。私も長年ゴルフを続けたことで様々な人達と知り合い、普段ならお近づきにもならないような立場の方とも仲良く交流させていただきました。最近の歯学部コンペは参加する方が限定されてき

ましたが、これまで参加されていない先生や学生さん達も是非参加していただきたいと思います。仕事以外で新たな交流が持てる数少ない機会ですし、普段とは違う姿に接するのは新鮮な気持ちがするものです。

最後になりましたが、まだまだ未熟な私です。これからもよろしくお願いします。

＊



地域保健医療推進部

新 美 奏 恵

この度「素顔拝見」ということで、原稿のご依頼をいただきました。ほんの少し生い立ちや大学での仕事などを書かせていただきたいと思います。

新潟生まれの新潟育ちで、大学も新潟、そのため新潟を離れて生活したことはほとんどありません。それでも両親が愛知県の出身のため、特に食文化は小学校に上がるくらいまではほとんど新潟特有の文化に触れた事はありませんでした。一番鮮明に覚えているショッキングな出来事は、小学校で出たお味噌汁が「白かった」事です。それまで自宅でお味噌汁といえば「赤い」ものでした。一体これは何の食べ物なのか、献立表には味噌汁と書いてあるけど……。恐る恐る食べてみると、とてもおいしい！ 今でも自宅でのお味噌汁は赤いですが、さすがに外でいただく白味噌のお味噌汁も普通に思えるようになりました。中学校時代はバレーボール、高校時代はボート部に所属し、意外と（？）体育会系なのですが、小さいころからの人見知りや引っ込み思案はあまり克服できず、現在に至っています。

大学時代は高校時代とは全く違う環境で、全国の色々なところから来た同級生がいたおかげで少し視野が広がったようでした。楽しく色々な勉強をさせてもらいましたが、もともと不器用な私は実習の時間がとても大変でした。みんなの何倍も

時間がかかってライターの方々に迷惑ばかりかかっていたような記憶があります（すみません……）。そんな私でもなんとか6年生になり、初めて患者様に接して、治療をさせていただいた時にはものすごく緊張していたことは覚えています。が、何をやっていたか思い出せません。この1年間では技術という以上に、どのように患者様に接していくかという事を身をもって経験させていただきました。卒業前にこのような機会をいただけて、そしてなにより総診に通ってくださった寛大な患者様に今でも感謝の気持ちでいっぱいです。今でも患者様に接するときはあの頃のことを思い出す時があり、歯科医師としての「原点」は総診にあるように思います。

口腔外科に入局したのは、学生時代にあまり勉強できなかったため、卒業して「少し」勉強できれば、と思ったのがきっかけでした。研修医として2年間勤務させていただき、引き続いて4年間大学院で主に口腔がんの転移に関して研究をさせていただきました。出来の悪い大学院生で多方面の先生方にご指導いただき、やっとの思いで1本の論文を書くことができました。この4年間では1本の論文を仕上げるのに必要な努力と忍耐を学び、とても貴重な時間でした。その後も口腔外科では次から次へと学ぶ事が多く、「少し」では済まなくなり、気づけば卒業して10年以上になりました。

2009年4月からは地域保健医療推進部の特任助教として勤務させていただいていますが、臨床では変わらず口腔外科でも勤務させていただいています。地域保健医療推進部は、地域の中で他の医療機関、介護福祉施設や行政などとの連携を推進し患者様が退院後も必要な医療を受けられるよう支援をしていく部署です。歯科ではまだあまり馴染みがなく、ピンとこないかもしれません。口腔外科では全身にかかわる疾患も多く、このような支援が必要となる患者様も多いので、また別の視点で勉強させていただいています。

いつも臨床や研究では驚かされることや、新たな発見、そして反省がいっぱいで「これでいい」と思えることは今までひとつありませんでした。これからはずっとこんな感じで過ぎていくの

かもしれません。これからはほんのわずかずつだと思いますが、前に進んでいければと思います。

＊

歯科侵襲管理学分野・助教

倉 田 行 伸

平成21年7月より歯科侵襲管理学分野（歯科麻酔科）の助教に採用されました倉田行伸（「くらたしげのぶ」と読みます）と申します。歯学部ニュースは初登場です。「素顔拝見」ということですが、まずは堅苦しくない話から。

本当ならば顔写真を掲載するとのことですが、さすがに恥ずかしいのでご勘弁下さい。ただし、もし構内で白衣を着て、ねずみ色の上着とズボン（これは麻酔着です）を着ている背が高くなく太っている人物に遭遇したならば、それが私です。すぐにわかります。

出身は新潟県で、現在も新潟市五十公野（「しばたしいじみの」と読みます。名前も含めて難読漢字ばかりですすみません……）から通勤しています。自家用車ではなく電車通勤です。都会の電車は数分間隔でやってくるので乗り遅れるという感覚はあまりないと思いますが、なにせ田舎の電車です。乗り遅れたら30分、1時間は平気で待たされます。なので、私の生活リズムはJ O東日本によってほぼ支配されています。ただ、学生時代からこんな生活でしたのもう慣れっこですが……

あまり雪の降らないところからいらっしゃった方には、「新潟は雪がいっぱい降るところ」と覚悟を決めてこの大学に入学された人が少なからずいると思います。しかし、昔と比べると本当に雪が少なくなりました（平野部では）。私が小学生のときは家の近くの駐車場には身長ほどの雪が積もり、その隣のアパートの2階から雪に向かって飛び降りて、足が抜けなくなって、ワンワン泣いて、救出されて、怒られて、また泣いて……なんてことをすることができましたが、今そんなことをしたら両足骨折して、病院送りになって……なんてことになるでしょう。今は新潟も「雪国」ではなくなりつつあるのかもしれません（平野部では）。

趣味は競馬です。もう10年以上はハマっています。

す。普段は家に一度入ると出ることがほとんどない、自称「ちょっと明るいひきこもり」ですが、競馬になると東京や千葉にも足を運び、競馬場で叫びまくっています。その姿はとても人には見せられません。北は福島から南は九州の小倉まで競馬場行脚してきましたが、北海道の札幌と函館にはまだ行ってないので、今の目標は北の大地に降り立ち、叫びまくることです。ただ、おいしいものもたくさんそろっているので行ったら太って帰ってくることは確実です。おいしいものをみておさえがきくならばこんな体型になんかなりません。今は仕事が忙しくなってしまった関係で関東圏に行くのも年1回ほどになってしまいましたが、毎年継続しています。

少し仕事の話もしたいと思います。現在の私の主な仕事は「全身麻酔」と「鎮静法」です。「全身麻酔」ってお医者さんがすることじゃないの？「鎮静法」って何？ と思っている学生さんは多いと思います（4年生以降の学生さんは講義を受けていますからそんなこと思いませんよね）。他に歯科麻酔科では、「ペインクリニック」、「歯科心身症外来」、「局所麻酔アレルギーテスト」などを行っております（詳しい話は4年生以降の講義で）。この字面だけ見てもみなさんが想像する歯医者さんの仕事とはかなりかけ離れていると思います。その特殊性ゆえ5年生以降の臨床実習でも他の科より学生さんと合う機会は少ないですが、その中で「こんな仕事もあるんだ」と少しでも興味を持っていただけるように学生さんを指導していきたいと思います（人に何かを教える立場になるとは自分でも想像できませんでした。世の中何が起るかわかりません）。

てなわけで、いろいろと書かせてもらいましたが、私も採用されたばかりの若輩者であります。諸先生方の御指導御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。そして、学生さんもよろしくお願いいたします。

＊



顎顔面放射線学分野・助教

池 真樹子

はじめまして、5月1日付で顎顔面放射線学分野の助教を拝命致しました池真樹子です。

パソコンを眺めたまま、なかなか書き出せない姿を見るに見兼ねて、隣の机で作業中の田中先生が、参考にどうですか、と過去の歯学部ニュースを何冊も出してきて下さいました。さっそく開いてみましたが、読めば読むほど伝統のある広報誌であることがわかり、私の母校にはこのような取り組みがなかったの、とても羨ましい気持ちになりました。と同時に自分の拙い文章が掲載されることを考えたら恐縮してしまい、ますます原稿が進まなくなってしまいました。しかしながら、せっかくの機会ですので、生まれ育った佐渡のことや、学生時代のことなどを少しばかりお話させていただこうと思います。

私は佐渡出身で小・中・高校と島内で育ちました。佐渡といって思い浮かべるのは、トキ、佐渡おけさ、金山、最近ではスクリーンデビューを果たしたコブダイの弁慶といったところでしょうか。現在人口は7万人をきってしまいましたが、面積は東京23区の約1.4倍と言われており、県外出身の方々に説明すると皆さん驚かれます。実際に「野球をすればホームランボールは海にポチャ」というイメージをもった県外の友達もいましたが、意外と大きな島なのです。今でも自然が多く残っており、私も帰省のたびに海へと足を運びます。幼いころは泳いだり釣りをしたりして遊びましたが、今は何もしていなくても、透き通った海と雄大な景色を見ているだけで心が洗われます。他にも、さまざまな文化や歴史を見ることはもちろん、トライアスロン、ロングライドも開催されております。今年はフルマラソンの大会も予定されており、佐渡の活性化も年々力が入ってきているのが感じられます。私も最近は趣味のランニングはお休み中ですが、暖かくなって再開できたら、これ

らの大会参加を目標に、走って行けたらと思っています。(興味をお持ちの方、一緒にいかがですか。)佐渡についてまだまだ紹介したいことはたくさんあるのですが、このまま続けてしまうと観光情報誌の一部と化してしまいますので、これくらいでストップしておきます。

高校卒業後は佐渡を離れ、埼玉の明海大学歯学部に入學しました。学生時代は自分と何でも器用にこなしていく同期とを比較し、色々思い悩んでしまうことが多かった気がします。そんな時に、アインシュタイン博士のエピソードを知りました。博士がある失敗をした時に弟子が、「実験は失敗でしたね」と話しかけたそうです。すると博士はこう答えたと言います。「この方法ではうまくいかないことがわかったのだから、この実験は成功だよ」と。一瞬にして気持ちが楽になったのを覚えています。先生方や同期に恵まれたことはもちろんですが、このエピソードを知ったことで自分の気持ちも変化し充実した学生生活を送ることができました。今でも、研究で思うような結果が得られなかった時など、この言葉をおまじないのように使っています。

卒業後は同大学歯科放射線学分野に入局、大学院時代を過ごしました。そしてこの度、助教で採用される機会に恵まれ、赴任して参りました。所属が放射線学分野だけに、「この分野に進もうと思ったのは学生時代にアインシュタイン博士のエピソードに出会いビビッときたからです」とかっこよく言いたいところですが……、残念ながらこのエピソードの博士が、アインシュタイン博士であることを知ったのは、つい最近なのです。けれども、このことを知って、偉大な博士に恋焦がれる気持ちが強くなったのは事実です。

さて、いろいろお話させていただきましたが、5月から勤務するようになり半年以上が経過しました。諸先生方に追いつこうと、必死に走っておりますが一向に距離が縮まらないのが現状です。まだまだ駆け出し者ですが、学生教育に関わる者として責任を感じ、また自分自身も医学教育を受ける者として努めていきたいと考えております。

最後に日々親切に指導してくださる先生方には非常に感謝しております。今後ともよろしくお願い致します。



摂食・嚥下リハビリテーション学分野・准教授

堀 一 浩

新潟大学の皆様、はじめまして。昨年8月に大阪大学より、摂食・嚥下リハビリテーション学分野に赴任して参りました。出身は滋賀県で、大学に入ってから大阪に住んでおりました。関西から出てきたのは初めてです。僕にとって新潟といえば雪国のイメージがあり、新潟に来る際にこちらの先生からは「大丈夫、市内はほとんど雪つもらないから」と言われてそんなものなのかなと思っていたのですが、年末には“24年ぶり”の大雪に見舞われてえらい目に会いました。あのまま春まで町が雪に閉ざされてしまったら荷物をたたんで大阪に帰ってしまおうと本気で考えたのですが、今のところすっかり雪はとけてなんとか暮らしていけそうな気がしています。

家族(妻、3歳の息子、1歳の娘)はまだ大阪に住んでいます。久々の独身生活です。自分の生活力のなさに改めて愕然としました。洗濯機って蓋閉めないと動かないんだっけ? 排水溝つながないとだめだったのね!? (官舎の皆様ご迷惑をおかけしましたっ!)。早く新潟に来てもらって一緒に住みたいと考えているのですが、官舎のすきま風と海からの暴風にちょっと呼び寄せるのをためらったりしています。こんなに春を待ちわびる生活を送るとは思っていませんでした。

35年間ずっと関西に住んでいたものですから、すぐには関西弁がぬけそうにありません。患者様と話をしていてもこちらの話が通じないのは僕のアクセントが悪いせいでしょうか? それとも患者様の耳が遠いせいでしょうか? 関西は恐ろしいところで、誰かがボケると絶対つつこまなくちゃいけないという条例があります。また、別のところに引っ越してしばらくして帰ったときに、ちょっとでもアクセントが変わっていようものなら「おまえも変わったな」と冷たく突き放されちゃいます。加齢歯科の診療室で、関西弁で問診して

いるやつがいたらきっと僕です。よろしくお願いいたします。

大阪大学では補綴学教室に所属しており、主に顎顔面補綴治療を担当しておりました。高齢化に伴って、口腔腫瘍に罹患する患者様は増加していますが、手術術式の向上などにより、その治療成績は向上しています。それだけに、手術術後にQOLの改善を図ることがさらに重要になっています。そのためには、外科的な再建手術と、補綴治療、機能的リハビリテーションを効果的に組み合わせることが必要です。口腔外科の先生や補綴科の先生とは色んな場面で関わらせていただきたいと思います。

研究面では、咀嚼・嚥下時における舌と硬口蓋との接触様相を、舌圧を測定することで分析してきました。もともとは舌腫瘍などで舌運動障害を抱える患者様の機能評価に使えればいいなあと

思って始めた研究なのですが、ヒトの摂食機能を定量的に評価することにも使えることがわかり、ちょうど摂食・嚥下機能障害が注目し始められたこともあり、対象を健常若年者だけではなく高齢者や有病者にも広げながら研究を進めていくことができました。幸い、摂食・嚥下リハビリテーション学分野では、機能評価のための様々な装置を持っています。今後も、ヒトを対象として、摂食・嚥下機能を評価する研究を進めていきたいと考えています。

井上先生を始めとして、摂食・嚥下リハビリテーション学分野のスタッフの皆様には、温かく迎えていただいて、徐々にこちらでの仕事にも慣れはじめてきました。学部の皆様とも一緒に仕事をさせていただく機会が増えると思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



歯科衛生士の現状と課題

診療支援部歯科衛生部門 後 藤 早 苗
医歯学総合病院・歯科衛生士



1. はじめに

みなさんこんにちは。診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士の後藤と申します。

平成13年4月に歯科衛生士として採用され、口腔外科外来、義歯・冠ブリッジ診療室での勤務を経て、現在は顎関節治療部・画像診断診療室・インプラント治療部（3科併設）外来に配属されています。

歯科衛生士業務はもちろんのこと外来管理及び受付業務もおこなっており、やらなければいけないことは多く、3科ということもあり大変ですが、自分がやるべき仕事をひとつひとつ確実に積み上げながらやっていこうと心がけています。

2. 歯科衛生士の現状

さて、歯科衛生部門には私を含め15名の歯科衛生士がおり、予防歯科3名、矯正歯科3名、歯診・歯周病診療室2名、義歯・冠ブリッジ診療室2名、顎関節治療部・画像診断診療室・インプラント治療部2名、小児歯科1名、口腔外科外来1名、総合リハビリテーションセンターの摂食嚥下リハビリ室に1名が配属され、各診療科の専門をふまえた歯科予防処置、歯科診療補助、歯科保健指導をおこなっています。

平成18年4月に歯科外来システムの再編がスタートし、看護師の人員が（看護職でなくてよい業務内容の多さによる他職種への転換計画から）削減され、歯科衛生士に置き換えられ、歯科衛生士は増員がはかられています。歯科医療において歯科保健の提供が不可欠になったことで歯科衛生士へのニーズが高まっており、その期待に応えるためにも私たち歯科衛生士はその専門知識と技術

の向上に努めていかなければなりません。

歯科予防処置と歯科保健指導は歯科衛生士業務の根幹となるもので、各診療科で歯科医師と連携をとりながらできるだけ多くの患者様に実施しています。歯科保健指導では正しい生活習慣や歯磨き指導を中心とした口腔清掃法の指導、セルフケアを実施するための指導に加え、摂食嚥下機能訓練も新たな保健指導の分野として歯科衛生士がおこなえるようになり注目されています。超高齢化社会や、また疾患による後遺症への対応として「口腔機能の維持・管理」をおこなうことは「食べる」ことや「話をする」「表情をつくる」とことといった人が豊かな生活を送る上での大切な役割です。ここ数年で口腔ケアの必要性は急速に普及し、さかんに用いられるようになってきましたが、歯科医師、歯科衛生士が行う「専門的口腔ケア」の有効性についてもっと知ってもらう必要があると思っています。高度な口腔の知識と技術を十分に活用し、個々のニーズに適した「専門的口腔ケア」を行うことにより、患者様のQOLの向上にさらに努めることができ、ケアからキュアまで見通せるのではないのでしょうか。そこで、他職種と連携をとりながら歯科衛生士という仕事をもっと多くの方に知ってもらい、活用してもらいたいと思います。

3. 外来業務

歯科外来では看護師と共同のもと、互いの専門性を生かし患者様が歯科医療を安心して安全に受けられるよう努めています。大切なことは患者様が安心して歯科医療を受けられることであり、そのために患者様と歯科医師・患者様とスタッフ・歯科医師とスタッフのコミュニケーションに配慮し信頼関係を築き、外来環境を整え、診療を円滑

におこなうために歯科医師のサポート役として効率的な診療補助をおこなうことを心がけています。

患者様との会話から得られるものはとても多く、問診だけではわからなかった生活背景を会話から知ることよくあり、診察や保健指導をおこなううえでの重要な情報となります。診察に関係ないちょっとしたことでも「気がついてくれたの」「覚えていてくれたの」とうれしそうに言って下さる患者様の顔を見るとこちらもうれしくなってしまいます。

険しい顔で、また不安そうな表情で診察を待っている患者様に声をかけたあと、少し穏やかな表情になっているとよかったと思います。そして、患者様や先生、スタッフから「ありがとう」と言われると、もっと頑張ろうと単純に思っています。

私たち診療に関わる者たちも気持ちよく働け、そして、よりよい歯科医療を提供できる環境作りをおこなっていきたいと思います。

4. レベルアップと今後の課題

大学病院という恵まれた環境と設備、最先端の医療と情報が得られる場で、私たち歯科衛生士は常に学び質の高い医療提供に努めなければいけません。歯科専門学会や日本歯科衛生士会が認定する認定歯科衛生士（特定する専門分野において高度な業務実践の知識・技術を有すると認められた歯科衛生士）制度の取得について、積極的におこなっていく必要があるでしょう。現在歯科衛生士室では、日本歯周病学会認定歯科衛生士（5年毎の更新性資格）が3名、日本歯科審美学会認定のホワイトニングコーディネーターが4名います。それ以外にも各自が講習会や研修会に参加し目標を持って自己研鑽に努めています。

その一方で、新人歯科衛生士の育成が重要な課題としてあげられます。今までは臨床経験が浅い

者に対して歯科衛生士室として組織だった内部での教育はおこなわれておらず、「配属された外来で経験を積み、必要があれば指導を受け、必要と思われる講習に自主的に参加するように」というなんとも心細いものでした。新人が配属される外来や個人の判断によって技術習得や技量に差がでることは望ましくなく、決められた期間にある一定程度のレベルまでの習得が行われるようサポートし、また、組織の一員として、他職種との関わり方なども理解していけるよう、新人教育システムの構築について検討していかなければいけないと考えています。新人教育を通して、ベテランの歯科衛生士がさらに再認識するという効果も望めるでしょう。誰がどこにいてもほぼ同じレベルの技術を提供できるよう取り組んでいきたいと思っています。

私たち歯科衛生士に求められているもの、やらなければいけないことを考え実践し、「歯科衛生士に担当してもらってよかった」と言ってもらえることを目標に、「この病院に来てよかった」と患者様に思ってもらえるようさらに知識と技術のレベルアップをはかり、互いにコミュニケーションをとりあい、チームワークを大切に歯科衛生士として患者様に、また病院や地域に貢献できるよう頑張っていきたいと思っています。

5. 最後に

私事ですが、大学病院に勤めて早9年が過ぎようとしています。多くの先生方、先輩歯科衛生士、看護師、同僚に支えられてやってこられたと思っています。特に、故・西川幸枝歯科衛生士からは本当に多くのものを学び、尊敬し目標でもありました。この場をお借りして感謝申しあげます。

これからも患者様のために、また周囲のみなさまの期待に添えるよう頑張っていきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

FDI 2009 Annual World Dental Congress に参加して

大学院生
(う蝕学分野) 浅井 哲也

2009年9月2～5日までの期間シンガポールで開催されたFDI 2009 Annual World Dental Congressに参加いたしましたので、ご報告いたします。

まず始めに、今回の第一目的であるシンガポールで開催された学会の話から行っていきます。

学会は、SUNTEC International Conventional & Exhibition Center (Fig. 1、2)で行われました。4日間の学会開催期間中、私のポスター発表は2日間あり「Effect of glazing on the fracture strength of

dental CAD/CAM ceramic materials」というタイトルで発表させていただきました (Fig. 3、4)。研究の内容を簡単にご説明しますと、CAD/CAM (Computer Aided Design/Computer Aided Manufacturing) で使用されるセラミックス材料の表面処理 (研磨およびグレージング) を行った場合の破折強度を、実際の臨床を想定したレジンセメントによる人歯接着条件下にて比較検討した研究です。海外発表は3回目でしたが発表前は緊張しました。当然、海外のドクターからの質問や研究ディ



Fig. 1



Fig. 2



Fig. 3

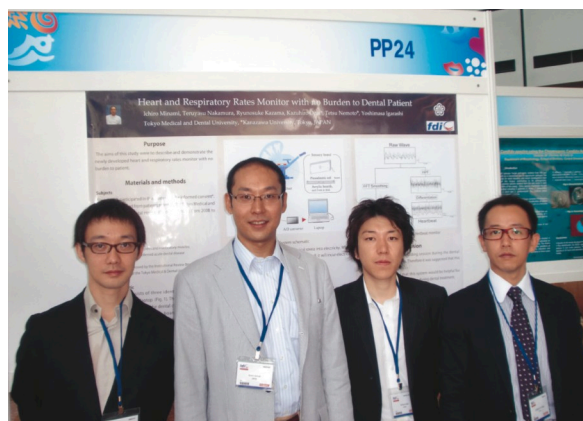


Fig. 4

スカッションは英語を通して行われます。色々と質問等ありましたが、自分の英語が通じていたかは疑問で、英語の出来なさをあらためて痛感しました。

また、学会では様々な興味深い公演、ポスター発表がありました。その中でも特にオールセラミック修復全般の公演をされた Dr. Fradeani Mauro、ISCD (International Society Computerized Dentistry) Symposiumで公演されたDr. Wiedhahn、Dr. Reiss は私が大学院の研究および臨床でおこなっているCAD/CAM システム (CEREC) の内容でしたので、とても興味深いものでした。CEREC とは、窩洞形成および支台歯形成後、チェアーサイドで専用のカメラを用い光学印象採得を行い、その情報をもとにコンピュータ画面上で設計したセラミック修復物をすみやかに製作するシステムです。

Dr. Wiedhahn の公演では、今後導入される CEREC の新しい材料や CEREC と CT がコラボレーションすることで、CEREC から歯列情報を、CT から骨の情報を得ることでインプラント治療にも今後、大きく役立つものとなると話がありました。

Dr. Reiss の公演では、CEREC の長期症例を含めた様々なケースを見させて頂き、臨床での新たなポイント等を知ることが出来ました。

Dr. Fradeani Mauro の公演では、オールセラミック修復治療における診断、形成および修復物に対する咬合をセラミックの材料の性質とともに全顎症例ケースを用いてお話がありました。

その他にも今後の研究や臨床に役立つ情報を得ることが出来有意義なものでした。

学会の話はこのあたりで終わりにいたしまして、シンガポール観光等の話をしていきたいと思います。

シンガポールといえばマーライオンとF1が開催される国として有名だと思いますが、このマーライオンが「世界3大がっかり」に含まれていることを皆さんはご存知でしたか？ (その他2つはコペンハーゲンの人魚像、ブリュッセルの小便小僧)

日本を出発する前に「世界3大がっかり」に含まれていることを知っていた私はマーライオンにそこまでの期待はせず、きれいな町並、ローカルフード (Tiger Beer 等)、学会での資料収集に期待し、シンガポールに向かいました。

2日目の学会後、一緒に行った東京医科歯科大学の先生方とシンガポールの町を色々探索していたところ偶然マーライオンを見つけました。

その時、「がっかり」ではなく、「すげー」と思った私がいました。大きさも思った以上に大きく、ビックリしたので写真撮りました (Fig. 5)。→皆さんも、シンガポールに行かれた際には観光に行ってもよいかもしれません。

また食事面では、ホーカーズ (路上屋台) で食べられるローカルフード (チキンライスなど) やアラブストリート、チャイナタウンの各地域の料理も食べることが出来ます。(Fig. 6, 7)。お酒は特にシンガポールで作られたカクテル (シンガポールスリング) やビール (Tiger Beer) がお勧めです。→シンガポールスリングはかなり甘いカクテルでした。

シンガポールの町は月末にF1が開催されることもあってか、道路には観客席が作られ、テレビのニュースなど色々なところでF1開催モードになっていました。ホテルにもペットボトルで作られたF1が飾られていました (Fig. 8)。→学会の日程とF1開催日がかぶっていたらラッキーだったのですが……。



Fig. 5

いろいろな経験をしたシンガポール滞在 4 日間は、あっという間でした。海外の学会は参加するたび、色々な面で刺激を受けます。その刺激を今後の研究や臨床にいかして行きたいと思います。

最後になりましたが、海外での貴重な学会発表をさせて頂きました興地教授、ご指導頂きました福島教授および東京医科歯科大学 風間先生、快く送りだして下さったう蝕学の先生方この場をお借りして感謝申し上げます。



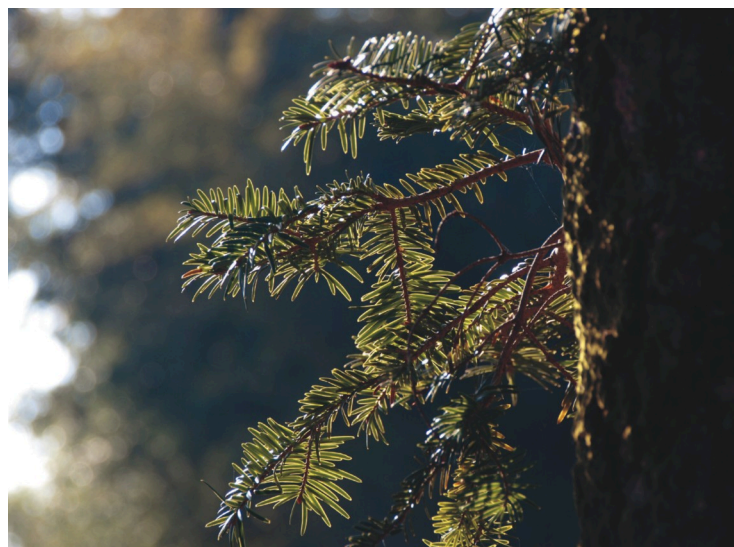
Fig. 7



Fig. 6



Fig. 8



学 会 報 告

平成21年度新潟歯学会 第2回例会報告

新潟歯学会集会幹事 富 塚 健
医歯学系・生体歯科補綴学分野

平成21年度の第2回例会が11月21日(土)、総会、第1回例会同様に歯学部講堂において開催されました。総演題数は17で例年より少ないようでしたが、今年度は第1回例会での演題数が比較的多かったことによるかもしれません。しかし、各演題とも活発な討議がなされ、また学外の先生方の発表も多く、会員諸氏にとって極めて有意義な会であったと思います。

オンライン登録や液晶プロジェクターによる発表も定着してきたようですが、簡便化されたがゆえに当日あるいは直前になって安易に発表ファイルの変更をされる先生が増えてきているようにつながられます。学内学会という安心感はあってよ

いとは思いますが、今後円滑な会の運営に支障をきたしかねないと思いますので各会員が留意していただけるとよいかと思います。

なお、ここで座長、演者他諸先生方のご協力をいただき、今年度の総会および2回の例会が何とか無事に終了できましたことを改めて厚く御礼申し上げます。

平成22年度以降も多数の演題が登録され、盛会となることをお祈りいたします。

新潟歯学会 H.P.

<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>



同窓会だより

2009年度第1回歯学部教授会 同窓会定期協議会議事要旨

渉外理事 飯田 明彦

日 時 2009年8月3日(月)午後7時～9時15分

場 所 新潟市中央区古町通7番町「力弥」

出席者 大 学：前田学部長、齊藤副病院長

同窓会：多和田会長、佐藤副会長、野村

副会長、福島副会長、鈴木(一)

副会長、鈴木(政)副会長、成

田専務理事、飯田渉外担当理事

報告

①歯学部から

前田学部長から配布資料に基づいて報告が行われた。

1. 歯学部の近況について

(1) 人事について

分化再生学担当 里方一郎教授辞任

口腔生理学分野 山村健介教授就任

(20期生)

歯科総合診療部 藤井規孝教授就任

(23期生)

超域研究機構 網塚憲生教授

北大に転出(18期生)

摂食嚥下リハ 堀准教授就任(阪大から)

口腔生理学分野 北川准教授就任予定

(10月＝日大から)

(2) 予算について

概算要求、補正予算、大学院教育改革プログラム、学長裁量経費など好調である

(3) 科学研究費採択状況

医歯学系全体の中でもトップクラスの採択率である

(4) 国家試験合格状況

歯科医師、歯科衛生士、社会福祉士ともに高い合格率であった

(5) 施設整備

大型改修要求中

2. その他

全国の歯学部入学定員削減が実施予定である
平成20年度概算要求事項＝大学間連携研究、
口腔保健に対応した国際イニシアチブ人材育成プログラム

②病院から

齊藤副病院長から以下の報告があった。

1. 新診療棟について

(1) 中央診療棟(検査、手術関係)

9月の連休を利用し移設される。その期間手術数が制限される。

(2) 外来棟

平成24年度の完成を目標にゾーニングを行っている。面積は現在の約半分に減少する。ユニット数も減るために、ゾーンごとの柔軟な運用が求められる。

2. 研修医について

現時点で学内41名、学外78名の応募がある。

3. 患者様自己負担額の未収金対策について

急患を中心に、自己負担金の未払いが多額に





なっている対策として、夜間急患から保険証がある場合5,000円、ない場合10,000円を預かることとなった。

4. コーンビーム CT (CBCT) について

CBCT が導入された。インプラント症例などで学外の先生方にも使用していただきたい。予約システムなどを構築中である。

③同窓会から

1. 女性会員支援部の新設について

育児面などで困っている会員の支援を行う。アンケート調査中。

2. クラス代議員会議について

1～39期生の全代議員が集合した。メーリングリストの拡充、クラス会の開催などについて意見交換を行った。

3. 新潟大学および明倫短期大学の志願者増への対応について

開業医を通じて志願者増に対する働きかけを行っている

4. 創立60周年記念事業・ホームカミングデーについて

10月18日に施行予定である

当日は、梅雨明けも発表されず涼しささえ感じる夏の日であったが、協議会には鈴木（政）新副会長も加わり例年以上に熱い議論が交わされた。

第56回全国歯科大学同窓会・校友会懇話会に出席して

副会長 福 島 正 義

平成21年11月14日(土)に北九州市小倉のリーガロイヤルホテル小倉にて第56回全国歯科大学同窓会・校友会懇話会（以下全歯懇）が当番校九州歯科大学同窓会の主催で開催された。全国29歯科大学・歯学部の28同窓会の役員と来賓110名が参加し、新潟大学歯学部同窓会からは多和田孝雄会長、

成田 秀専務理事と私の3名が出席した。懇話会では九州歯科大学同窓会長の松延彰友氏の歓迎挨拶に続き、来賓の日本歯科医師会副会長近藤勝洪氏、福岡県歯科医師会副会長永田正典氏、参議院議員石井みどり氏、公立大学法人九州歯科大学理事長福田仁一氏および九州歯科大学附属病院長鱒見進一氏の紹介があり、来賓から挨拶が行われた。引き続き6名のパネラーによるシンポジウム「健康管理者としての歯科医師（現行制度のなかでどう国民の歯科医療を守るか）」が行われた。

シンポジウム座長：松延彰友氏

（九州歯科大学同窓会長）

高齢社会において食べることを支援するために益々重要となる歯科医療の将来についてこれまでの歯科界の反省を行うとともに保険医療制度の改革をめざした提言を行うために本シンポジウムを企画した。

パネラー：

1、河原英雄氏（大分県佐伯市開業、九歯大15期）

「潜在患者様の顕在化について」

国家試験合格率の低下は国民からの要求ではなく、歯科医師増加に歯止めをするために歯科界からの要請によるものである。8020運動ではなく8028Dをめざすべきである。咀嚼能率を血圧や血糖値のように数値化し、咬むことの効果を科学的データとして国民にわかりやすく示すべきである。国民に満足いただける歯科医療を提供しなければ今後の歯科医療の好転はない。

2、上野道生氏（福岡県北九州市開業、九歯大24期）

「私たち（歯科界）が犯した大きな誤り（チーム医療からみえてきたこと）」

患者様中心のチーム医療を実施するには有能な歯科衛生士と歯科技工士無しでは考えられない。にもかかわらず歯科衛生士養成校の定員割れや20代の歯科技工士の高い離職率は深刻であり、この責任は歯科医師にあること





を反省すべきである。

3、中野稔也氏（福岡県北九州市開業、九歯大46期）

「保険中心の診療の中での私の取り組み」

保険治療中心に行っているが持ち出しが多く、開業5年目を迎えても経営は苦しい。しかし、歯内療法や歯周治療のような基本治療をきちんと行うことで患者様の信頼が得られ、患者数が増加し、少しずつ自費診療も加わり、医院経営は少しずつ安定して来た。

4、下川公一氏（福岡県北九州市開業、九歯大16期）

「歯科医療昏迷の原因と問題点」

行政のトップは歯科を知らないし、興味もない。日本歯科医学会は長期臨床データ（とくに Endo, Perio）を示さず、臨床に役立つ論文が少ない。日本歯科医師会は情報開示ができない環境がある。護送船団方式ではだめであり、政治献金や政治家頼みはもう通用しない。一般開業医は再発や医原性疾患によ

り再治療を繰り返すような医療を続けるべきでない。

5、石井みどり氏（参議院議員、鶴見大1期）
「日本の歯科医療政策上の課題」

新政権による医療政策の細部にわたるイメージがつかめない。高齢者の歯科医療のニーズと補綴処置の評価を高めるべきである。

6、近藤勝洪氏（日本歯科医師会副会長、日本歯科大）

5名のパネラーへのコメントが述べられた。

協議題では次次期（第58回平成23年度）当番校の選出が行われ、東京歯科大学同窓会に決定した。また、第55回全歯懇担当校の北海道大学歯学部同窓会から研修医裁判に関して最高裁で罰金6万円の実刑判決が7/23に下された旨の報告があり、これまでの支援に対して感謝の辞が述べられた。また、当番校から全歯懇開催経費に当番校の負担が大きいため参加費の他に1校あたりの分担金の検討をしてほしいとの提案があり、意見交換が行われ今後検討することになった。

懇話会後の懇親会では総勢136名が参加した。和太鼓、バナナのたたき売り、ジャズ演奏などのアトラクションや幻の焼酎の提供などがあり、伝統校として統率のとれたきめの細やかなもてなしを受け、他校と親交を深めることができた。

次の第57回全歯懇は2010年9月18日（土）に北海道医療大学歯学部同窓会の当番で札幌にて開催される予定である。



平成21年度新設国立大学歯学部 同窓会連絡協議会報告

専務理事 成 田 秀

日 時：平成21年11月15日（日） 午前9時～12時
会 場：福岡市博多グリーンホテル2号館
当番校：九州大学歯学部同窓会

全歯懇開催の翌日に、平成21年度新設国立大学





歯学部同窓会連絡協議会（国歯協）が全10校（北海道大、東北大、新潟大、大阪大、岡山大、広島大、徳島大、九州大、長崎大、鹿児島大）の同窓会の参加のもと、開催されました。新潟大学歯学部同窓会からは、多和田会長、福島副会長と私の3名が参加しましたのでその会議の様子をご報告します。

会次第

1. 開会の辞

九州大学歯学部同窓会 副会長 原野 啓二

2. 当番校会長挨拶

九州大学歯学部同窓会 会長 石井 潔

3. 出席者紹介

4. 講演

演題：「医科歯科統合後の九州大学病院—国立大学病院における歯科の課題を探る—」

講師：九州大学病院副院長 口腔総合診療部 樋口 勝規教授

講演要旨

九州大学で医科歯科統合した歯科のメリットとしては、1)有病者の対応・相談が迅速、2)術後管理（ICU、救急治療部の利用）でリスクの高い患者様の治療範囲が拡大、3)救急外傷管理、医科との共同手術、4)小児・発育部門（小児科・小児外科・小児歯科・矯正歯科）は一つのエリアで診療、5)ハリーコールシステム（緊急呼び出し）の充実、が挙げられる。一方医科のメリットとしては、1)口腔ケア（嚥下性肺炎の予防：周術期管理、高齢入院患者様、ICU・CCUにおけるスパゲッティー症候群の口腔ケア）、2)入院患者様や有病者の歯科治療・口腔管理、3)全麻挿管前の動揺歯処置、等がある。更に両科共通のメリットとしては、1)医科的疾患に関わる口腔病変の治療（系統的疾患の共同治療・研究、歯周病と医科、抗凝固剤服用患者様の歯科治療・口腔外科手術、ビスフォスフォネート服用患者様の口腔管理）、2)共同手術（脳外科・耳鼻科）、3)先進予防医療センター（人間ドック）との係りとして歯科人間ドックがある。

また、事務部門・看護部門の助けを十分に活用できるメリットもある。

ところで、小泉内閣の医療費増加抑制・医師数削減政策により医師の過重労働・医療提供の不足・医師不足が生じ、医師臨床研修制度がそれに拍車をかけた。その対策として、医科大学・医学部の入学定員の増加、医師臨床研修制度の見直しがなされている。一方歯科については、厚生労働省は国民医療費に占める歯科医療費の割合は年々減少しているのに対して歯科医師数は年々増加しており需要と供給の観点から歯科医師過剰とみなし、文部科学省も歯科大学・歯学部の入学定員削減、歯科医師国家試験の合格基準の引き上げで、歯科医師の削減対策に努めてきたが、近年は歯科および歯科医師の社会的・経済的地位の低下が見られるようになってきた。

大学の独立行政法人化に伴い、九州大学病院においても大学病院の元来の目的の教育・研究・臨床に加え、経済的安定（経営能力）が求められてきた。その結果として大学病院では、収入重視の対策が採られ、つまり外来より入院で収入増を、入院も急性期型へ注力し、高度先進医療を多く取り入れて助成金獲得を、看護体制も7：1看護で診療報酬の増額を図ってきた。しかし、大学病院の歯科は、医科に比べ収入単価が低く、外来中心の診療で、コ・スタッフも歯科衛生士中心で収入の貢献度が低い等の特性があり、病院の中でお荷物視されてきている。そこで、歯科では経営改善策として外来患者様の増加を、歯並び無料相談・公開歯科講座（歯科診療セミナー）・歯科人間ドック・病診連携・院内医科歯科連携等で努力し、入院患者様数増加対策として、病床稼働率の増加・在院日数を減らすため、外来麻酔治療室（静脈内鎮静、全身麻酔）の有効利用を進めてきた。また、地域医療連携にも力を入れ、2次・3次医療機関として連携施設からの紹介を受け入れている。そして診療単価増加のため先進医療を推進し、自費診療率の増加を図る再生歯科やインプラン





ト治療にも力を入れてきた。更に、使用材料や器具を絞り込み経営改善へ努力してきた。

このように、近年大学病院は経営効率が重視される傾向があるが、重要な事は教育機関であるということある。臨床歯学教育は、外来中心でデンタルチェアが基本(設備が高額)、技術の修練に反復練習が必要、man to man 教育が基本という特徴がある。そして、臨床研修制度前は、研修医は直接各医局に入局して戦力となり教育にも関与できたが、研修制度開始後は、研修医はあくまで学習者で戦力には出来ず、共用試験(CBT、OSCE)や臨床研修を実施するための体制整備や労力は膨大でマンパワーが少ない歯学部では負担が増大して来ている。また、今国民が歯科医師に求めているのは、単に歯科治療技術者としてだけではなく、医療人としての十分な人格・素養を持つ人間である。そのような時代の変化に対応すべく歯学教育も、「詰め込み授業」から「考える授業(問題解決中心型学習)」へ、臨床の比重を重くした教育へ、態度領域(患者様とのコミュニケーション構築)の教育へと変化してきており、臨床研修も患者様中心の歯科医療に重点が置かれてきている。

今後の歯科教育は、真の profession としてどのような歯科医師を目指すか、そのために大まかなキャリアパスを描けるようにする事が大切である。今は定員削減ばかり議論されているが、変化していく疾病構造・社会構造への対応を教育に組み込むために、「歯学教育をどう変革していくか」を議論していく事が重要である。

5. 報告

新潟大学同窓会より、新潟大学歯学部で来年度から口腔生命福祉学科の大学院後期博士課程が認められた事が報告された。

6. 協議

協議題

1) 九州歯科大のオブザーバーの件とその関連に関する事

九州歯科大については今回の国歯協にオブザーバー参加を希望していたが、次年度につ

いては参加希望の連絡が届いていないので、申請があればオブザーバー参加を認める。

東京医科歯科大については、参加全校に意見を求めたところ、特に反対意見が無いので次年度より、東京医科歯科大より参加申請があれば会員として受け入れる事が決まった。それにより、現名称から新設の文字を除き、国立大学歯学部同窓会連絡協議会(国歯協)と変更する事になった。また、新潟大多和田会長から、広島大学同窓会との求人求職支援事業の情報交換の提携について両校で検討することになったとの報告があり、各大学でも求人求職支援事業を立ち上げて全参加校間で情報交換をしたらどうかとの提案があり、まずは全校間のメーリングリストを作り、情報交換を図ることとなった。

2) 新卒および若い会員の同窓会入会率(組織率)について

3) 入会へのアプローチの方法および会員の所在把握方法について

協議題2)、3)は関連が強いので一括協議した。各大学とも若い会員の組織率・会費納入率の低下に苦慮している。対策として、各大学とも学生の中から同窓会との接点を持つよう事業を企画。学生への同窓会説明会(北大・東北大・新大・岡大・徳大・鹿大)、学生への各種優遇策(北大・東北大・新大・岡大・広大・徳大・鹿大)。また会費納入率向上対策としては、会費前納制(新大・徳大)、会費口座引き落とし(新大・広大・鹿大)、若い会員支援策として求人求職支援(新大・広大)など。ユニークな取り組みとしては阪大の合同クラス会開催(卒業後1~5年の若いクラスの合同クラス会を開催し、若い会員の縦の絆を深める)や、鹿大の歯学部サークルに対し活動費を支給し、各サークルの代表者と同窓会役員の懇親会の開催(サークルの学生は先輩後輩の縦の繋がりを苦とせず将来の同窓会活動のキーマンとして有望)があった。

会員所在把握法としては、住所変更時に会





員から連絡（北大・新大・徳大・九大・長大・鹿大）、卒業時に調査（北大・東北大・新大・広大・徳大）、クラス等代表者による調査（新大・阪大・岡大・広大・徳大・九大・長大・鹿大）、不明者リストによる会員からの報告（新大・岡大・九大）、支部からの情報提供（北大・新大・岡大・広大・九大）など。

4) 大学院入学者の減少問題について

各大学とも、臨床研修医が必修化された平成18年の大学院入学者は減少したが、その後回復傾向である。但し社会人大学院生、他学部出身者、外国からの留学生が増加している。

5) 次期・次々期当番校について

次 期：北海道大学

平成22年9月19日(日)開催

次々期：広島大学

6) その他

7. 時期当番校会長挨拶

北海道大学歯学部同窓会 会長 村井 清彦

8. 閉会の辞

九州大学歯学部同窓会 副会長 西原 正治

活動の一環として、卒業生への進路アドバイス、同窓会活動についての説明を目的とした親睦会です。一昨年度から口腔生命福祉学科4年生も交流会へ参加しており、本年度は理事側からも同窓生として口腔生命福祉学科の卒業生が参加いたしました。

会においては、鈴木（一）副会長の司会進行により始まり、多和田会長よりのご挨拶において、卒業してからの会員同士を結びつける同窓会の役目、会員であることのメリットなどからは是非、会員として同窓会を利用して欲しいとのお話がありました。後援会長の有松先生より学生への激励、つづいて成田専務理事より、現在2,195名の会員を持つ新潟大学歯学部同窓会の事業・活動内容全体（新たに設立された女性会員支援、歯科医院継承支援等の具体的内容含め）についての説明がありました。乾杯にあたっては、鈴木（政）副会長より、これから歯科医療に携わるにあたり、困難などもあるでしょうが一人で悩まず同窓会等のつながりを活用しましょう。皆さんが一人前になったら今度は後輩に協力してあげて欲しいといったお

歯学科6年生、口腔生命福祉学科4年生と歯学部同窓会との交流会

27期 渉外担当理事 多部田 康 一

10月16日(金)に「歯学科6年生、口腔生命福祉学科4年生と歯学部同窓会との交流会」が歯学部大会議室で開催されました。例年行われる同窓会





話がありました。今回も予定した時間を延長し、大変盛り上がりました。最後に佐藤副会長より同窓生としての絆を大事にして欲しいという言葉とともに会は終了しました。

このような会が卒業前の学生にとって少しでも役に立てば何よりですし、会をとおして同窓会の活動についての理解が得られ、卒業生には今後同窓会の一員として協力（お互いに協力）をいただけたらと考えられます。

BRONJ セミナーに参加して

20期生 歯科総合診療部 中 島 貴 子

現在ホットな話題のビスフォスフォネート関連顎骨壊死（BRONJ）について、6名の先生から講演を聴講した。コーディネーターの高木先生が演者の先生方に割り振られた課題が実にバランス良く、また各演者の先生方がそれに的確に答えた講演をしてくださったおかげで、単に「明日の臨床に役立つ」知識を得るのではなく、BRONJというものを通して「科学的エビデンスに基づく歯科医学、歯科医療」を考えることのできる有意義なセミナーであった。3時間という時間を長く感じないセミナー・シンポジウムに出会ったのは久しぶりかもしれない。

網塚先生からは、骨代謝回転が活発な部位にビスフォスフォネート（BP）が集積すること、破骨細胞活性が抑制されるメカニズムは細胞内のメバロン酸代謝カスケード阻害による細胞骨格障害であることなどが示された。さらに BP は免疫細胞のマクロファージを抑制するという研究結果からなぜ顎骨でのみ BRONJ という現象がおきるのかについて感染免疫の抑制という仮説も披露いただき興味深かった。朔先生からは多くの BRONJ 臨床病理画像が提示され、そこからわかること、さらに推論が披露された。BRONJ の腐骨部骨梁辺縁は特徴的な波状不整形を呈しそこ

に数珠状に細菌の沈着が認められることから骨吸収がデンタルカリエスのように細菌によるという個性的な推論も披露され、それに異を唱える網塚先生と活発な議論が交わされた。今後の in vivo、in vitro での機能実験の結果が現れるのが楽しみである。

臨床家にとっては遠藤先生、林先生、山崎先生、高木先生からの講演に患者様に相對するにあたっての多くの指針やヒントが見いだせた。抗凝固薬もそうであるように、BP 剤もそれほど必要性は高くないけれどとりあえず処方しておく程度の医師が多いのでは？ だから抜歯が必要というと簡単に「では休薬してください」というのではないか？ という疑問を少なからず抱いていた。しかし、遠藤先生の講演で高齢人口の増加をはるかに上回るペースでの大腿骨頸部骨折率の増加やその後の ADL、QOL、さらには死亡率の増加が示され、BP 剤の必要性をよく理解できた。林先生からは率直に BRONJ 特有の画像の特徴はなく、慢性硬化性骨髓炎の所見である、その点から BRONJ ではなく BROMJ（M は myelitis 骨髓炎）と呼びたいという提言があり、納得した。山崎先生からはエビデンスレベルの高い臨床研究はほとんどないこと、抜歯や手術を避けなければならないときの代替療法としての経口および局所抗菌歯周治療法が示された。高木先生からは予防と管理の目標設定としてアメリカ口腔外科学会の提言や、それを踏まえての先生自身のケースレポートが示された。ケースレポートレベルからは発症予測は難しく、患者様との間で十分なインフォームドコンセントが得られることが重要であると認識した。たとえ BP 非服用のケースに比べてリスクは高くても、原因歯がもたらししている現状が抜歯やむを得ずということであれば、理解を得た上で処置するしかないということである。がん治療において5年生存率が80%の治療法であっても患者様個人にとっては残りの20%に入ってしまう確率が0でない以上、不安は払拭されないと同様、すべての治療には100%安全、正解はない。現在わかっているエビデンスレベルを理解した上





で、患者様に説明を尽くしていくべきだろう。

また、上記のような講演内容の素晴らしさに加えて、遠方からも多くの先生方が参加されており、その勉強熱心な姿に励まされた。

最後にコーディネーターの高木先生をはじめ演者の先生方、そして企画準備をしてくださった同窓会学術担当のメンバーの先生方（奇妙な方々ばかりと評判です）に感謝申し上げます。



新潟大学創立60周年記念事業 平成21年度新潟大学歯学部 同窓会セミナーⅡ 「ビスホスホネート製剤と歯科処置」に参加して

34期生 甲 斐 朝 子

ビスホスホネート製剤はヤバイ！ 抜歯したら骨壊死するらしいゾ。と、雑～な知識を持ってセミナーに参加しました。半分は正解、半分は不正解というところだったのでしょうか。

ビスホスホネート（BP）製剤がなぜ必要なのか、どのように作用するのか、組織内では何が起きているのか、画像にはどう描出されるのか、では臨床を行う上でどうしたら良いのか……。3時間ノンストップでのセミナーでしたが、とても分かりやすい流れで全体の話が進み、最後まで集中して聞くことができました。

骨粗鬆症になるとADLとともにQOLは低下します。骨折すると寝たきりに近づくし、そうだろうなとは思ってはいましたが、「腰が曲がったおばあさんに、腰が曲がっていますねと言うと非常に傷つく」というお話を聞き、データを見て、曲がっているという事実だけでそんなにQOLが下がるのかと驚きました。甘い認識でした。

また、ビスホスホネート（BP）製剤の骨折抑制効果は明らかなようでした。しかし、骨折治癒機転を阻害しない（よく効く）という側面と、顎骨壊死の可能性と…天秤にかけないといけない場合もあるということを意味しています。

BP製剤とBP関連顎骨壊死（BRONJ）治療で難しいところを集約すると、

- (1) 全身疾患の関係で投与期間が長期とならざるをえず、やめることも難しい場合が多い。
- (2) 投与期間や反応に個人差があるので、休薬やフォロー期間が数字としてはっきり言えない。

以上、2点につきると感じました。だからこそ、口腔内に感染源を作らないよう努めること、リスクファクターの診査とインフォームドコンセントが大事になってきます。

同じ量のBPを体に入れたとしても、顎骨に壊死が起こるのはなぜなのか。BRONJの発症機序はいまだ明確ではないそうですが、原因歯が明確であることから考え合わせると、感染がリスクとなり得るのは確かなようです。私たち歯科医師が患者様にできることは限られるかもしれませんが、確実にできることはあります。

今回のセミナーを受けて、BRONJの病態と処置において大切な点がよく分かりました。しか





し実際にBP製剤を服用している患者様が目の前に現れて、外科的な処置が必要となったら……。正直、迷うと思います。個人差が大きく、長期内服薬での蓄積データがないので、しょうがない部分もありますが、正しい知識を持った上で、患者様1人1人に対してできること、最善の道を一緒に考えていくことが患者様のためになると感じました。

また、曖昧な知識や間違った認識を正すため、日々勉強が必要であると、身がひきしまった3時間となりました。有意義なセミナーを開催していただき、ありがとうございました。

新潟大学創立60周年記念事業 ホームカミングデーの報告

同窓会副会長 野村 修 一
ホームカミングデー担当

新潟大学創立60周年記念事業の一環として、10月18日(日)の午前中に同窓生が母校を訪れる「ホームカミングデー」が開催された。歯学部と歯学部同窓会は、「あの時君は若かった：歯学部今昔物語」をテーマに写真パネルを展示した。会場となった医歯学総合病院歯科外来棟待合室には、開始時刻の午前10時前から同窓生が集まり始めた。写真パネルは、「創世記の学生生活」、「歯学部の歩みから」、「思い出の部活、桜…」、「同窓会活動」、「同窓会支部活動」、「同窓会学術活動」、「クラス会 誰か分かりますか？」のパネル7枚で構成されており、参加者は懐かしい写真を食い入るように眺めていた。

参加者の多くは、前日にホームカミングデーに合わせて新潟でクラス会を行った同窓生の皆さんで、寝不足ながら青春の思い出に浸っている様子が窺えた。普段はめったに会うことのない、卒業年度の異なるクラスの同窓生が楽しそうに話しこ

んでいるのが印象的であった。当日は日程を変更して歯学祭も同時に開催されていたので、参加者はパネルを見た後に、歯学祭の会場となっている診療室を回ったり、茶室で寛いだりして時間を過ごしていた。その後は、2008年ノーベル物理学賞受賞者の益川敏英教授の記念講演会に向かう人や帰路に付く人など、三々五々、学び舎をあとにした。

また、歯学祭に来場された一般市民の方々も歯学部と歯学部同窓会の歩みを興味深そうに観覧したり、無料ドリンクコーナーで休憩をとったりしていた。

最後に、この日のためにクラス会の期日や開催場所を変更して下さった卒業期もあり、改めて、同窓生の皆様のご協力に感謝致します。

なお、ホームカミングデーの展示パネルは、同窓会HPでご覧になれます。



教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	21. 10. 1	北 川 純 一	□腔生理学分野・准教授	
採用	21. 10. 1	中 富 満 城	硬組織形態学分野・助教	
採用	21. 10. 1	寺 田 典 子	□腔解剖学分野・教育研究高度化研究員(契)	
退職	21. 10. 15	寺 田 典 子	□腔解剖学分野・特任教員(特任助教)	□腔解剖学分野・教育研究高度化研究員(契)
採用	21. 10. 16	寺 田 典 子	□腔解剖学分野・特任教員(特任助教)	□腔解剖学分野・教育研究高度化研究員(契)
任期満了	21. 11. 30	矢 作 理 花	21. 12. 1 医員採用	摂食・嚥下リハビリテーション学分野・特任助教
定年退職	22. 3. 31	染 矢 源 治		歯科侵襲管理学分野・教授
定年退職	22. 3. 31	五十嵐 敦 子		□腔生命福祉学科・准教授
退職	22. 3. 31	高 橋 英 樹		□腔生命福祉学科・准教授
定年退職	22. 3. 31	佐 藤 尚 美		□腔環境・感染防御学分野・助教
任期満了	22. 3. 31	渡 辺 洋 平		歯科矯正学分野・教務補佐員
任期満了	22. 3. 31	大 石 めぐみ		□腔解剖学分野・研究支援者

【事務部等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	21. 7. 31	酒 井 健 一	学務部学生支援課	医歯学系歯学部事務室学務係
採用	21. 8. 1	鈴 木 寛 則	医歯学系歯学部事務室学務係	
採用	21. 10. 1	小 柴 昭 彦	歯学部事務室総務係・特任専門職員	
採用	21. 10. 1	早 川 菊 枝	摂食・嚥下リハビリテーション学分野・産学官連携技術者	
定年退職	22. 3. 31	永 野 俊 明		医歯学系歯学部事務室長
定年退職	22. 3. 31	竹 内 亀 一		□腔解剖学分野・技術専門員
定年退職	22. 3. 31	星 野 正 明		□腔解剖学分野・技術専門員
定年退職	22. 3. 31	平 野 秀 利		□腔生理学分野・技術専門員
定年退職	22. 3. 31	本 間 ヒ □		生体材料学分野・技術専門職員
任期満了	22. 3. 31	宮 澤 友 美		硬組織形態学分野・事務補佐員

病 院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	21. 10. 1	若 松 里 佳	歯の診療科医員	新規
退職	21. 11. 30	堀 井 信 哉	□腔外科レジデント	

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	21. 11. 30	船 山 さおり	口腔保健科医員	
退職	21. 11. 30	小 林 孝 憲	口腔外科医員	
退職	21. 11. 30	矢 作 理 花	医歯学系特任助教	
採用	21. 12. 1	矢 作 理 花	口腔保健科医員	医歯学系特任助教
育児休業	22. 1. 9	昆 はるか	噛み合わせ診療科助教	
退職	22. 1. 31	山 本 真 也	口腔保健科レジデント	
採用	22. 2. 1	船 山 さおり	口腔保健科医員	新規
退職	22. 3. 31	大 瀧 祥 子	摂食嚥下講師	
退職	22. 3. 31	富 田 文 仁	歯の診療科助教	

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	21. 10. 1	近 藤 淳 子	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士	新規
退職	21. 12. 31	高 倉 一 恵	看護部東3階病棟	
退職	21. 12. 31	鈴 木 歌 織	看護部東3階病棟	
育児休業	22. 2. 25	河 合 由美子	看護部東3階病棟	
任期満了	22. 3. 31	佐 藤 菜 美	看護部東3階病棟	
退職	22. 3. 31	山 田 秀 子	歯科外来	
退職	22. 3. 31	村 山 美根子	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士	

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	21. 12. 1	長谷川 亨	経営企画課専門職員	新規

編 集 後 記

雪の降る中、編集後記を書いています。今年は26年ぶりの新潟市大雪だそうで、方々で車が動かなくなっています。最近チェーンをつけている車を見なくなりました。前号に続き、この号も学生特集となっています。依頼した人たちが比較的期限を守ってくれたので編集も楽になりそうですが、積極的に書こうという人は少ないようです。“おやしらず”がなくなって何年になるのでしょうか。これも移り変わりでしょうか。2670年2月7日

小林 博

今回初めて歯学部ニュースの編集員を担当させていただきました。この度、原稿をお願いした先生方および学生さんにはお忙しいなか原稿依頼を快くお引き受けいただき大変感謝しております。また、仕事の内容を全く知らなかった私でも編集委員長、編集委員の先生方のご指導、ご協力のおかげで何とかこなせました。執筆と編集の先生方にこの場を借りて改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

言語治療室 寺尾恵美子

今回の歯学部ニュース編集では、「学会リポート」、「ポリクリを終えて」、「早期体験実習」を担当させていただきました。ご寄稿くださった皆様には、原稿執筆を御快諾いただき、また、締め切りもしっかり守っていただいて大変助かりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

う蝕学分野 富田 文仁

今回初めて歯学部ニュースの編集委員を務めさせていただきました。原稿の依頼に関して、連絡の不行き届きや失礼の数々、改めましてここでお詫びを申し上げます。それにしても原稿をお願いした先生方の対応の早いこと。当たり前のことですが、期限を守ることと信用ということを実感しました。ありがとうございました。

生体歯科補綴学 富塚 健

「歯科衛生部門だより」と「素顔拝見」の編集を担当させていただきました。原稿を通して、いつもとは違った先生方の一面を伺うことができ、新たな発見を得たとともに貴重な経験をさせていただきました。

御多忙中にもかかわらず、原稿依頼を快く承諾いただき、御寄稿下さった皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

顎顔面口腔外科学分野 藤田 一

歯学部ニュース

平成21年度第2号（通算116号）

発行者 新潟大学歯学部広報委員会

編集責任者 小林 博

編集委員 塚野 國和、寺尾恵美子、富田 文仁、
富塚 健、藤田 一

印刷所 (株)プライムステーション

— 表紙・裏表紙の写真の説明 —

表紙

撮 影 地：関屋分水（新潟市）

撮 影 日：2010年3月

使用機材：OLYMPUS E-3/ZUIKO DIGITAL ED 12-60mm F2.8-4.0 SWD/
プログラムオート/記録画素数：3648×2736・JPEG/ISO：200/ホワイト
バランス：オート

コメント：何度も繰り返し撮影して見飽きているはずの関屋分水の夕景ですが、撮るたびに違う表情に会えるような気がします。

一瞬として同じ時間は、ない。

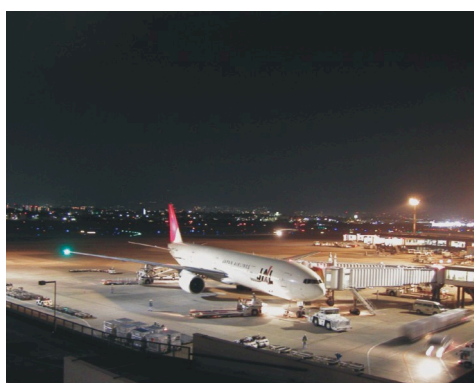
当たり前の風景が、美しい。

本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：OLYMPUS E-3・E-P1、CANON PowerShot S90

レ ン ズ：ZUIKO DIGITAL ED 12-60mm F2.8-4.0 SWD、ZUIKO DIGITAL
ED 50-200mm F2.8-3.5 SWD、LEICA D VARIO-ELMAR 14-150
mm F3.5-5.6 ASPH XSM MEGA O.I.S.、M.ZUIKO DIGITAL
ED 14-42mm F3.5-5.6、LUMIX G 20mm F1.7 ASPH.

撮 影 者：林 孝文



学生編集スタッフ大募集中!!

歯学部広報委員会では、歯学部ニュースの充実をさらに図っていくため、編集スタッフを募集しています！

歯学部のこんな姿を伝えたい、あんな企画をやってみたいという学生のみなさんを大募集中です。

一緒に歯学部ニュースをつくって、歯学部を盛り上げてみませんか？

【募集要項】

編集スタッフ募集に応募したい学生は歯学部広報委員会まで。

歯学部ニュースBack Number : <http://www.dent.niigata-u.ac.jp/news.html/>
新潟大学歯学部ホームページ : <http://www.dent.niigata-u.ac.jp/index.html/>

平成21年度第2号【No.116】編集・発行／新潟大学歯学部広報委員会